

昭和二年十月廿五日第三種郵便物
 昭和五年七月三十日印刷（毎月一日）
 昭和五年八月一日發行（一冊發行）

通類編

第八卷
 八月号



北英画


劇界人氣第一

松竹社長 大谷竹次郎

最近所有事業が不況の状態にある時、獨り五郎君の興行のみが相當の成績を収めつゝあるのは、抑々何を意味するものであらうか。曾我廼家五郎君一座は此處數年來、年々その上京の度數をたかめ遂に一年の半を東京に於て興行するに到つたのは取も直さず現社會が痛切に慰安と笑ひを要求してゐる證據に他ならないのである。この時に當つて五郎君の全集がアルスから公にされる事は、誠に當を得たもので眞に時代の要求と云はざるを得ない。喜劇俳優として、又その作者として獨歩の地位にある君の笑ひは、舞臺とその作品と相俟つて、必ずや吾々に明るい明日の世界を展開させる事であらう。

大好評大人氣の 曾我廼家五郎全集

第一回

戀を忘れなれ女

外七篇

これはズバ抜けて面白い
閻魔さんも笑ひ出すだらうと
大評判大人氣です
實演そのまゝ寝ころんで樂し
める、一日の疲れも暑さも不
景氣もけろりと忘れて哄笑爆
發！ 元氣快復！

急切々迫申込殺到

賣切れぬうちお早く書店へ

申込金 豫約募集。全十二巻。メ切八月十五日
ナシ。一冊壹圓五拾錢 送料十錢

振替東京二四八八

ス ル ア

東京神田今小路

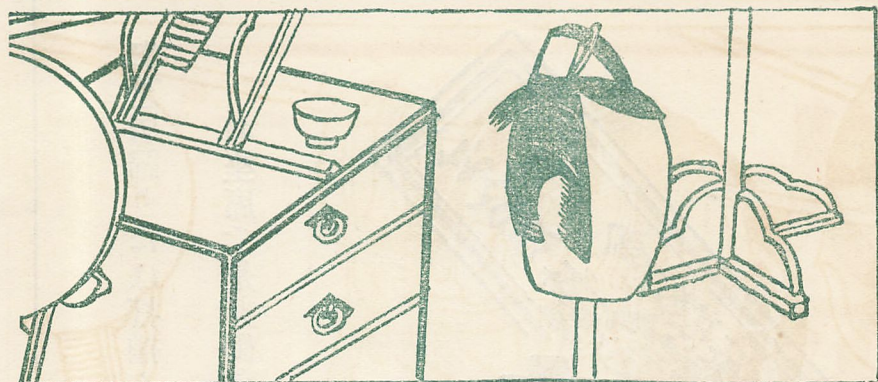
お坐席では是非御會食を

嘉興食良堂

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋

月味必
毒与子
部日理
部日理



道頓堀

昭和五年八月號

第四十七輯

◇表紙 (夏祭浪花鑑團七九郎兵衛).....

口

●浪花座第一劇場◇「累物語」壽三郎の與右衛門、石河の累◇「旅鴉」三好のおまき、政雀の伴三太郎、壽三郎の三好屋瀧十郎「舞臺面」◇「累物語」壽三郎の與右衛門、◇千早の娘お吉◇「女怪」藤村の金子晋也、石河の北村桂子、山田の山六郎◇「伊達模倣戀染分」壽三郎の重の井新左衛門、政雀の女馬士おさん◇「旅鴉」藤村の浪花屋藤兵衛「累物語」西條の久助女房、石河の累、元安の久助、山口の金五郎◇角座「幽燈夜話」小織の櫻中軒燕藏、都築の櫻中軒桃水、木下のお豊の幻影、金剛の竹本小ふじ◇木下の妻お豊、井上の娘菊江、芝田の大軒燕藏◇木下のお豊の幻影、都築の櫻中軒桃水◇「眼ばかりの男」原田の探偵堀川、芝田の大澤、藤本の探偵長堀田、栗島の話術者、「眼ばかりの男」モントルジュウカフエーの舞臺面◇文樂座「夏祭浪花鑑」榮三の團七九郎兵衛◇「伊達娘戀緋鹿子」文五郎のお七◇「菅原傳授手習鑑」松王首賞檢の場◇松竹座實演「センチメンタル、ワイフ」渡邊篤の北宮光夫、栗島すみ子の妻壽子其の舞臺面◇樂天地田宮貞樂一派◇「かむろの仇討」善千哉の遊女、貞樂の清吉、「その隣間」春彦の原田、貞樂の鈴木、喜扇の妻しづ◇「かっぱれの記念撮影」中村鷹治郎白井松竹社長、關屋敏子◇京都南座◇「謎帯一寸徳兵衛」延若の大島團七◇「攝州合邦辻」福助の玉手御前延若の合邦◇「川上地藏」の舞臺面◇「謎帯一寸徳兵衛」福助の徳兵衛、延若の團七、扇雀のお辰◇扇雀の俊徳丸、福助の玉手御前、成太郎の浅香姫◇神戸松竹劇場◇「東海道四谷怪談」我童の田舎娘お岩、橘三郎の民谷伊右衛門、ひとしのお梅、霞仙の秋山長兵衛、◇我童のお岩九團次の直助權兵衛、橘三郎の伊右衛門、我童の佐藤與茂七

繪

◇扉 (第一劇場八月公演スケッチ).....田中滿彦畫

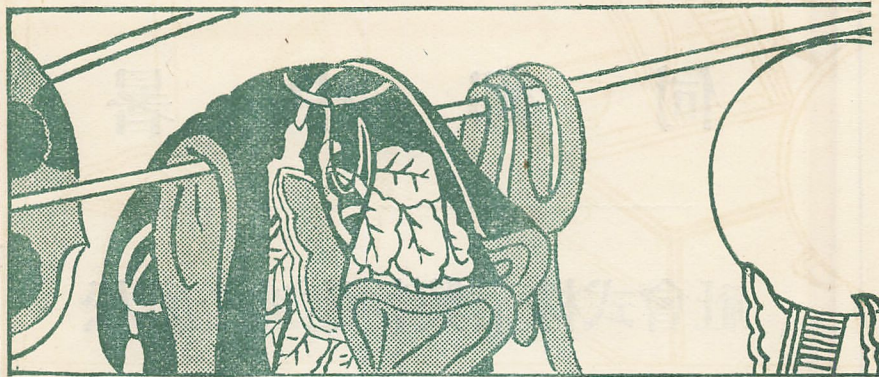
◇男重の井とお岩.....高安吸江 (二)

◇暑さ解脫累物語.....倉田啓明 (六)

◇累の狂言.....濱村米藏 (八)

◇第一劇場.....北村兼子 (一〇)

◇文樂座注文帳.....西尾福三郎 (二〇)



夏祭浪花鑑……………(一二)

卅三問堂棟木由來……………(二五)

◇合邦の人々……………森ほのほ(三四)

◇福助と菊五郎のお辻……………高谷伸(三六)

◇夏の東京劇界……………菅原寛(四一)

芝居に現れたる忍術……………大澤休象(五二)

芝居怪談錦繪誌上展……………(五五)

累物語(第一劇場)……………(一二)

女怪(第一劇場)……………(一六)

謎帶一寸徳兵衛(京南座)……………(三九)

眼ばかりの男(角座)……………(四四)

◇お岩を語る我童……………(四四)

◇初日の舞臺裏から……………六田甲二(四六)

□劇壇往來……………(六二)

□芝居ニュース……………(六四)

脚本「旅鴉」……………(浪花座八月上演)……………神田榮一(六六)

△挿繪カット……………田中満彦(八二)

△編輯後記……………壽美多郎(八二)

署 中 御 伺

松竹土地建物興業株式會社

大阪市長久左衛門町

相 談 役	同	同	同	同	監 査 役	同	同	同	取 締 役	同	同	常 務 取 締 役	專 務 取 締 役	同 副 社 長	取 締 役 社 長
橋 本 喜 作	堤 友 次 郎	白 川 朋 吉	立 花 良 介	金 澤 利 助	井 上 重 正	前 川 佐 市 郎	橫 江 萬 治 郎	豐 島 寅 吉 郎	城 戸 四 郎	福 井 福 三 郎	岡 清 三 郎	多 田 福 太 郎	白 井 信 太 郎	大 谷 竹 次 郎	白 井 松 次 郎

留旗信勝旗

劇場幕幟

綴帳

梅原商店

神戸市

楠社西門

電話 元町一六五番



に粧化淡な楚・清

粉白水園御新

色櫻・色肌・白純

錢十五各



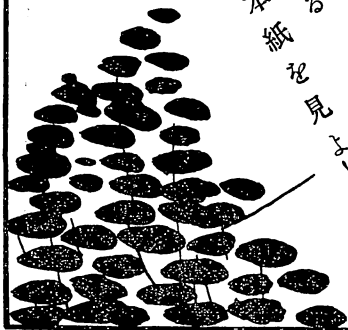
園蝶胡束伊 鋪本

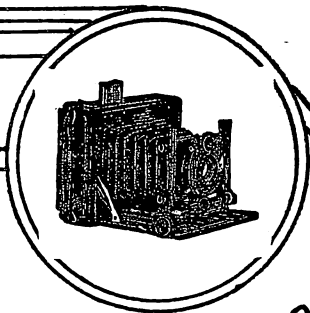
躍進!!

躍進!!



關西業界に一大センセーションを
巻き起すの本紙を見よ!!
更新





より
面影残す繪姿も
去りし昔の想はれて……

片後風景、其他凡有る物を
寫眞や小型映画に残したいと
思召しこの時は是非共

長堀橋は南詰 小西六へ

寫眞機は

リリーカメラ 小型活動
パールカメラ 寫眞機械
アイデアカメラ 各種在庫
バーレットカメラ

(カタログ進呈)





八月の花座・第一劇場

壽三郎の與右衛門 石河の累

座花浪の月八

“
旅
鴉
”

壽三郎の三樹屋瀧十郎
三好のおまき
政雀の作三太郎



吉お娘の早千・太源の田高・郎十瀧屋三の郎三壽・郎太三の雀政・きまおの好三・番屋樂の安元

千早の娘お吉



“ 累物語 ”

壽三郎の……奥右衛門



“ 女怪 ”



藤村の金子晋也
石河の北村桂子
山田の北村桂子
山田の北村桂子
山田の北村桂子

浪花座の八月公演

“伊達模様戀染分”

壽三郎の重井新左衛門
政雀の女馬士おさん



“語物果”

助久の安元・郎五金の口山（らか左）
房女の助久の條西・累の河石



“旅鴉”

藤村の浪花屋藤兵衛

八月の話題

③

A君「つまりは山の魅力も経験と完全な用具とで斷然興味附けられると云ふものさ。其處にはお、そ何等の不安もない、そして山頂の夢の様な絶景の前に、近代生活を味ひ、物語る事が出来るのだ」

B君「海も御同様。むしろ山以上に百パーセントの近代的明色を湛へてゐる。フランスでは秋の流行色は海水浴場から生まれるささへ云はれてるぢやないか」

C嬢「もち。だから流行はもう時間と空間を征服してしまつた事よ。例へば昨日のボンマルシエに現はれたアラモードが今日の三越の飾窓に見られるささふ風に……」

三越の商品券

中元の御贈答に御利用を!!

三越





何事があつても直ちに問題の核心に突入り事件の真相を報ずるを掌を指

關西日報

す如く理路整然常に讀者を誤らざるが本紙の特色

本紙が獨り夕刊新聞として覇を爲すに止まらず全日本の新聞界に於ても鬱然として一大王國の觀があるのは單に面白いからのみではない、讀めば必らず胸奥を震撼されずには居ない感激と正義の文字で紙面が盛上つて居るからである。人情風俗の活映畫、財界の波、商機の動きには正確な羅針盤、讀みたい新聞、讀まねばならぬ新聞、讀まずには居られぬ新聞。

發行所 大阪東區北濱四丁目



大阪新聞

夕刊六頁

版生學版才知了

(害無畜人) 藥取蚊の的理合・許特賣專

マイツ蚊取香

◇蚊取りには、線香より

よく効いて安くつく

イマツ蚊取香に

限る。

●新案の蚊取香燻焼器

◇昨年の燻焼器の欠點を補ひ、即座に渦巻線香にして、燃べるメチキな燻焼器が發明されました。

是非御使用を!

◇渦巻線香三本の効あつて安くつきます。



(害無畜人) 性香芳式新最

專賣特許

イマツ芳香油

▲便所くさみ止

効力カンブラ油の二倍
片腦油の二倍

●芳香を發し

●臭氣を止め

●ウジを殺す

◎大掃除には衛生上

便所其他不潔の場所へ

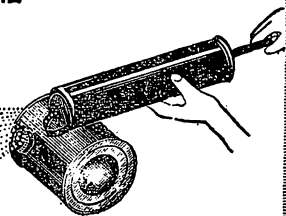
是非本品をマカれよ!

▲南京虫退治には

圖の如く噴霧器又は霧吹で

カケると即死す!

◎本品を撒布すれば、人好きのする芳香を満たし、同時に驅虫消毒の力強大にして、傳染病の豫防となる。尙毒虫に刺された時に、ツケると痛痒はすぐ治る。



大阪市西區京町堀通二丁目

今津化學研究所

電話大阪六八〇八九番

角座の八月興行

“幽燈夜話”

小織の櫻中軒燕藏



都築の櫻中軒桃水
木下のお豊の幻影
金剛の竹本小ふじ



角座の八月興行
 “幽燈夜話”

小井木
 織上下
 ののの
 櫻娘妻
 中菊お
 軒
 燕
 藏江豊



木下のお豊の幻影
 都築の櫻中軒桃水



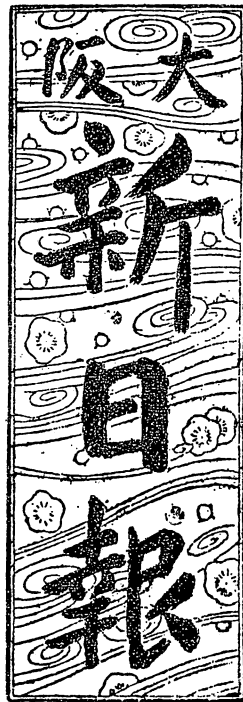
劇廣宣圖
畫昔傳案飾



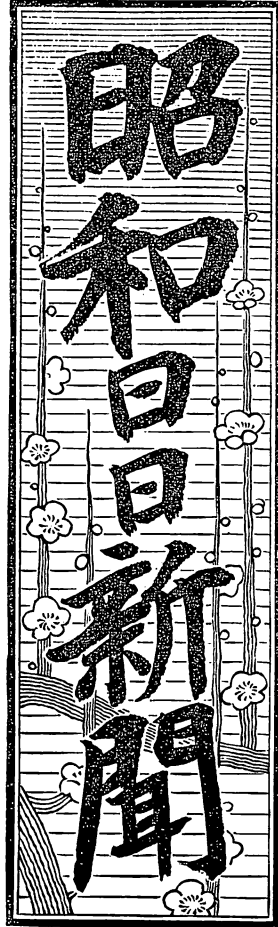
阿久田號

神戶市水通三丁目六一
電話漢(5)二四〇番

一番面白い



夕刊新聞



(刊 夕)

一部金貳錢 一ヶ月金五拾錢

本社 大阪市西區靱南通四丁目十番地

電話土佐堀三五五六番
振替口座大阪五五三八九番

支局 東京、神戸、京都、名古屋

便所の防臭に困る方は今直ぐ

製創氏郎太彪林 士學藥



（錢拾五金小瓶一 定價）
（圓壹金大瓶一）



△使用法 一回十滴乃至十數滴づゝ（場所により多少の加減を要す）一回多量に撒布するは却て効力を減する事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

家庭必備品

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがありません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒でありません。

「アポロ」ハ他の薬（カンブラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など）と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所に「アポロ」の臭ひが残らぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かですから經濟にもなります。

到る處の藥店

各百貨店に販賣す

元 賣 發

會 商 榮 光

番五一一三三局本話電
番七一一三三阪大替振

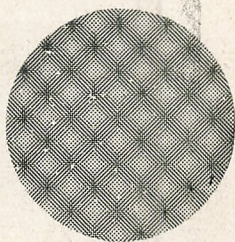
區東市阪大
目丁三町見伏

話術者
栗島狭衣



眼ばかりの男

原田の探偵
芝田の
藤本の探偵長
梶川三吾
太宰俊蔵
堀田秀雄



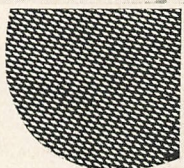
(下)
モントルヂユ
カフェーの場
小波の怪青年



八月の文楽座から

“ 夏祭浪花鑑 ”

榮三の 團七九郎兵衛



“ 伊達娘戀緋鹿子 ”

火の見櫓の段

文五郎のお七



松王首實験の場

“ 菅原傳授習鑑 ”

牛 肉 寶 來 煮

カーン！

凄い當り

あつ！ ホームラン

至寶

牛 肉 寶 來 煮



大阪 高麗 橋
松 下 店 株式會社

全國到處食料品店に有り

銀行會社等の經濟記事は精細を極め
演藝映畫其他の趣味讀み物は豊富



四面滿載の市場商況殊に
米界の報道は日本一の誇り！

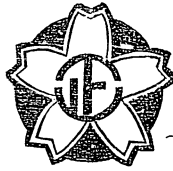
所 行 發

社 聞 新 夕 每 阪 大

會 社 株 式

目 丁 一 中 島 堂 市 阪 大

〇四六二・九〇八一 } 北話電
〇〇六六・〇五〇六 }
番四二四五三阪大 座口替振



桃色新聞は強く正く景氣よく世に間家庭を明るくす

錦城將軍米田誠夫經營

名實共に日本唯一の無休刊紙



(刊夕)

△演藝……芝居に關する特種雜報
△花柳……讀んで面白い廊の特種
△映畫……本社獨特のニユース滿載



(刊朝)

生氣潑瀾たる日本一の生きた新聞

大阪東區北濱四丁目六番地

電話本局 二七〇六 〇六九四 〇六八四 振替大阪五〇二七

完全殺菌

世界的に最も信頼される

セモリ

Semori

腔内ニテ持続性强殺菌泡ヲ發生シ其擴大力
ニヨリ最深部ニ浸徹シ微生物ニ最モ完全ナ
ル障壁ト殺菌ノ重複作用ヲナス無毒性ナル
ガ故ニ使用久シキニ亘ルモ障害ヲ來サズ
●花柳病豫防ニ用ヒラル (説明書進呈)

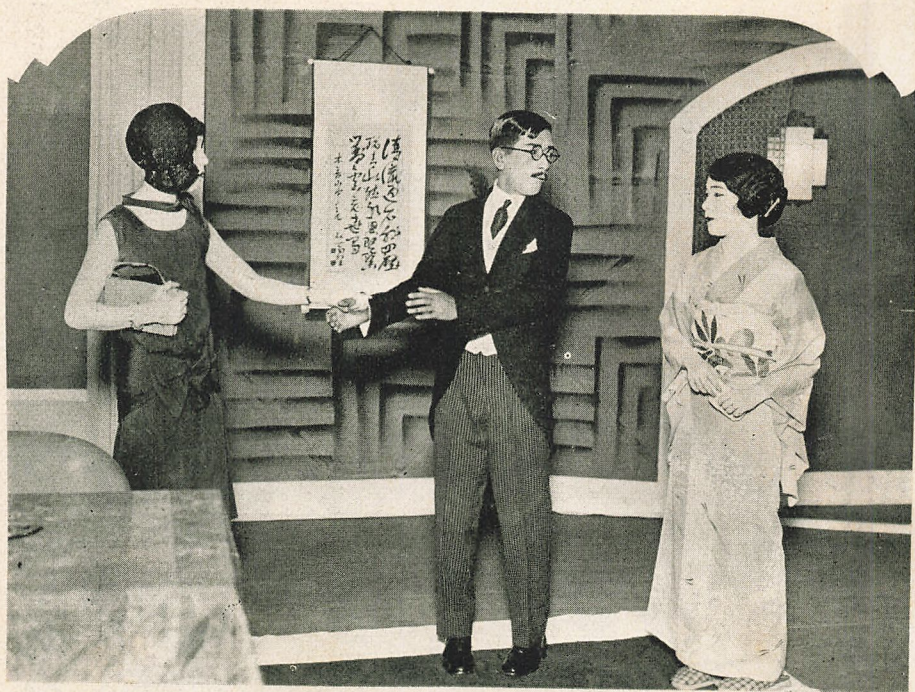
輸入元 大阪市南久太郎町 尾村商店
代理店 東京市本町四 田邊元三郎商店
大阪市伏見町三 光榮商會

松竹座の實演

喜劇「センチメンタルワイフ」



渡邊篤の北宮光夫
栗島すみ子の妻壽子



子芳部岡の崎谷・宮北の邊渡・子壽妻の島栗

樂天地貞樂一派

“その瞬間”



春彦の原田定二郎
貞樂の料理人鈴木
喜扇の妻しづ



“かむろの仇討”

喜千哉の遊女
貞樂の清吉



水清き

瀧の流れ

鮎飛び

鯉躍る

新緑の

大庭苑

暑中御伺



烹割代名

自一至三三三番
電話 七三三番

氣

電

天王寺公園

大阪一の夕刊

関西中央新聞

ユカイな

面白い

記事満載

日曜口八頁



暑中御見舞申上候

松竹技藝部

顧問 白井松次郎

委員長 中村鴈治郎

評議員 中村福助

嵐 巖笑

(いろは順)

委員 市川市藏

林 長三郎

片岡 我童

中村 魁車

市川 右團次

坂東 壽三郎

實川 延若

暑中御見舞申上候

第一劇場

浪花座演出

坂東 壽三郎

三好 榮子

西條 靜子

浪花 千榮子

六條 波子

井上 關彌枝

香取 幸枝

石河 薰

中山 政雀

山口 俊雄

進藤 英太郎

阪東 豐之助

伏見 正光

高田 亘

沼田 弘

吉田 正義

元安 豐雄

藤村 秀夫

千早 晶子

第一劇場

アングロス井ス

ミルクチョコレート

コーヒキャラメル

チョコ
レート キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元 株式會社 横山商店

電話東(94)二〇六一番





七月二十一日から八日間浪花座に開催され
た名流舞踊演藝會の初日の一シーンです、
中村鴈治郎丈と關屋敏子嬢とを白井松竹社
長が休憩室で双方を紹介し『名人會を見物
の名優と名歌手の顔合せ』の一場面が展開
されました。

京南座八月興行
 “謎帶一寸徳兵衛”

延若の大島團七



“攝州合邦辻”

福助の玉手御前



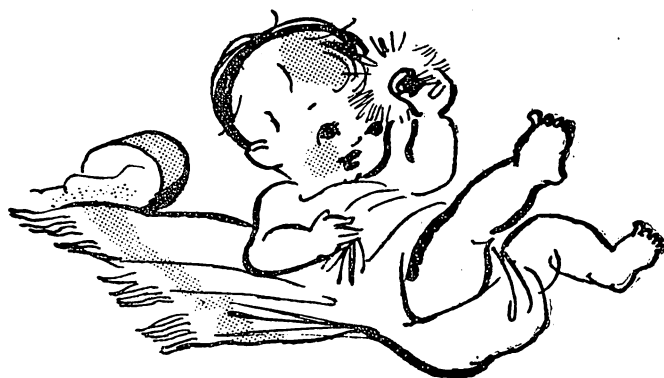
無鉛撒布藥

ルーロカッシ

治	豫	タ	ア
		ッ	セ
療	防	レ	
		の	モ
に	こ		

効果の確實な撒布藥として
専門醫家の推奨を受けつゝあり

内務省衛生試験所無鉛證明



東京和光堂大坂

暑中御見舞申上候

角座八月演出

栗	澤	金	小	富	富	山	中	登	井	木	小	芝	小	藤	山	武	新	原	都
鳥	井	剛	松	士	士	口	村	喜	上	下	織	田	波	本	本	澤	田	田	築
狹	光	麗	孝	岡	川	奈	仲	岡	八	關	桂	若	正	之	恒	吉			文
衣	代	子	子	枝	惠	子	次	代	彌	子	郎	新	朗	雄	彦	雄	里	孝	男

暑中御見舞申上候

樂天地出演

喜樂會

田宮貞樂

外一同拜



大
阪
北
濱



スナキナあぶら取紙

皆様の

おスナナ……

道頓堀……

スピード時代の

お化粧用……

スナナ

あぶら取紙

(各化粧品薬店にあり)

製造元

中田スナキナ屋

大阪

發賣元

朝日堂株式會社

大阪

八月の南座・關西大歌舞伎

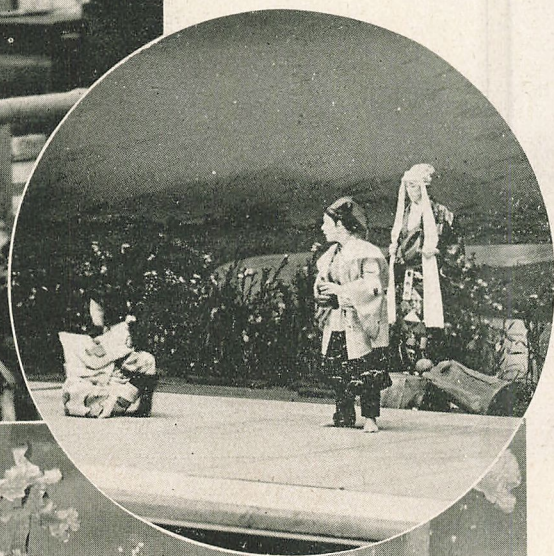
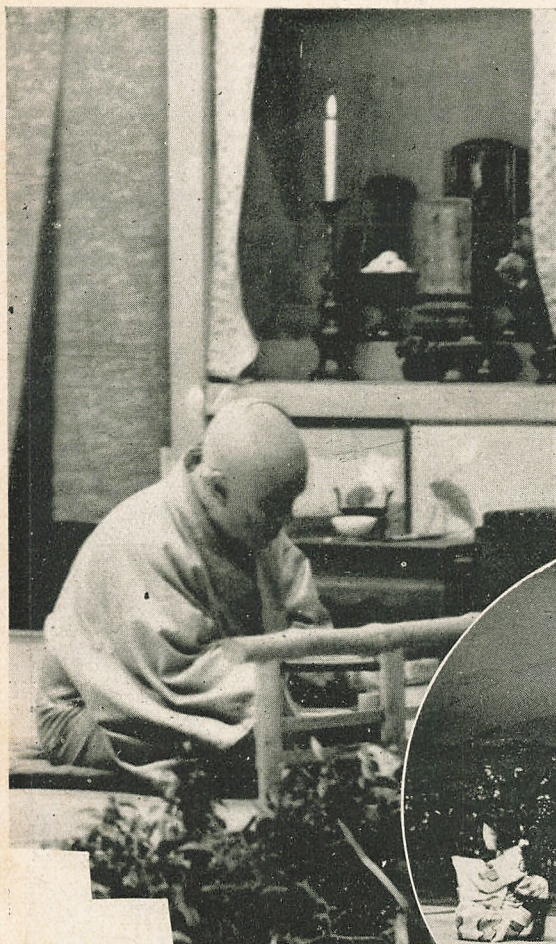
川上地藏

舞臺面

攝州合邦辻



延若の合邦



辰おの雀扇

七團の若延

衛兵徳の助福



座 南 の 月 八

丸 徳 俊 の 雀 扇
前 御 手 の の 助 福
姫 香 淺 の 郎 太 成

“ 辻 邦 合 州 攝 ”

愛兒の保護
外用藥

ペルメル

罪なき愛兒を

蟲が喰ふ！

これから秋へかけて蚤、蚊、南京蟲が
愛兒を襲つて苦しめます。

蟲を防ぐことは、中々容易でないから
かまれたあとへ、すぐペルメルを御用
ひ下さい、痛み痒みは直ちに治り、恐ろ
しい化膿や、發熱の原因を防止致します。
愛兒の保護藥として家庭にペルメルを御常
備下さい。

其他日焼止、化粧下、お白粉落し、
傷一切、水虫、いんきん、吹出物
皮膚病に特効あり

定價 廿錢・卅錢・四十錢・一圓

金鳥香本舗 上山ペルメル共同商社

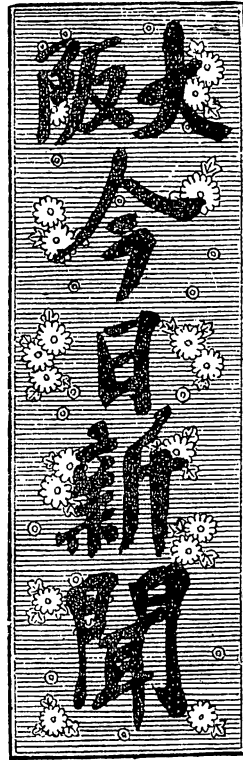
演出座南・都京

新 國 劇

演出 座都京・都京

中井哲	野村清一郎	金井謹之助	南吉太郎	島田正吾	丸茂三郎	畑中蓼坡	秋月正夫	小川虎之助	伊藤田鶴夫	雄島三之介	辰巳柳太郎	高木繁	鈴木章吉	久松喜世子	山路千枝子	二葉早苗	永島優子	初瀬晉羽	理事 俵藤丈夫
-----	-------	-------	------	------	------	------	------	-------	-------	-------	-------	-----	------	-------	-------	------	------	------	------------

日 刊



年 中 無 休

一 ヶ 月

金 五 十 錢

更生後の大阪今日新聞はおそらく新聞界に於ける一種の權威としてメキ／＼紙數増加致しました。是非購讀せられべき新聞であります。

新興帝キネ特作映畫

原作脚色 川口松太郎
監督 松本英一
撮影 二宮義曉

カフエーの女

香椎園子入社第一回作品
松本泰輔特別出演

監督 鈴木重吉
原作脚色 川口松太郎
撮影 三木茂

關屋敏子嬢主演

子守唄

中野英治・松本泰輔・關屋喜美子 出演



神戸松竹劇場八月の舞臺から

“ 東海道四谷怪談 ”

我童の田舎娘お岩

(實はお岩の亡霊)

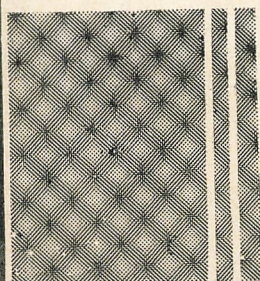


橘三郎の
ひとしの
霞仙の
民谷伊右衛門
お秋山長兵衛

“東海道四谷怪談”

我童のお岩

神戸松竹劇場



九團次の
橘三郎の
我童の
直助権兵衛
民谷伊右衛門
佐藤與茂七

夏枯一蹴！涼味萬斛たり我等がレパトリー

近 日



公 開

林 長 二 郎 主 演
井上金太郎監督 堀 正 晶 子 助 演
か た わ 雛

月 形 龍 之 介 主 演
惡 麗 之 助 監督 環 湊 歌 明 子 助 演
喜 彌 多 次 は し ご 道 中

阪 東 壽 之 助 主 演
冬 島 泰 三 監督 河 上 君 榮 助 演
勝 関

高 田 浩 吉 主 演
小 石 榮 一 監督 環 若 水 絹 子 助 演
街 の 勇 士

市 川 右 太 衛 門 主 演
白 井 戰 太 郎 監督 大 江 美 智 子 助 演
上 州 無 宿 陣

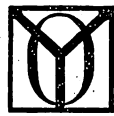
嵐 德 三 郎 主 演
行 友 李 鳳 原 作 廣 瀬 五 郎 監 督
巷 説 化 鳥 地 獄 魔 性 劍

森 靜 子 主 演
犬 塚 稔 監督 正 宗 新 九 郎 助 演
辰 己 の 小 萬

松竹キネマ株式會社

照明機械器具製作
特別電氣工事請負
電飾點滅設計出願建設

トーキー工事専門



岡本電機工業所

大阪市天王寺區生玉町三番地
電話 南 三 六 九 二 番

大阪市東區農人橋二丁目十二番地

合名
會社

大阪橋本組

電話 東

特長一五八〇番
特長一五八〇番
二六五五番

支店 東京市麴町區九ノ内二丁目六番地

電話九ノ内特長四七八〇・四七八一番

支店 小倉市大阪町十丁目（電話四三〇）

◆技術優秀價格低廉

寫真銅版
亞鉛凸版
フロセス平版
多色刷原版
電氣版

大阪市東成區大今里町五五九

吉谷寫真工藝所

電話東一五七一番

◆期日迅速正確

松竹ビルディング

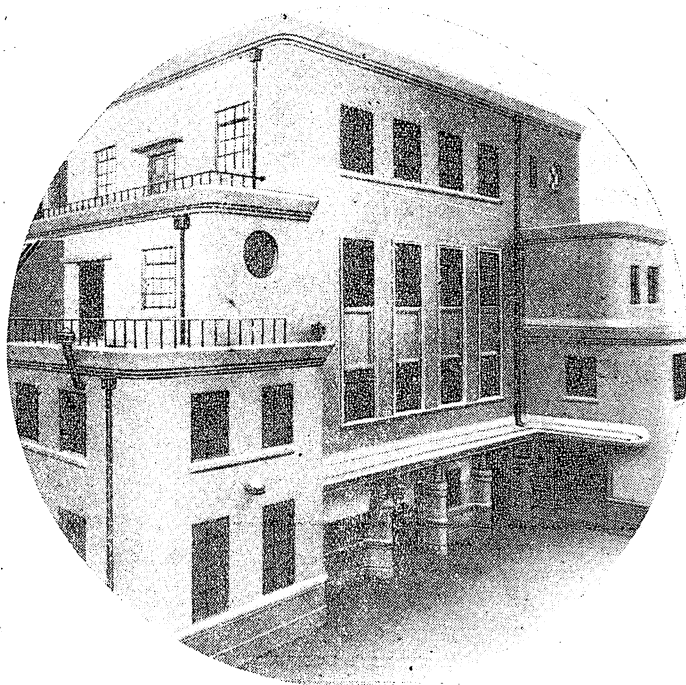
各座の備品倉庫・用度倉庫 地階

ビルの入口・大道具製作部 一階

文楽の倉庫・電気部 二階

衣裳部・小裂部 三階

ガクキ部練習所 四階



松竹衣裳部

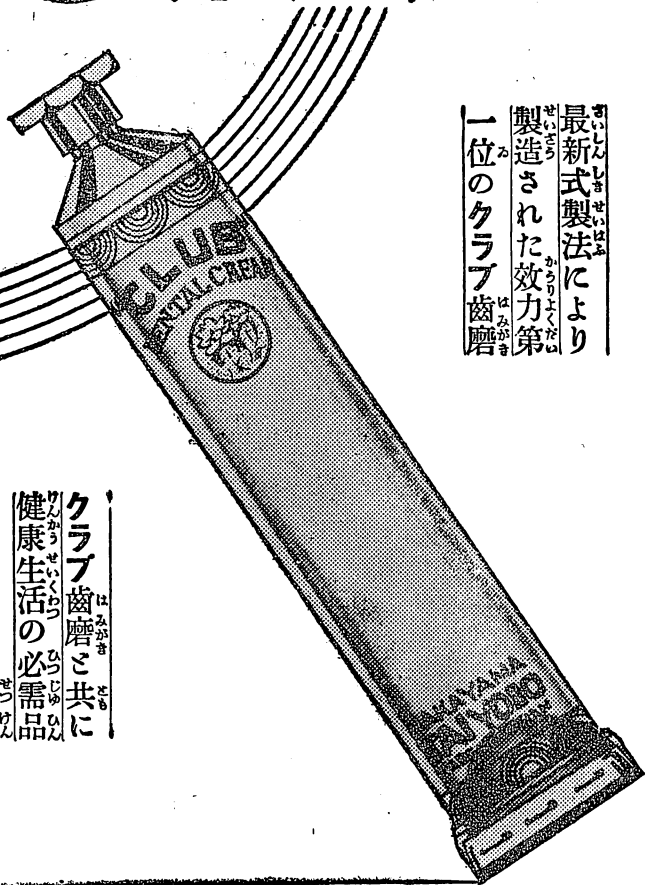
電話 戎五六三四番

の 位 一 第 力 効

磨齒煉ブラク

最新式製法により
製造された效力第一
位のクラブ齒磨

クラブ齒磨と共に
健康生活の必需品
たるクラブ石鹼



石鹼ブラク

の 良 最
鹼 石

誌雜・究研劇演・刊月

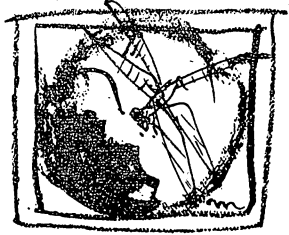
八月號

通類稿

第五年

第十四輯





男重の井とお岩

高 安 吸 江

八月の第一劇場には男重の井が出るそうですが、此れは珍らしいと思ひます。時日が切迫して居るのでゆるく調査する暇がありませんから大略にしておきますが、年代記によると、寛政五年四月五日中午芝居で東海道戀關札と題して上演されたのが始めて、作者は辰岡萬作と申します。

此人は嶋の内疊屋町に住み、狂言作者として寛政享和年間にかなり澤山の著述があります。安永の初は二枚目で、其七年には立作者となり、金襴もの即時代ものに得意で、初代並木五瓶と並んで京阪に名を挙げました。併し寛政九年冬中の芝居での給金附を見ると、立役市川團藏の百四十兩（一座の最高）に對して、作者の萬作は唯の四十五兩でした。辰岡久菊の子で、生れは寛保二年、文化六年九月三日に六十八歳で死んで居ます。もとは中所の女形だったそうです。辰岡萬作は實より花を得る、近松徳叟は花より實に入る、此兩人歿してより後、かゝる作者

を見ず、と曉鐘成がその隨筆に書いて居ります。

其後大阪での上演は、天保十年十一月十三日から大西で容くべ出入の湊、山巡 旭の粧の一番目として、又弘化四年十月千兩幟の前に出て居ます。此時は片岡我童（後に八代目仁左衛門）が伊達新左衛門外二役、中村芝翫（三代目歌右衛門養子）が伊達與作外二役、澤村其答が重の井でいづれも高許でした。此芝翫は若いに似ず禁令をよく守り、樂屋入などにも綿服を用ひ、門弟等へも固く奢侈を禁じた其善行により、前月の上旬に公儀から御褒美を頂戴した爲め、一層町中の人氣が彌増した處、フトした急病で此翌十一月二日に、三十八歳を一期として逝きましたので、梅の旅の二上りや袖香爐や雪のかへ歌などが出来て皆その死を惜んだそうです。

新左衛門の役は、近代では故末廣家中村宗十郎の當り藝でした。私も昔此人や先代我童（即今の仁左衛門の實兄）のを見た

やうに忠ひますが、何分古いことなのでボンヤリしか記憶がありません。それで六二連の評判記を繰つて見ますと、明治十二年に忠孝染分纏として出て居ます。丁度猿若座再興の時、守田勘彌（先代）の助力により新富座から宗十郎を半日廻して貰ひ、七月五日に初日を出した處、珍しい出し物として評判よく、暑くても中々の景氣と記されて居ます。其時の評では、お能鏡の間の諷言、道中双六の間の氣づかひ、おさん身代の悲痛などいづれも末廣家得意の狂言で「ト、おさんに姫君より頂戴の白小袖を着せ、鏡臺を出し、髪を直してやる處、中々一點の打處もなく、當時此役は此人の右に出るものはありますまい」とまで激賞して居ます。此興行中宗十郎が鬚氣に中つて休みましたのを我童が代動したのです。此人も柄に於いて適つて居たと思ひます。

今回は何れだけ上演せられるのか知りませんが、重の井の男女を逆にし、唯親子として名乗らねただけでなく姫君の身代に我子の首をうつのが眼目となつて居るもの、實を云へば前の幕で不義者の重の井を取調べる新左衛門が、事實その相手でありながら少しもそれに氣附かなかつた處や、又その前の、昔の芝居に時々出て来る間違の戀など、エロ的で人間味タップリの場面などの方が、今日の看客には面白がられるだらうと思ひます。劇中劇ですから重の井の方は此位にきり上げて、次はお岩です。夏狂言のお定りで怪談のもの、親玉四谷怪談が此度神戸で演ぜ

られるについて何か書けとの事ですが、最近お化や幽霊に關して一度ならず話したこともあり、又お岩に就ては是迄から諸大家の記載が幾度も方々に出て居ますので、今更何を申上けていゝのか、幽霊だけに一寸迷はされます。

此芝居が原作者の謎帶一寸徳兵衛（たしか八月の南座でやるとか聞きました）に、小幡小平次や累の趣向をもととし、それへ享保六年の夏同日に礫にかゝつた主殺の二人を一個にした直助權兵衛などを加へ、背景を忠臣藏にして作り上げた事、三代目菊五郎が之を上演するについての苦心、宣傳に關する逸話、さては此劇上演以來、迷信的怪奇的挿話などは、既に幾回となく話しくされて居ますから、復繰返す必要もありますまい。

それで私は主として大阪に關する條だけをお話して見ませう。あづま海道四谷怪談が文政八年七月廿七日中村座で初演せられて素晴らしきセンセーションを江戸中にひき起した、其冬十一月七日に尾上梅幸即三代目菊五郎は大坂道頓堀角の芝居へ乗り込み、同十六日から顔見世狂言梅浪華早咲源氏を出しました。明けて九年正月十一日からの二の替には、けいせい伊達抄と伊呂波假名四谷怪談、同二月十三日より此二ツの中へ忠臣藏の四、五、六ッ目加へられたのです。

是から引つゞいて四月十一日初日の同座では妹春山に玉藻前五月五日から玉藻前の代に忠臣藏の九ッ目、反魂香の吃の段、姫小松子の日遊の三段目と差替られました。此五月七日に紅

毛人が見物した。

其一行中かの名高い蘭醫シールボルトが加はつて居て、當時見聞した事を其著「日本」の中に詳しく録して居ます。此事は長らく中芝居と誤り傳へられて居ましたが、近頃濱松歌國の攝陽奇觀が発見せられて其真相が明かになり、シ氏記載の天智天皇といふ盲目のミカドが出る芝居は妹背山だつたのでした。菊五郎は雛鳥となつて居ますが、評判記には雛鳥役代にて残念と書いてあります。話が少し外れましたが、序ですから一寸申しておきます。

それから天保十二年に京の南側に出て居た梅幸はその八月に下阪し、大西へ出勤して忠臣蔵と菅原とを裏表で演じた後、九月十日から天竺徳兵衛韓咄の切に東海道四谷怪談を出し、尾上松緑廿七回忌追善としてやはりお岩、小平、與茂七の三役を勤め、男女蔵の直助權兵衛、當時武道のひんぬきと云はれた新舍市川助壽郎の民谷伊右衛門です。

この助壽郎等は是より十年程以前、即天保一、二年頃にわか太夫で四谷怪談をやつた筈ですが詳細はわかり兼ねます。尙此後嘉永四年四月角の芝居で妹背山の切に出て居ますが、それは子供芝居でした。

さすがに文政九年のは初演だけに大阪の好劇家を驚かし、しく、或は一子相傳の板返に肝をけし、又は様々の變化に恐をなし、「何とも角とも譽ふがなない」「又譽るのもあまりしつこ

ひから暫らく無言で休みませふ」とか大々的好評で歌國は正月十一日角ノ芝居にて江戸尾上菊五郎一人ニ而仙臺狂言の看板出シ初日に御座候、尤昔より二ノ替を一人にて興行の事珍敷儀と却て見物群集致候と書いて居りますが、成程役割を見ると伊右衛門(中山新九郎)直助(嵐岡八)お袖(藤川友吉)などいかにも無人芝居で、其代りに幽霊で嚇さうといふ趣向でした。

先づ前の仙臺秋からして普通と違つてお化澤山の變化ものでそれと此お岩との宣傳用パンフレットと思はれるものが攝陽奇觀に載つて居ます。

角の芝居、二の替狂言と角書して、尾上菊五郎七役、下へ、古今珍らしき新工風、怪談狂言と二行にしろし、本文は芝居好が大勢集つて、此度外にも大一座で伊達の狂言をするのに、菊五郎一人でどうして勤めるのかと不思議がるのを、それは皆があの狂言を知らぬ故だと、江戸子が出て江戸での見た儘の話をすると、いかに好奇心を唆るやうな書き振です。

いろは假名と初演の東海道とは大同小異であります、初演の時は忠臣蔵と混合にし蛇山庵室から十一段討入で續けられたのを、忠臣蔵から切り離して、蛇山の後へ深川回向院寺内を附けて大詰にしたのがいろは假名です。

此兩篇を仔細に對照比較して其異同を一々述べてもよいのですが、それはあまり煩はし過ぎるので略します。一般にはいろ

はの方に多少まとまりがよくついて居るやうに思はれる節もあります。時代描寫の滋味は何といふても東海道の方に多いと云はねばなりません。

四谷怪談が陰慘、殘虐など變態的興味を中心とする傍、當時のドン底生活を我等の目前に見せつけると共に、江戸兒のもつユモラスな分子がいかに豊富であるかを示してくれませんが、是等に就ては又他日を期することとし、こゝでは猶作者等の企畫した此怪奇劇が破格的成功の裏に、過ぎて及ばなかつた點を少々指摘しておきます。

今日刊行せられて居る兩種の四谷怪談に記されては居ませんが、前に述べたパンフレットにもあり又評判記（役者註眞庫）にも記されて居ますのは、お岩の一忽が母の筐、三光の櫛を妹お袖に渡さうと、屏風の内から欄間を傳つて二階へ行くのです。怨念と云へば恐ろしそうですが、それが轡轡首だから愛嬌ものではありませんか。

蛇山で秋山の首を手拭でしめて其儘上るのも物凄いが「此仕かけ臺の上にのり下る故、此幽霊は鮎のどうびんに水を入れたやう」だつたと「さじき」からの評でした。文政の昔に既に斯うですから、此場で流れ灌頂から出るお岩の亡霊を現代人は何と見るでしやう。

腰から下は血に染んで、雪道を行く血の足跡に、さては幽霊にも月經があるかと不思議がるかも知れません。イヤ揚足をと

るわけではありませんが……然し此幽霊には足がありますよ。名人小團次から傳へられて先代右團次の齋入老人はよく此お岩を演じました。あの人には臺辭を云ふ時などに口を歪める癖がありましたが、その癖が幽霊に役立つて凄い口付になつたのです。唯悪い事には其頃の習慣として無暗と糊紅を使ひたり血さへ澤山使へば凄いものときめてしまつたのです。

此人の使用したお岩の面は現今新町の叶丸翁が所持して居ますが、血ミドロの極めて醜惡なものです。近來其筋で糊紅使用を嚴禁せられたについて此取彼所に不平の聲をききますが、美といふ事を無視して凄いのと穢らしいのとを混同した紅から廉賣時代を経て來た私共はお蔭でいくら助かつた思ひをして居るかわかりません。

現今の若い人々は其頃より遙に高い教養をうけ、洗練された趣味の所有者と信じます。それで此不平は恐らう見ぬ戀の憧れから來たやうなもので、早晚幻滅を感じられる事だらうと察して居るのです。又大分脱線しましたが此上人魂のやうにフハフハと何處へ飛ぶかわかりませんからこゝへらで一ト先ツ消えまじやう。



暑と解脫累物語

倉田啓明

この殺人的暑熱に、博渉を誇る考證の記事は、讀者も迷惑、書く小生も亦浮かばれない話だから、書かでも式の漫筆で解脫させてもらひたい。

お題目は即ち「累解脫」の怪異、夏芝居物語。

清元淨瑠璃の「かさね」は、羽左衛門梅幸度々の上演はじめ、幸四郎、菊五郎、勘彌、松蔭等も演じて、近年頗る有名になり、好劇家の隨喜の涙を流すもの。この淨瑠璃は申すまでもなく、五世鶴屋南北翁の傑作「法懸松成田利劍」の一齣であるが、南北の作では比較的短いものだから、先年六代目が市村座で、省略せずに通して演じたのを小生も見た。ひどく古風な舞臺裝置と演出で評判になつた。與右衛門には勘彌、六代目が累をやつたが、あの地獄の場なんか、とてもナンセンス味たつぷりでむかしの芝居らしい情趣がたゞよつてゐた。

さしも嫉妬のため、瞋恚の焰を燃やし、殺されても魂魄宇宙

にさまよひ、成佛得脱しなかつた累も、祐天上人の法力で解脫するといふのだから、團扇太鼓にお題目の法華信者がありがたがるのも無理ではない。

ところで、この大南北の作に匹敵し、或はより以上に有名なのは、三遊亭圓朝口演の「眞景累ヶ淵」である。これも芝居に脚色され、近くは木村錦花氏の脚色で、延若猿之助が東京で演じたのを皮切に、大阪でも上演したやうに記憶する。

今度第一劇場で、壽三郎等が上演する「累」はどういふものだが、その消息を詳にしないので、何も語り得ないのは残念だが、いづれ舊作を改竄したものだらうと思ふが如何。

三遊亭圓朝が「眞景累ヶ淵」を口演したのは、「に組」の頭長左衛門の出した、兩國の寄席山二亭だらうとおもふが、こゝでは圓朝が大道具正本斬といふ招牌を出して、例の「牡丹燈籠」などの傑作を演じて大入を占めてゐたのだ。兩國にはこの外に

林家といふ寄席が、その頃あつて柳橋——後の柳櫻が九州吹戻しといふ十八番の人情噺で客を呼んだ。

大南北の「累」のおもしろさは、序幕で清元を使つてあのエロチックな道行を見せ、倏忽として凄惨な怪異に變轉するところにある、それにもとく累の怪異譚は、絹川堤の下へ流れ寄つた、草刈鎌の刺さつた髑髏から幕を切つて落されるのだがこの鎌を打込んだ髑髏は、なんととても怪異味、凄慘味、そして獵奇味百パーセントである。「四谷怪談」のそれはあまりに技巧が勝つ過ぎて、どうも拵へものといふ感じが濃厚だが、「累」の方は甚だ自然である。そしておそろくいづれの作者もこの絹川堤の流れ髑髏といふ簡單な事實に基いて、いろ／＼と脚色の筆を凝らしたのであらうと想像する。

それにこの女主人公の名がおもしろい「かさね」とは甚だめづらしい名で、おまけに怨嫉に狂ふ女らしい響がある。事實かかる名の女があつたか、それとも誰かの創作か、そこまで詮議に及んだことがないから知らないが、いづれにしても「累」は傑作である。「お岩」といふ名はよくあつて、さほど珍らしいからず、まして近代風に「岩子」ぢやいよくおもしろくない。現に過日も三朝温泉依山樓の婢にお岩さんといふ美人がゐた。しかしヴァンプ型の美女で、累といふ名の女はあるまいか。ダンサーや女給が變名でもい、から、累と名乗つてあらはれるものはないか——なぞと私は變な獵奇趣味に驅られる。

最後に、田舎で見た「累」の芝居ばなし一つ。

所は伊賀上野菅原座といふ小屋時は今から約三十年も昔だ。累に扮したのは中村かねめといふ、ドサまはりでも綴綴のいい、藝の達者な女形なのでなか／＼人氣があつた。與右衛門になつた役者の名は覺えないが、絹川堤殺しの場が聞くと、上手の日覆から古風な月が灯入でぶらさがつてゐる。累と與右衛門が登場する、累の女房風の元服姿もおもしろいが、與右衛門が宛然稻川次良吉の様な相撲取の扮装は、なほもつておもしろい。お約束どほり月が消えてなくなると本釣、雨車になる。即ち殺しとなるのだ、やはり鎌を揮つての立廻りだが、その頃のことだから血糊をふんだんに使つてなか／＼物凄。とゞ累の死骸を川中へ打込み、與右衛門がツカ／＼と花道七三あたりへ行かうとすると、大ドロ／＼連理引、累の亡靈が柳の下からあらはれ引戻しになるのだが、その日に限つてどうしたのか、いくらかお囃子がドロ／＼と太鼓を鳴らし、焼酎火の陰火が燃えても、肝腎の累の亡靈、何處をどう戸惑ひしたか現はれない。與右衛門は七三で眼を白黒させてゐる始末。吃度セリの仕掛が狂つたのだらう。やがて累は上手堤の方からツカ／＼と走り出たには流石の田舎の見物も驚いた「あの幽靈は足がある」と誰かと叫んだのでドツと悪落ちが来る有様か、さね／＼の失敗を演じた。これに反して第一劇場の「累」はかさね／＼客の来るやうに成田の利生を祈つておかう。



『累』の狂言

濱村米藏

「累物語」の原作は、安永七年八月の中村座で初演された、初代櫻田治助の「伊達競阿國劇場」であります。然し今日行はれてゐる臺本は、無論治助の作そのまゝではありません。そこで、一通り「累」の狂言の變遷を話す必要がある譯です。

その前に「累」の史實なるものをお話しましょう。下總國岡田郡羽生村の法藏寺に傳へられてゐるところでは、羽生村の百姓に與右衛門といふ獨身者があつたが、隣村の寡婦を世話する者があつて女房に迎へた。女には連子があつて助と呼んだが、この男の子はみにくい顔立なので、與右衛門が虐待します。それを妻は苦にやんだ舉句、慶長十七年四月十九日に、この子を川へ連れ出して、横堀へ投込んで殺して了つた。その後夫婦仲はよく、二人の間に女子を設けて累といつた。累が成人の後與右衛門夫婦は世を去つた。こゝまでは無事といへば無事なのだが、あとに残された累はひどい器量なので、誰も養子に來手が

ない。丁度その頃廻國の修業者で、村の農家に雇はれて手助けをしてゐた者があつた。仲に入る者があつて、修業者は少しばかりある田地に目くれて、累の家へ入贅になつた。名は先代の與右衛門を襲いだ。さて夫婦になつて見ると、與右衛門は累のねづけた心と嫉妬心の強いのに堪へ切れなかつた。さうしてある時絹川のほとりで、有合せた草刈鎌で累を切り殺し、絹川へ投げ込んだ。世間へは誤つて溺死したといつはつて法藏寺へ葬つた。これが承應二年八月のことであります。その後與右衛門は何人ともなく後妻をめとつたが、みんな早死をしてしふ。最後の妻にお菊といふ子が生れ、妻の甥の金五郎といふのを養子にしたがお菊に累の怨靈がのりうつて、散々になやまされた。この時祐天上人は年二十六歳で、同郡弘經寺に遊學してゐたがこの話を聞いて與右衛門の家を訪れ、十念を授け怨靈を退散させた、かういふ因縁話があるのであります。

この「累」の物語を脚色して評判になつたのが、古いところでは享保十六年十一月市村座上演の津打治兵衛作「大角力藤戸源氏」であります。名題にうたつてあるやうに、一番目が藤戸の先陣物語で、二番目が「累」であります。役割は阪東彦三郎の佐々木三郎盛綱、三條勘太郎のかさね、中村新五郎の與右衛門で、「歌舞伎年代記」に「かさねを殺す所、かけ合のせりふ、絹紅の潮大當り」とあります。

治兵衛の作が後に操芝居に改作されてゐます。それは寛延四年八月肥前座興行の「新版累物語」と、寛政四年二月肥前座上場の「累解脫打敷」とであります。共に信田の世界に書直してありますが、後者は前のものを唯改題したのではないかといふことであります。

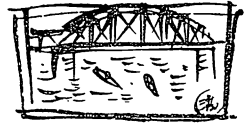
「累」の物語を伊達騒動に持ち込んだのは、最初に書きつけた治助の「伊達競阿國劇場」で、これは云ふまでもなく一番目が伊達騒動、二番目が「累」で、絹川後に與右衛門が四代目幸四郎、かさねは四代目半四郎であります。

この狂言が非常な評判だつたので、翌安永八年三月に院本に移されて、名題もそのまゝ、「伊達競阿國劇場」で肥前座に上場されました。詳しくいへば、これが今日行はれてくる累身賣りのある「累物語」の原作といふことになるのであります。

その後「累」は「牡丹燈籠」と共に、怪談物の二つ重寶となりました。怪談物一手専賣の南北は云ふまでもなく「累」を扱

つてゐます。文化六年六月森田座上演の「阿國御前化粧鏡」の二番目は俗に「湯あがりの累」と云つて、深川の藝者であります。累が湯から歸つて来て、いろいろあるうちに、側の鏡臺の上のせてあつた觸腰が、累の顔へ飛びついて、いくら離さうとしても離れない、無理に引離すとあとが見る影もない形に變つてゐるといふ趣向である。まだ他にも「累」の狂言はあるが、近頃殊に有名になつたのは、文政六年六月森田座の「法懸松成田利剣」である。これが「色彩間蒔豆」のある「累」の狂言で、木下川堤で殺された累の亡靈は、次の與右衛門の浪宅の場へ出る。與右衛門は家來の八助の妹おりと祝言することになる。その嫁の乗つた駕籠の中から、おりと同じ衣裳で、凄しい顔に變り果てた累が出てくるのだから南北式である。與右衛門だけではそれが累の亡靈と分るが、傍の一同にはおりに見える。累の亡靈は與右衛門の手を引いて、無理に屏風の中へ入るといふところがある。おりが怨徳で熱病をわづらふ、大勢が百萬遍を繰出すと、亡靈が現はれて珠數のまはりぐるぐる廻るが、念佛の聲に妨げられて入ることが出来ない。その念佛の聲に耳をふさぎながら、物凄いが格好をして行つたり來たりする三代目菊五郎の藝がうまかつたので評判になつた。それで後にそれをそっくり「東海道四谷怪談」の蛇山庵室で又見せることになつたのであります。

(第二〇頁(續))



第一劇場

北村 兼子

第一劇場が一週年になるつて？ 早いものだ。今から一年前に壽三郎一派が浪花座で旗擧げたのは、かなりの冒険であつた。ある人は無謀輕舉であるともいつた。始めのうちは珍らしいもの喰ひの觀客を呼んだであらうが、よく今まで客足を引き續けたものと感心せずにはゐられない。創業時代を経て今から安定期に入るのだから靜思して新境を開拓するだけの餘裕を得たであらう。私は期待する。

新派といふものが看板だけの新派で、いつのまにやら准舊派になり、同じものに膠着してゐたらすぐ古くなる。月ごとに新軸を出して觀客を厭かさずにこゝまでござつた第一劇場の苦心を買ふ。高く評價して買ふ。

同じ型に佇立してゐては交通の妨害になる。進むか、しからざれば退け、新興藝術には安全地帯はない。

満足を望んだらきりはないが、第一劇場の重點は脚本にある

と思ふ。これまでの脚本は悪かつたといふのではない。悪くない脚本でも繰返へしてゐるうちに悪くなるのだ。プロ作品も大ぶん下火になりかけのもそのせいである。文藝ものを少し交ぜたら好からう、日本化した支那歴史劇などは面白からうと思ふ。暇があつたら一ぺん脚本を作つてみたいと思つたともあつた。過去一年間につかんだ觀客の心理傾向はどんなものであつたか、それはまだ聞いてみないからわからぬが、落ついて觀賞できる上品な劇も道頓堀にあつてよからうと思ふ。芝居らしくない芝居をみたいと望んでゐる人もあらう。

芝居も一の企業である以上はそろばんを離れて芝居はあり得ない、私たちの注文通りにやつたら缺損は必然である。舞臺に立ちながら興行會社の帳簿を考へないやうでは俳優ばかりの芝居になつて大衆的の芝居にはならない、文士でも新聞雑誌社書店の經濟狀態を考慮に置いて筆を執ることがあるやうに俳優

「ギブス固煉齒磨」



本品を使用すれば幼時より老年に至るまで齒牙を完全に保つ事が出来ま
す。
何故なれば、ギブス煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常
に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのであ
りますから毎日二回必ずギブス煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は
爽快になられます。
本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります有名な
百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

大形 壹個 金七拾錢 大形中味 壹個 金六拾錢
小形 壹個 金四拾五錢

ロンドン パリス
デイ・エンド・ダブリン
日本代理店 株式會社 横山商店
東區豊後町三番地

もやりにくい點が多からうと同病相憐むが、技藝で上手で劇
場がつぶれては何にもならないからである。
劇場構成の二要素は俳優と観客とである。時としては観客
を忘れて俳優ばかりがい、氣になつて芝居をしたがる。これは
新劇によくみる場面である。高級なものを要求するは少数で
低級なものほど観客は殖えてもそれでは第一劇場を立てた趣旨
が消える。高級と低級との間に一線を引いてその少し上で踊る
ことだ。そのうちに少しづつ線を高めて行くがい、と思ふ。劇
評家や文士の下手な藝術論に傾聴して自ら高く止つて經濟的に

第一劇場を破産させてはならぬ。
第一劇場の成功は脚本でも技藝でも演出でもない。観衆と俳
優との連絡が完全にとれたことで、これは俳優の努力によらう
が、道頓堀の觀劇人の頭で進んだことを暗示する。第一劇場も
道頓堀で足場ができたなら東京へ踏み出してみたらよからう。東
京では大阪以上に歡迎されると思ふ。
俳優は純藝術家でもない、企業家の尖端に立つ枝隊である。
そこに第一劇場の成功もあり又た悩みもあることは察しないで
はない。



田中總一郎作

累物語

—三幕六場—

あらゆる事物が科學的に立證される今日に於ても尙、無いとは斷言しがたい因果の物語りてす。

誰も犯さうと思はない罪を犯さねばならぬ星の下に生れて來た人々の悲戀と宿業の物語りてす。

興右衛門にしても、金五郎にしても、楽しい家庭を結びたいために、愛しい心の珠を得たいために、思ひ焦れた娘達だつたのである。其娘達——名主助作の娘果と其従妹おうみととも、一圖にかうと心に誓つた男を他に見かへやうとは夢さと思ふ筈もない可憐な娘だつたのです。

それに、血で血を洗ふ悲劇を、寄つて集つても出しなければならぬ運命の下におかれてゐたのだつた。

——父御の心は、まだとけぬか。

——今日も今日とて大そうなお腹立。強い言葉で叱られました。どの様なことがあつても、あの様な瘦浪人と勝手な眞似はさせぬ、一人でも外へ出しはせぬと言つて、お種さんの所へ行くさへも、あゝしておうみさんと一緒になければ許してはくれませぬ。

——ふとなれそめて、もう小半歳、逢ひ重ねれば、かうなる果と知れてゐた、そなたはれつ

きとした名主の娘、この身はしがたない瘦浪人、思へばはかない戀の路。
——あの頃の夢の様な娘しさが、いつの間にか消え失せて悲しい羽目になりました。

——赦してくりやれ、いつ泛び上るものもない浪人風情と思ひ合ふがそなたの因果。父御の頑くなお心を怨む謂はれは少しもない、皆この身の不甲斐なき。

興右衛門と果と——

金五郎とおうみと——

此二組の純情な戀を、優しく育てゝやればよかつた名主助作は、いつか頑に娘達を押へつけ箱の蓋を固く閉して許さなかつたのである。

——たとへどうあらうと、二人の仲にはもう切つても切れぬつながりが……

——それを思へば、尙更苦しい、我と我身を責めてはゐる。

——人目に立たぬ中なれば、どうにでもして行きますが、時遅れは事面倒になりませう。——と云つた所で、今の二人の力では……

——與右衛門さま。——妾を連れてどこへなりと逃て下さりませ。

——え。

——不幸の罪は重ねても、やがて生れる子供のある二人、知らぬ他國の野の末までも、楽しい暮しがしたうございます。——よもや嫌とは

申されますまい、思ひ切つて今こゝで……。

強い心になつて下さりませ、どの様な苦しみがあつたとて、二人が一緒に手を引き合つて居れば、切りぬけきれぬことはございますまい。その中には必ずいゝ月日も廻つて参りませう、例へ三十石五十石でも、お前に仕官の途でも開ける日がくれば、父御へのお詫びはかないます。

——累どの、その心、無下にはせぬ。そう思はぬでもなかつたが、それでは父御に、あまりと言へば申譯のなくなるこの與右衛門、それ故まさかと言ひだしもしなかつた。

——心定めて下さりませ、時遅れではなりませぬ、今宵の中にも……

——えッ、それ程までに。

て若い二組はどうしたまわり合せか、其日、其夜、同じ助作の家の裏手で待ち合せ遠く江戸の地へ逃やうと手筈ををめた。

其夜、娘達の選んだ晴着は乙女心の可憐さで、せめ

て心ばかりの別れ心にもと、言ひ合せねど描ひに拵へた同じ着物だつたので、事の纏れはこれから始まるのです。

——おのれ、人非人奴、大切な娘をかどわかさうといふのか。

——いゝえ……

與右衛門は永々世話になつた助作にはすまないと思ひ乍ら約束の時刻、さて逃れやうとする處を一徹な助作にさへぎられて争つた末。

——いゝや、きかぬ、盗人ぢや、泥棒ぢやおのれ、こうしてくるぞ……あッ！

遂に助作の持ち出した鎌で逆に誤つた助作を殺害してしまつた。そして戸外に飛び出すと、其處に金五郎を待ち侘びてゐたおうみを累と間違へ連れ立つて一散に闇の中へ——

とその後を追つて出た累は、父の殺された鎌で足を傷つけ苦痛に口も利けない所を。

——どうした。どうしたぐづぐづしてゐると追手がかゝるさ、早く来るがいゝ



や怪我をしたのかどれ、危え。何だつてこんな所へ鎌が落ちてゐるんだ。——大したことはあるめえさ、来ねえ。

——と、これも又、遅れ走せに約束の場所へやつて来た金五郎におうみと間違へて連れ出される。

かふした皮肉な運命にあやつられて、あやまつて組み出された二組は、幾月か、お互いの消息さへ知らずに忙し日夜を消して行つた。

あの夜の出来事から數ヶ月後。累には子供が出来た。與右衛門のそれであることは勿論である。

——親の罰が當つたのでございます。この兒をさへなかつたら、妾はいつそ淵川へでも身を投げて死んでしまひたうございます。

餘儀なく金五郎と同様をしてゐる累の口から洩れる歎息の言葉は絶えなかつた。

——馬鹿なことを言ひなさんな、死んで花實がさくものか。若い身空のお前さんだ。今にいゝこともあると云ふものだよ。與右衛門さんとやらにもその中には

逢へる時が来るだらうから、まあそんなにくよくよしなさんな。

それでも、累の身上を知る近所の人達は影からず彼女に同情をして、ひそかに慰めの言葉さへ與へるのだつた。

或る日——
毎日の様に家をあけて、ほつき歩く荒んだ金五郎が、忽然累の許へ歸つて來た。

——おい酒があつたら一本つけて貰ひていな
——あるにはありますが、もう大分召上つて
おいでませう。

——へん。女房みてえな口をきくなよ。それ
だから人様だつて間違はあな。お蔭でおいら、
女を一人しくじつたぜ。

——あゝ今訪ねて來た人ですか、それはどう
もすみません。

——いゝから酒だ、酒だ。

——はい。

——なあ累さん、今日は一寸あらためて話があるんだ。何と聞いてはくれねえか。

——お話は何時でもお伺ひ致します。

——でも、御酒を召しておいでゝは

——なにあに、心配するにはあたねえ、金五郎の性根は、確なもんだな、累さん、お前とかうして一ツ家に起き伏しするやうになつてから

、もう一年も過ぎた。始めのうちや俺も、何時かおうみが出て來るものと待つてみたが、もう此頃ちや、ふつりそんな望みも斷つてしまつた。其處で物は相談だがな、おうみが何處かに居るとすりや、やつぱり俺達見てえに、與右衛門と一緒になつてゐるに違えねえ、女一人ぢややつて行けねえな判つてゐるからな。それに人の噂に聞きや、何でも江戸であの二人を見たといふ話だ。

——えッそれぢや、やつぱり江戸へ。
——根掘り葉掘り聞いてみると、まんざら嘘でも無いらしい。ところでどうだ累さん。此處等て俺等も一思案あつてよからうぢやねえか。

——江戸へ連れてつて下さいまし。
——うん。俺もついでに氣がたかぶると、お前につらくあたつたが、海更腹からの悪者の俺でもねえ善なんだ、どうてえ、俺にあお前はおうみのかはり、お前に俺が與右衛門のかはり明日とも言はず今夜から、世間なみの夫婦暮しを始めねえか。

——いゝえ、そのやうな話しはきけません。



奔る馬の如き

——聞き譯のねえあまだ
——誰が酔狂で不具のあまを買ひ殺しにしておくものか、來やがれ！
——酔つたまぎれに半分本心の金五郎が口説にかゝつて争つた末、熱湯をかけられた累は、顔の年面に大火傷をした。生れもつかぬ醜い累になつてしまつたのです。其頃を境に段々落ち目になつて行つた。

丁度其時分——
江戸で、やはり金五郎と同じやうに人の妻、人の夫と固く暮して來た與右衛門とおうみは久しぶりの暮參りに郷土へ歸つて來た。

——これ、おうみ、どうしたのだ。何をそんなにふくれてゐるのだ。
——お前は、累さんのことを言はれて嬉しうござんせうが、えゝ、妾や、どうせ——
——馬鹿なことを云ふな、今更昔の事を、とやかく言つた處でどうなるものか。
——いゝえ、妾や、怨みてござんす。お前の

心は、今でも累さんのことばかり思つてゐる。
その證據には、一つ家につき伏しはしてゐても
二人でゐるとは名ばかり。——妾や今ではあの
時の間違ひを心から喜んでゐますのに。

判つてゐる、もう言つてくれるな、そんな
話しを助作殿の墓前でするにも當るまい。

——若しも累さんと廻り合つたら、お前はや
つぱりあの人と——

運命は熟してゐる。
金五郎とおうみと——

與右衛門と累と——

遂に二組の男女が出逢ふ時が來たのである。
だが、幸福なるべき此二組の再會に、天は何處
までも悲運をもたらさずにはおかない。

果して與右衛門は、昔に變らぬ愛着を累の上
に持つてゐたであらうか。否。與右衛門とおう
みは、助作の墓前で、却て二世を誓つてしまつ
たのである。

地下の助作はどう思つたらう？

助作を殺した鎌は未だ朽ちてはゐないばかり
か、却て此墓地に、累の手に握まれるやうに、
金五郎の計略に依つて落され、生きてゐた。

あれ！
時ならぬおうみの悲鳴に驚いて振り返る與
右衛門の眼に。

——やつ、そなたは累！
と、累の手にした鎌が無氣味にきらめく——

——これ、何をするのだ。

——待て、待つてくれ、お

うみに何の怨みがあるのだ。

危ない、これ、危ないといふのに

これ、累、そなたは氣でも狂

つたのか。

——氣も心も狂ひました。

えい、憎いのはお前の心、

死んでも心變りはせぬ約束を

ようも反古にして下されました、この上は、こ

の上は……

——これ、靜かに心を落つける！

——え、離して離して！

呪ひの鎌は、累の手から與右衛門の手へ、そ

して又も累の一命を斷つてしまつた。

——この鎌だ——

と、うめくやうに與右衛門とおうみの去つた

後、藪をかき分けて現れた金五郎が、累の傍

に投げ捨てられた、呪ひの鎌を拾ひ上げて、か

すかに快心の笑を洩らすのだつた。

あとにはざつと時ならぬ夕立——



どり兒を抱へて、渡守の太平次の家におうみと
一緒に滯留してゐる與右衛門の上につきままとふ

て離れやうとはしない。

加之。金五郎の奸計、

——鎌をさげの脅迫は、與右

衛門をさいなまずにはおかな

い。

累の執念は、遂に亡靈とな

つて與右衛門とおうみを狂人

のやうにしてしまふ。

呪ひの鎌は、脅迫に來た金

五郎を、そして何も知らないおうみまでも、與

右衛門の手によつて斬つてしまつた。

——おのれ！

物に驚いて與右衛門が、どうと倒れるその下

には、例の呪ひの鎌が生き物のやうに凄くきら

めいて、與右衛門の血を求めてゐた。

——あつ！

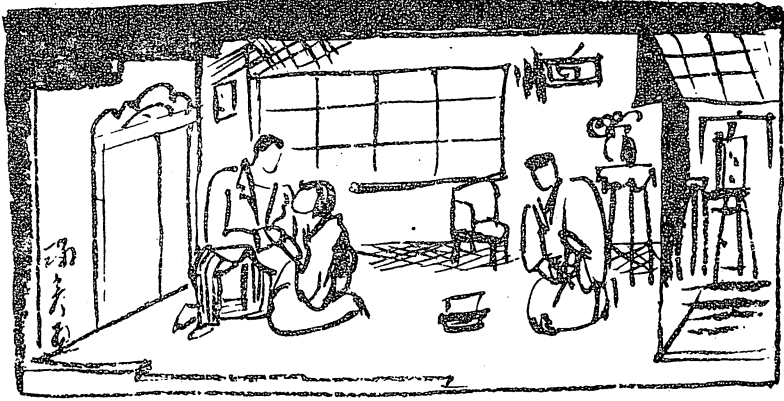
與右衛門は最後の叫びが瞬間にして消えるそ

の後には、闇の墓地から、火のつくやうに泣き

叫ぶ赤ん坊を慰める様な子守唄が、殊に幽明境

を異にする累の墓の下から、惻々として迫る鬼

氣を傳へながら呪ひのやうに聞えて來る——。



女怪

悪龍之介

【一】

雑音と汗と太陽の夏が始まらうとしてゐた。
花粉と花蜜の光りと香りを發散させて行く六月の或る日。

都會らしいすべては、大きなジャズの渦だ。
花やかな消費の世界だ。生産を忘れた物々しい風景だ。

カフェーUでは今賑やかなレコードのジャズが鳴り響いてゐる。常連と見える客に、ウェイトレスは皆軽い愛嬌をふりまいた。客は急に懶うさうにやめて呉れと手を振つた。女給一枝は頷くと直ぐジャズの音を止めてしまった。

「マスターゐるかね」客はそう云つてテンダーの井出聞一に聞いた。

「奥で寝てゐます」「そこらでもコクリ／＼やつてるぢやないか」「居眠りしちやいけないの」

女給のよし子はそう云つて客に一本きめ込んだ。「心配御無用よ、チツブ次第でいつても眼を覺します」一枝もそれに輪をかけるやうに云つて笑つた。

客は手荒な女給の言葉を氣に解しないらしく暫らく話込んでゐた。此時半開きに成つた門口から聞一の妹の文代が湯上り姿の暑氣に上氣した可愛い姿を客の前に表はした。

「いらつしやい」にとほこる顔にエクボがこぼれた。

「やー」客は瞬間バネ仕掛けのやうに飛上つた。「文ちゃん、Oさんが何かいつてるわよ」「何ですの?」「ホホ……」一枝とよし子は客におつ浴びせるやうに笑つた。「こいつらア、覺悟へとれ」客はブンと廻れ右して表の街路に姿を消した。文代は一寸客の方を見送つてから、笑ひ

作らコック部屋へ這入った。ト素晴らしい洋装
断髪だんぱつの北村桂子がボタンと扉に音をたて乍ら入
つて来た。そしてボックスにぐつたり腰を据へ
ると、彼女の断髪はニラ／＼と額に波打った。
「ウイスキーを下さい」枝は「いらつしやい」
さう云つてスタンドへ行く。「お宅に文代さん
つて人ゐますか」「はい居ります」げんそう
によし子は桂子を打見守つた。

「マスターゐますか——では呼んで下さい」桂
子は一枝の、はこんだウイスキーを立て續けに
二三杯あふた。
マスターの小山祐吉は睡眠不足な顔で出て來
た。桂子は始終いら／＼し乍ら祐吉に語り出し
た。

それは斯うなんだ。桂子の話に依ると、此處
の女給文代と桂子の良人山六郎が近頃自分の眼
をさけて同棲してゐると云ふのである。桂子は
法律上正式の妻では無いが、山と夫婦生活を續
けてから三年以上にも成ると云ふのである。で
山と文代を別れさせて欲しいと云ふのが桂子が
今日訪ねて來た理由なのであつた。

文代の兄の井出聞一も桂子の話を聞いてすく
なからず憤懣を感じた。もと／＼山と文代が此
處まで切迫つまつた仲になる以前に於ても、聞
一は井上の蔭に桂子の様な女の存在する事は無

氣にも知らなかつた事だつた。——山にたばか
られたと云ふ一事は聞一にカツとしてしまつた
のであつた。そして文代を呼ぶと今迄の譯をす
つかり話して聞かせた。

桂子は悄然と首垂れて口も利き得ない文代を
心地よく見詰めて乍ら「お前さんみたいな女に見
代へられるやうぢや桂子さんもお終ひさ」そう
云つてハ、ハ、と笑つた。

聞一は文代に山と別れて呉れと云つた。文代
はわな／＼とふるへ乍ら一言も發しなかつた。
「お前さん、矢つ張り山を愛してゐるの？」文
代はかすかにえゝと首を縦に頷いた。

「フン、私の山だ、取れるものなら取つてごら
ん」——「御安心なさい。文代が何と云つても
僕が必ず山さんを貴女の手へ返しますから今日
は此儘歸つて下さい」聞一は桂子の言葉尻をお
さへるやうにさう云つた。それを聞くと、桂子
は幾度も／＼駄目を押し乍ら出て行つた。

文代は絶えられなく泣つて其場に泣きぐづれ
てしまつた。

【二】

此處は山と文代の愛の巢をいとなむさゝやか
な棲居——と云つても二階借りである。
今友人の金子晋也が訪ねて來てゐた。桂子が、

山と文代の仲を覗きつけて、あの驕ぎのあつて
から間も無く、今後の事について二人は今話の
最中だつた。

金子は以前から桂子の尖端的な女性美に魅惑
されてゐた。で今斯うした事件のをつばじまつ
た此際何とかして山と桂子を別れさせてしまひ
たいと思つたのであつた。自分の野心を貫徹さ
せるには又とない好機會だと、心ひそかに、こ
どりしてゐた彼であつた。そんな金子の癖ある
心理をも山は一寸も知らいで、反つて今の自分
の立場に一番理解して呉れる友情に當める金子
だとさへ信じてゐた位だつた。金子が逡巡する
山に極力桂子を離別しろと説伏するの故なく
してではなかつた。異性を得る事によつて如何
に日頃親しい交友關係にある者をも、戀愛の前
にその友誼を犠牲にする事か、金子も亦其一人
だつたのである。

井出聞一も、自分等兄妹が山の甘舌に欺かれ
てゐたと云ふ事は彼れを想像以上に憤慨させて
しまつた。そしてもう寸時も文代を山なんかの
愚劣な男にまかせせる事は出来ないと思つて二人
を引裂かうとした。金子は兎に角自分に任せて
呉れと聞一に願つた。聞一も事件が此處までこ
んがらがつてゐる場合自分よがれの直説を云ひ
張つてゐたところが結局どうにもならない事だ

つた！ 其上文代の傷つける心の程も哀れむ氣持にかられて一先づ金子の友情に總てを依頼する事にして、二人は山と文代を残して出て行つてしまつたのであつた。

兄や金子の去つた後でも文代は泣き續けてゐた。山はそうした文代の姿が一層愛しいものゝやうに思はれた。とむら／＼と湧き上つて来る愛憎の爲に、瞬間自分は何うなつたつて構はないとさへ思つた。涙に光る二人の眸が互に接近した時、山はことさらに其念を深くした。文代にしても其通りだつた。初めて異性といふ者に對した山の心情には、どうにも動かし得られぬ深い愛着を通り越した思慕を感じてゐた。山を自分の生活から引離して生きて居られないときう感ずる程今の文代の心には山の全身が無抵抗力を思つてきざみつけられてゐた。二人の行きつめたところまで行つた時、二人は其處に何を感じ、何を見出したか？

死の影はあらゆるものを支配する——痛切に二人はそれを感じ出したのであつた。

【三】

海は面白く笑つてゐる。温かい風が微々とふく下には海はじつと其身を縮めて表には小波がちら／＼と日光を反射し、その數千の銀の屑

でどつと大空に笑ひ返して、海と天との間、廣大限りない空、所は、宛然砂の岬のかな岸に、一つ／＼登つて来る波の、楽しい聲の響きがばいに充ち満ちたやうで、其響きが日光の閃めきと混り復び海から數千倍に反射せられて、やがて活きた喜びに充ちた息みない一大騒音の中に調和して溶けてはいる。そして天は歡んで絶えず日の光を注ぎ、海も亦其の赫灼たる光を投げ返し／＼歡んでゐる。

内海に陽沈み、空よりも暗き果てもなき海の此處彼處に星が落ちて、夜の靄に包まれて青色の色は海上に輝り映えた。

別府航路紅丸は今此の夜陰に波濤を急いで航く。一等船室にあつて山と、文代は遺書を書いてゐた。聽て二人は書了へた。

海上には月が皎々と輝いてゐた。陰惨な雰圍氣に突然二人をおつくるまつてしまつた。二人の行手に死の幻影がのたうつてゐた。びつたりと寄り添つた二人の唇には死の喘ぎが沁み出てゐた。

折から暴風さへ加はつて海上はいきり荒狂つた。次第に激動してくる二人は自制力を失つたかのやうに唇を噛みしめ乍ら、死の瞬間の淡い幸福にしつかと相擁した、甘いせつなの歡樂——。

聽て二人は其儘靜かに立上つた。文代はくらくと山の胸に倒れた……。

ドツ、ドツ、激しく波面は亂れて時ならぬ飛沫が夜陰に音高く鳴り響いた。

と山は轉がり込むやうに室内に駈戻ると、周章で扉を閉めた。彼の面は土色に變じて、唇は極度の恐怖の爲めに變色してわく／＼とふるへてゐた。

——地獄の底の沈黙がづづけて行く——突然山は絶叫した。

「あゝ、文代は死んだ文代は死んだ。俺はどうして死ねないんだ。どうして怖氣がついたんだ……あゝ、文代、許して呉れ、許して呉れ……」

山は失神したやうに眼がひきつると、くたくたと其場に倒れてしまつた。

【四】

そんな事があつてから二ヶ月程経つた眞夏の八月強烈な日光は毎日地に火照つてゐた。

金子と桂子の地駄らくの生活にはもうとつくにヒビが入つてゐた。「山さん……山さん……」窓口につるされた籠の中の鸚鵡は毎日二人を眺めてそんな事をくり返して鳴いた。其度に二人

はいがみ合はなければならなかつた。

山と文代が突然死の旅に發つてから——金子は桂子には豫期してゐた事實なのだが——金子は桂子

を得る事に依つて自分の生活を意義あらしめやうとした。桂子は桂子で戀しい山があんな態度

に出たのであつたし、一時の寂寥と孤獨の間々

の煩ひを慰やさうとして、そして一種の興味も

手傳つて遂に金子と同様するやうに成つたので

あつた。金子は多年の自分の我慾と野心の成就

に桂子を熱愛するのあまり今では桂子に切離す

事の出来ない強い愛におぼれてゐる傾きだつた

桂子にしてはそれがまるつきり正反對だつた

自分の愛する男を他の女に横取りされて、その

やるせない日常の煩悶と、じり／＼根を持つた

やうな煩はしきからして、つい／＼親切か

にして自分の歡心を買つて来る金子に或る單な

惡戯的の興味からして、多少捨鉢氣味で自分

から飛び込んで行つたのであつた。其當座こそ

異つた男の異つた味に煩はしきも、寂寥も忘れ

る事も出来たけれど、一度反省つて山を思ひ、

自分を考へる時、むら／＼と過ぐる日の山を聯

想せずにはゐられなかつた。

金子も薄々それを知つてゐて、どうかして桂

子の腹裡から、全然山を亡き者にせうとあれ

ばあせる程二人の間に一日と深い溝が醸され

て行くのであつた。不本意な、懶い日が二人の

生活にだん／＼色濃／＼色彩つて行つたのであつ

た。

そのち／＼い／＼された生活には桂子も金子も、

もうい／＼かげん倦意を感じてゐた。で金子はも

つと眞面目な意義ある生活によりを戻す事に腐

心した。

其處へ偶然に山が夢遊病者のやうな身體を表

はしたのであつた。

金子は愕然としたのであつた。一途に死んだ

ものと思ひつめてゐただけに今の山の表はれは

文字以上の衝動を金子は胸に感じたのであつた

桂子は文代と心中しどころなつた山をさん／＼

罵倒した。多少共にヒステリカルな自分の近頃

の氣持もよく知つてはゐた。それが今山を見る

に及んで露骨にさらけ出したのであつた。

此處に三人が互に異つた心理に葛藤を續けな

ければならなかつた。桂子は今まで心の奥に集

喰つてゐた山に對する思慕の念が此處で憎惡と

變つて込み／＼出て來たのであつた。金子も今

は自分の女としての桂子を山に託する事は出来

なかつたのであつた。金子には此儘に山の存在

を默認する事は恐ろしい事だつたのだ。

「桂子、貴様は山に未練があるんだらう、それ

ならそれと判つきり云へ」

「私は此奴が憎いんだ。たゞ憎いんだ。」

「愛してゐればこそ憎いんだ。貴様の云つてゐる事はみな嘘だ」

「いゝえ、私は此奴が憎いんだ此奴に復讐してやるんだ」

そんな言葉が金子と桂子の口から互に云ひ争ひ續けられた。

「何、復讐？ 馬鹿を云へ、貴様に山が殺せるかい」

「いゝえ殺して見せる。」

「よし」金子は決然とアトリエへ入り、直ぐ海軍ナイフを持つて出て來た。海軍ナイフを手にした桂子は山を殺し得ずして、ワナ／＼ふるへ續けた。そして何故か桂子のひきつツた眸には涙が白く光つてゐた。

「ハハ……貴様に山が殺せるかい。ハハ……」

金子は桂子のその様を氣味よく眺め乍ら嗤笑した。桂子は愛慾に悶えて激しく泣きくづれた

金子は何か領いて憤然と立上つた。

金子は山の訃れを、文代の兄聞一に知らさうとしたのであつた。

金子の出て行つた後、二人はしばし睨み合つてゐた。山は靜かに立上つた。「お待ちなさい

行つちやいけない」さう叫んだ桂子の面には昔と變りなき桂子の心情がむしあふれてゐた。

瞬間……山と桂子は互にしつかり抱き合つてゐた。

かくて二人の間には何事か深く／＼云ひ交された、たゞ激情せる眸だけが激しくまたゝいた

【五】

今下り急行列車は夜の東海道をひた走りに走つてゐた。

寢臺車に落つきのとれぬま／＼の心を抱いて山と桂子は乗つてゐた。

山は寢臺車に乗つてからや／＼心の安静をむきぼると——犯した過去の事件が判つきりと彼の脳中に新しく浮上つて來た。

文代が海に投じて此方、一時も安静に眠れなかつた。たま／＼眠る事が出来ても直ぐ惡夢に襲はれて蒲團を蹴つて起き上らなければならなかつた。そんな状態がくりかへし／＼今日まで續いて來たのであつた。今も文代の惡夢に夜汽車の定かならぬ夢をさましたのであつた。スリツパをひつかけて出て行く彼れの後から、桂子は焼けつくやうな眸を輝かし乍ら後を追つたのであつた。

喫煙室のクツシヨンに深々と腰かけた山は、まどわしい眼をしばた／＼せて煙草を吸つてゐた

桂子は山のそんな態度を見ると何故かい／＼してならなかつた、今でも文代を愛してゐる。——今寢臺車で山の寢室から女の白い足が二本はみ出してゐるのを見たといふ。山はその言葉をきいてぎよつとした。

寢臺車に戻つて見たが何事もなかつた。それはまさしく桂子の錯覺だつたのだ。或る無氣味さが蔭々と二人のつかれた神經を脅かした。二人は靜岡で降りる事を約したのであつた。

山は「あつ」と悲痛な叫びをたてゝのけぞつた。瞬間キラツと海軍ナイフが光つた。其處には金子晋也の憎惡に燃ゆる惡魔のやうな顔が浮んでゐた。山と桂子が東京を逃るやうにして此列車に乗込んだ時、金子も又同じやうに乘込んだのであつた。

今更取別けて三人の結果を書くまでもなく讀者は其處に事件の成行を想像し得るであらう。最後に結果だけを付け加へて置きたい。山は金子の強刃に倒れてから又してもおそひかゝる文代の幻影に遂にうつろのやうにその後を追つて水中へ墜落してしまつたのだつた。狂氣のやうにして山の後を走つた桂子の姿も再び此列車の

中に見出す事は出来なかつた。たゞフラ／＼として自制心を失へる金子の衰れた姿だけが喫煙室のクツシヨンの上に見出されただけだつた。

——(完)——

(第九頁より續く)

怪談狂言は松緑尾上松助と四代目南北の共力に始まつて、松助の子の三代目菊五郎が引繼いで大に腕を揮つてゐます。

それで怪談物は尾上家の家の藝といふことになつてしまひました。今日では梅幸が傳統的に怪談物の名人と云はれてゐるし又その世評に値する技巧を持つてゐます「累物語」を復興したのも梅幸であります。その梅幸と羽左衛門とが目黒の祐天寺に「かさね塚」を延壽太夫と共に建立したやうな逸話は、三百年四百年といふ傳統を持つてゐる演藝があればこそであります。これは音羽屋の家の名譽ばかりでなく、カブキの大いなる誇りだと思ひます。



文樂座注文帳

西尾福三郎

本誌の前身「中座」更にその前身たる「劇壇縦横」が發刊されたのは、大正も末期の十四年秋だつた。

その創刊號は文樂座號と題して、全誌悉く人形淨瑠璃の禮讃と、その保存方法研究の記事で埋つてゐた。

當時、御靈の境内で、淋しい孤壘を守つて、苦しい戰を闘つてゐた文樂座の運命は、將に危機に瀕してゐた際だつた。

續いて、突如として見舞つた祝融の災は、この傳統的藝術を根こそぎ破壊してしまつたものと思つて、心ある人達は私かに憂へてゐたのだつた。

爾來六年の間、幾度となく危急存亡を傳へられてゐた文樂座は、果然、新しい力を盛り返して佐野屋橋畔に甦生した。そして開場以來、毎月驚嘆すべき好成績を示し續けてゐる。

新文樂座の設立を契機として、藝題の選定に一入苦心が拂は

れた事が、第一に今日の好成績を來した理由であると共に、太夫、三味線、人形使ひの諸氏が一致して、從來よりも手堅い藝を見せるやうになつた事も、無論重大な理由であらう。

先日、文樂の休憩室で、物凄いロープ・デ・コルテに細巻を啣へたモダンマダムを見、又、食當で一幕見に立寄つたらしい西洋人の一群を見て、些か文樂の幻影を濁されたやうな氣もしたが、併し、一面では、斯うしたエトランゼエの興味を惹きつける程、文樂の聲價がポピウライズされたのだと考へると、これは座の經濟的基礎がそれだけ強固になつた證左だとも考へられるのだつた。

露骨に云へば、今日の文樂座はカクテルのやうな味と匂ひとを持つてゐる。

外觀と、そして客種とに、多分の近代性を取入れたこの劇場は、必然的に、その藝題にも近代的條件たるスピードを加へる

事を忘れなかつた。そのために、舊來の大切な文樂フワンを甚だしく失望させてしまつた。

例へば、今日の歌舞伎舞臺では絶えて見られない通し物の上場や、埋もれた狂言の復活等は、昔の文樂フワンの希望條件であらうと思ふ。

新しい文樂フワンを吸集して、確つかりとした基礎が出来上つたら、今度は、古い文樂フワンの希望を充たして貰ふ番である。

その意味で、先月の「釋迦迦來誕生會」は一寸珍らしい藝題だつた。

この作は、人形芝居の墓本としては、必ずしも優れたものではないかも知れない。たゞ珍らしいと云ふだけで……。

併し、珍らしいと云ふ事も、一つの價値に相違ないのだ。

それを別にしても、この作は、近松の淨瑠璃を一貫して、その基礎づけとなつてゐる所の佛教思想を中心の題材として取扱つゝゐる點で、輕々しく見逃してしまへない作品である。

殊に、眞言宗の僧侶だつた近松翁の般若皆空の思想をぢかに盛つた「出家の場」と「苦行成道の場」だけを見せた事は、特に意味深いものがあつた。(そのために、興味本位の場面がカツトされて、むつかしい芝居になつてしまつたが……)

讀經のメロデーに似た冒頭の調子に聞き入り乍ら、難解な言葉と、動きの妙な場面に見入つてゐるのは、正直に云つて、

可なりな苦行だつた。

併し、繪巻物をみるやうに美しい異國風な場面や、この種の奇蹟劇につきものの、恐ろしく現代離れのした舞臺技巧をみてるのと、追に、人形芝居ならではの味へない愉快な所があつて、この芝居を観得た事は、私にとつて決して無意味ではなかつた。

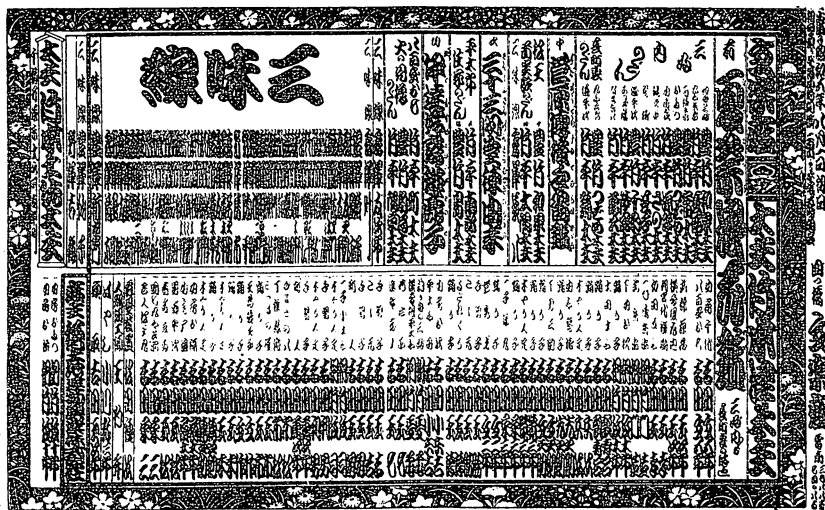
十二分に賣り込んだ金箔付きの名狂言許りを押並べて、常華客をたへず惹きつけるやうなやり方は、成程安全第一の商法には違ひないが、時々、斯うして埋もれたまゝの物を掘り出して觀せる事も、或意味で文樂座の存在理由であらう。

今月の文樂座は、主なる人達が東京へ出開帳して、その後へ居残つた新進達が、思ひきり勢のよい所を觀せてくれる。

鬼の居ぬ間の洗濯ではないが、精々藏の中から珍らしいような古物を引つ張り出してきて、陽の高い内にウント仕事をしておいて貰ひたいと思ふ。

古親太夫の後に燕太夫を、文五郎の後に紋十郎を想像する事は、多難な文樂座の前途に、猶一脈の光明を感じさせる。

その他、簾内や黒衣の陰に隠れて、未だ世に顯れない幾多の新進無名の太夫達に向つて、私はこの機會に思ひきり腕を揮つて貰ふやう、心から激勵の言葉を贈りたい。



前夏祭浪花鑑

三婦内の段より 長町裏の段まで

三婦内の段

鹿ナドリ賑しき、浪花高津の夏神樂練り込む振り込む嬉ひ込む、てうきようさの伊達提燈門のそろへは地下町の、しるしを見世に伊豫旅、並ぶ家居の其中に、釣船の三婦が家。客は内證預りの、乳守の女夫桑浦と結び合ふたる磯之丞。見世を揚屋の祭見に、口説しかけて捌ね合ふてほむらの煙管打たゝき、煙くらべのびんしやんは、火皿も湯になるばかりなり。三婦が女房は料理格へ。火鉢に掛けて焼物を、煽ぐ片手に、コレ琴浦さん。詞まうよい加減に仲直つたらよからうがの、道具屋の娘お中殿と

挨拶すれば。

やらを三婦殿が送つて行たも情氣しんきな顔がいやさに、夫に何ぞやふしたやうに、お前も粹のやうにもない。男に勤め奉公をさしたと思ふたがよいわいなと

詞ア、おつぎさんのいはんす事はいの。お中どのと心中に出た清七男仲直つたとて面白うもござんせぬ。じたい娘の有る内へ、奉公にやらんした、九郎兵衛様が聞えませぬアコリヤ九郎兵衛に恨み云ふ氣なら此清七男にいへ。三婦の世話してたものも、九郎兵衛の頼みから。サ其思ある人を恨みさするはお前のわざ。いふなやい、据え膳と河豚汁を食はぬは男の内ではない。ソレ其口が猶憎い、とせり合ふ中へ主の三婦数珠爪繰つて門口より。詞女房ども今戻つた。祭の料理出来であるかと内入よきにおつぎもほれ。詞出来である、あつらへの鯨の焼物捌りたて汁にかは膾。ヲツト夫で喰へる。シテ道具屋の娘女は戻して来てか。ハテ人

の大事の娘かどはかしたといはれては、磯殿の男が立たぬ。首結つた傳八めに何もかも負ふせ、金の事もさりと濟み、仲買の彌市を殺した事は、彼の書置でしてやつたと思ふたが、いやな風説がある。お二人も聞かしやませ。其書置の手が傳八の手でないといと一門どのがひひ出し、御詮議を願ふとの噂スリヤ磯之丞様を大阪の地には置かれまいと、九郎兵衛もいふ。おれも思ふ。マア當分立退かず相談といふて、あてなしにやられもせまい、よつぽどなけんびきマア端近へ出て人に顔見せるもわるい。殊に琴浦殿は、目がける奴のある身の上。女房ども、女房共、なぜ表へ出しまするぞと叱りまはせば、ソレ見さんせの、榮耀らしい格氣所か、事によつたら二年三年、わかれ／＼ござろもしれぬ、暇乞と仰直りの汗を一度にかいておかんせ。うぢ／＼せずと琴浦様、つれまして去かんせと、粹な女房の挨拶も、よい折れ口とコレ磯様、いふ事がたんとある、サアござんせと手を取ればふいと振り切り。不行儀せまい。

二人連手を引き合ふて入りにける。ドリヤ焼物を焼立て、祭しんじよと立つ女房。表へ二十六七な所目馴ぬ笠の中、そこか爰かと見廻して。
詞 下り荷物の世話なさんす、三婦さまといふお方は、爰らではないかへと問ふ門口より爰でござんす、どなたじや。私じや。私とはへ。ヲ、ようござつた、アリヤ徳兵衛のお内儀じや。是はしたり、サアマ此方へと挨拶を、馴染にして打上がり。三婦様には先程九郎兵衛様でお目に掛り何かのお禮を申しましたが、お前には始めて、私は備中の玉島にをります辰と申して、徳兵衛女房でござんする。これは／＼よう上らしたなア。アイアイ配偶徳兵衛殿ことは僅な科に國を立退かれまして、和泉とやらに居られましたを、皆さん方が世話にして、暫く大阪の住居。生れ付があらこましい喧嘩といへば一番がけ、はだ刀さいたやうな人、定めて何かお世話がちと、一禮いへばア他所がまし何のお禮。
詞 アイヤもうあらこましいは何方も覺えのある事。手前の人も十五六年以前迄は、夫は／＼

今では蟲も踏殺さぬ佛性。アレ彼のように片腕も数珠を離さず、腹の立つことがあれば念佛で消して參られます。娘がいふ通り常住これじや。ハテナア夫は結構なことイヤお内儀、徳兵衛も同道で下られますかサイナア女房の思ふやうにもない、聞いて下んせ。お國の告めも蔽りて迎ひに來たを喧嘩好きでな、荷且にもちよつと橋詰へ出て貰をが毎日毎晩、夫も亦直れば直るものヤレ嬉しやといふ氣も無うてマア四五日も後から下り、先へ下れとひつしよなき。未練さうに付はつてもゐられず、是非なう先へ下りますと話の中に三婦が女房、思ひ付いた一つの頼み、云ひ出すしほに茶をさし出し。
詞 アイヤ申しお展様。なれ／＼しいがお前へちとお頼み申したい事がござんす、何と私に頼まれて下んすまいかとらとへば、立直つて襟かき合せ。
詞 玉島の田舎に住むても一寸徳兵衛の女房でござんす。頼むとあれば一寸でも後へよらぬが夫のしにせ、引きはせまいマアいふて見さんせ。マア忝ないお禮から申します

定めて徳兵衛さんの話で聞いてござんせう
和泉の國濱田の御家中、玉島兵太夫様とい
ふお方の御子息磯之丞様といふが、様子あ
つて町奉行公なされてござつた所に若氣の至
りて人を、マア大阪に置かれぬ首尾。今も
今とてかきさせます相談。此お方をどう
ぞマア、私の方へ預りましよ。アノ預つて
下んすかそこを引かぬが一寸が女房、殊に
其親御の兵太夫様へ付いてはちつとこちに
も由縁もあり、預つて連れまして歸りまし
よ。そんならさうして下さんせ、ア、落付
いた落付いた。デエ呼びまして來ませうと
立つを釣船、コリヤ待て女房。
詞
女賢しうて牛賣れぬと、要らざる己が差配
頼んでよりや俺が頼む。磯之丞殿をお辰
殿へ預けては此三姉が顔が立たぬ。サア其
處を外へ預けるが彼方のお爲。スダぬかず
男の一分捨てさすか、面汚さすかたわけめ
と、叱り飛ばされもぢん。うぢん、徳兵
衛女房聞告め。
詞
イヤ三姉様、無理に頼まれたうていふでは
ないが、私が其人預ればお前の男が立たぬ
は何うして、但し女でまさかの時役に立た

ぬと見すえてか、まんざらひぢりかすり
くふやうなアイ女子でもござんせぬ、一旦
たのむたのまれたといふたからは、三日で
も預らねば私も立たぬぞへ。立て、下んせ
親仁様と、辛い女房の言葉の山椒、茶びん
頭を動かす。
詞
イヤどういふても預けては此三姉が男が立
たぬ、サア其立たぬ譯聞かう。いかさま夫
には様子があらう夫やマア何うして立ちま
せぬ。ホ立たぬといふ譯は内儀の顔に色氣
がある故、徳兵衛が思はうにも、三姉とい
ふ者はよい年をして不遠慮な、身に火の付
いたが切ないとして、若い女房に若い男を預
けてやつたは聞えぬと、思ひはせまいが又
思ふまいものでもない。あながちこなたに
限つて爾うした事はあるまいけれど、分別
の外といふことがあるに依つて、又疑ふま
いものでもないが。ないことじや。な
いことじやに依つて、結旬月が立てられぬ
腹立つまいぞや。いつそ此方の顔が歪
んであるか、半分削げても有つたら、徳兵
衛も何とも思ふまい、又世間も濟む俺や誓
文コレ數珠にかけ預けたい、此方の

根性見据えに依つて、が苗々が一徳兵衛
が立たぬ事が出來ると、俺は勿論九郎兵衛
までが、男が頼たる、といふ事はあるまい
けれど、外といふ字で預けにくい。マアさ
う思ふて下されと事を分けたる一言に、連
添ふ女房も理に服し、お辰はもとより言葉
も出ず、差俯伏してゐたりしが、何思ひけ
ん立直り、火鉢にかけし鐵弓の、火になつ
たのをおつ取つて、我と我手に我顔へ、べ
つたりあてる燒金にうんとばかりに反りか
へる。是は何故何事と、夫婦は周章抱きか
かへ、藥よ水よと勞はれば、正氣付きしか
むつくと起き。
詞
なんと三姉様、此顔でも分別の外といふ字
の色氣があらうかな。出來した。お内儀、
磯之丞殿の事を頼みます。スリヤ預けて下
さんすか。唐までなりと連立つて下され。
ア、照しうござんす、之でわたしも立つた
磯之丞様の親御兵太夫様は、備中の玉島が
御生國徳兵衛殿の爲にも、わしが爲にも親
方筋、其御子息様を預からいでは連合の男
も立たず私も主へ立たぬに依つて、親のう
みつけた満足な顔へ疵付けて預かる心、推

量して下さんせと語るを聞いてお次も涙、
三婦も涙の横手を打ち。

詞 ハテ徳兵衛は頼母しい女房を持つたア。
なぜ男には生れて来ぬぞ、情可物を落して
来。たッレ女房共奥へ伴ひ磯殿にも引合せ
備中へ下す心捨へ。お内儀、疵は痛みはし
ませぬか。何のいな我手でした事、ヲ、恥
かしい袖掩ふと。惜しや盛りを散らせしと
三婦が女房はいたはりて、一間へ。

詞 こそは連れて行く。早や暮近くなまなれの
、立つてもなし横に出る、男仲間の跳ね
出され、こつばの櫓なまこの八、獅子に雇
はれ赤頭、せんまの形を其儘に、三婦殿内
にか宿にかと、つき聲やり聲にじり込む。
詞 ボコリヤ二人ながら祭の形、まだ仕廻すか
呑みに来たか。今看細しかけて数珠の手が
放されぬ、そこらに樽があらう一盃せい、
南無阿彌陀、膳棚に蛸があらうぞ、なむ
あみだ佛、夫を肴と口ではぶつゝ、
つまぐる数珠と挨拶を、取混ぜ後生佛性こ
なたは牛頭馬頭惡鬼株、膝打たゝいて。
詞 八よ親仁に今の言ひをかい。ハテぶつづ
つを聞いて居よりいひ出せ。コレ三婦

殿、二人が連立つて来たはなたに貰ふも
のが有つて来た。花が欲しい、花くだはれ
ヤア、何じや、花をくれい。へエ扱は留
守の間に山車でも持つて来たな。ヲ、獅子
持つて来て美しい花を見付けて置いた、さ
る侍に頼まれ其花を貰ひに来た。ナハよ
それ、つひつかんで来て進ぜうといふて
お侍を宮の内に待たして置いた。前なら
腕づくで貰ふけれど、白髪を生えた人をさ
うもなるまい。但しこみずいふて見る氣か
金にでもする氣かと、仕掛ける喧嘩を数珠
でまぎらし。

詞 エ若い者といふ物は、づはくとたしな
め。わいらは住吉で始めてあふて夫か
らの出合まう根性が直つたと思ふたが。フ
ム其侍といふは大鳥佐賀右衛門といふわ
るであらうがな。マアそんな物。コリヤ去
んで云はうには、琴浦には磯之丞といふて
歴きとした男がござると行ていふてくれ、
コオ親父は、おいらを子供のやうに思ふさ
うなヲ、俺の目からは甥ののやうに思ふ。
ドリヤそんなら捌んで行のかと、立上がつ
て兩人が奥を目懸け駈入る所に、襖きつと

押明け、脇差下げて三婦が女房。

詞 コレこちの人、私や先きから聞いてゐた
が、こな様もう堪忍がなるまいの、娘五六
年願ふた後生を無にしていつそ切つてしま
はざるまい。ヲそんな事もよござんしよ、
が、あんまり夫は不便なこともあり。イ
ヤこんな時切らざ切る時もあるまいと云ふ
に二人はうぢん、きよる、性根を据え
て身を固め。面白い切られう、腰腰立たぬ
老老切りはづさして臺座後光、仕舞ふてく
れうと兩方より、サア切れくとせがみ立
て、入身になつて待ちかくれば、三婦はす
つくと立身になり。

詞 姉まう是非がない切つてしまを。ヤ夫はイ
ヤ俺が切るは此数珠と、ぶつゝり切つて後
へ投げ。サア是からが元の釣船已等に刃物
が要らうかと、はつしと踏み倒し、尻
引かけ。
詞 ドレ其脇差。ハテまう刃物は要らぬでない
か。イヤ此がらくたは爪にも立たぬ、根
ざしの侍めをばらして仕舞ふ、男の丸腰
も見苦しいと、大だら腰にぶつこむ所を、
どつこいさうはと右左、掴み付く腕ぐつと

詞 捻上げ。

詞 婦侍に逢ふて来う。ヲ、行てござんせとやる女房、行く男より氣の強さ、そとへ押出し跡びつしやり。三婦は二人を引立て、宮の内へとつれて行く。奥はしばしの別れぞと琴浦に呑み込ませ、酒酌みかはす折かに、表へ来るは九郎兵衛が男三河屋の義平次が、駕籠釣らして戸をこつ、誰じやといふて明けに出る。

詞 ホ三婦殿の御内室、此中はおひませぬ、何時見ても健さうな、お前も達者で珍らしい何と思ふて。サ年よると子に使はれます、九郎兵衛がいふには、此中から悪者どもに頼まれて琴浦殿を盗まんと念がける、定めて三婦も心遣ひ、四五日こちへ取込んでおいたら燈臺元暗しと氣がつくまい。女夫の衆の氣やすめに、迎ふて来いといふて駕籠までおこしました。是までいかい世話を取繕へばナンノお禮に及ぶこと。

詞 今も今といけずめがわつばさつば連合は其出入にいかれました、いかさま二三日此家をあらけ、彼奴らに皇明かすも魂膽。九郎兵衛様も其胸で、俄の迎ひでござんせう

男御のお前に渡すはたしか、奥にじや呼んできませうと、つひ立ち入れて義平次は、駕籠の衆待つて貰はうと、門につゝばり人顔の、見えぬを首尾と待ちあたり。奥は孟と納め、伴ひ出で、琴浦が、そんなら私も三婦様や、九郎兵衛様に諱いふて、後から行くが合點か。ヲそりや其時私が又迎ひに来ると辰が挨拶磯の丞もとも、一時には目立つ故、猶以てつれては行かれぬ、兎角彼の衆のいふ様にと、有めて別れ女郎は駕籠、磯とお辰は船場へと、立出うれば、三婦が女房。

詞 義平次様渡したぞ、お二人様も御無事でと暇乞も挨拶も、互ひの思ひ暮過ぎて、又の便を松屋町南と北へ引わかれ、足早にこそ歩み行く。宮には喧嘩くと騒ぐ中、若い者共聲々に。

詞 親父殿、まうよい、高が逃げる侍を相手にするは大人氣ない、ママ去ない戻られと徳兵衛九郎兵衛諸共に、三婦を宥め歸る店先。女房立つてコレ皆様。

詞 出入の濟口どうじや、こちのが退けてはござんせぬか。年寄だけで氣遣ひなと、

詞 問へば徳兵衛いかないかな。

詞 昔に變らぬ達者ながち、八と權とは蓮池へ何の苦もなくどんぶりいせ侍はふみつけた。ヲそりやなら入らんせ、祝うてわつと酒にせう。コリや女房氣が付いた、徳兵衛に取分けて内儀の事を話さにやならぬ九郎兵衛にも安堵さそ。サアまあ奥へと先に立ち、どりや内儀の御馳走を、食て行のかと徳兵衛は、伴ひ一間に入りける。跡に九郎兵衛立止まり。

詞 お内儀琴浦殿や磯殿が見えぬが、どこへいかれたか。さればいな、どうやらそぶふいふに依つて、お辰さんに預け、磯様は備中へ遣り、琴浦様はたつた今お前の方から迎ひに来たソリや誰が、ハテ親仁様が見えて九郎兵衛がいひまする、四五日戻して下されと駕籠持たして迎ひにお出でヤア、あの、此九郎兵衛が云ふといふて男の親仁が連れて行んだか。ヲイノシテ、其駕籠はどつちへ。たしか南の方へ。夫遣つてはと駈出すを、コレ待つた心遣ひな。

詞 迎ひに来た事お前は知らずか、知つた知らぬは後の事。イヤ夫間かぬ中は。エ、面倒

なとはねとばし、男の跡を九郎兵衛は息を
はかりに。
三重追ひかくる。

(床本) 長町裏の段

神と佛を荷ひ物はやし立たる下寺町高津侍
宮の賑ひに紛れて急ぐ男義平次かこの簾を
細引でくるく巻の俄網追立行を後よりも
ヲ、イ、呼びかけ飛くる聲の九郎兵衛な
む三寶と横切れにあぜ道行けば追つじきか
この棒つかんで畠中どうと打すへどつかと
すわりほつと一息つぎあへずコレ申親仁さ
まこの女中は知つての通り思有る方からの
預り人それをこなたがどこへ連れてござる
これやてつきりと悪者に頼まれ金にする氣
で有らふがそふしられ。てはこの九郎兵衛が
顔が顔が立たぬわ。いぞへ。此中も内本
町の道具屋で田舎侍に立立腰香爐を以て
五拾兩のかたりをへエ、見さげ果た重ねて
きつといふてからが嗜む心も有るまいコ
レ駕の衆太儀ながら其駕後へ戻しては身ぎ
上げさすればコリヤ待て九郎兵衛嗜む心が
有るまい見さげ果たとは忝ない。其あい

そづかしを待つて居たはい六年このかた娘
を女房にして、慰め者にしてゐるサア揚代
もらふヤイ爰な恩しらずめ憐れは元宿なし團
七といふて粹方仲間の小あるき貰ひ喰ひて
暮しておつたを引上て堺の濱で魚賣りさせ
まだ其上へ娘のおかちをてくり市松とい
ふ子迄へり出さしおつた。月々のあてがい
取るがよきに目を暇つて居る申乳守の町で
喧嘩仕出し和泉の牢へかまつて百日の上女
房子をたが養ふたと思ふサア夫れは皆其元
様のお世話ぬかすなせめて其入り目を入合
そふと思ふてもうけ事にかゝれば儂れが道
具屋の内におつてよふぼく上さしたなアイ
ヤ夫は其場のつゐ。まだぬかすかけふかく
琴浦をちよるまかしてきたのは惚れて居ら
る。佐賀右衛門殿へ渡し金にする氣イヤサ
夫ては顔が立たぬか、アノながくしいお
とがいを養ふてゐた此此顔が立たぬか但
しこちらの此、此、此ほらうけたが立たぬか
と足蹴にはつたとけられても男は親と無念
を懲へ齒を喰しはり居たりしが兎角詫るに
しくはなしともみ手に膝折かぐめ段々の仰
一つとして返す詞もござりませぬ。ながな

がのお世話の上又しては金儲まを妨けお腹
の立は御尤ももうふつゝりとお邪覓は致し
ますまい。があの女中の事許りはイヤなら
ぬ、サア素手でお託も申ますまい。友達共
が頼母子を致してくれまして爰に参拾兩ご
ざりますれば是をお前へ渡しましよ身の代
に取つたと思召し琴浦殿が三婦が方へ戻し
て下され外へやつてはこの九郎兵衛が顔が
どふも立ませぬ情じや慈悲じや親仁様一生
の御無心中、申コレ申と手引き袖引き膝を
つき無念涙の男泣き親といふ字は是非もな
や義平次も参拾兩當分取るに少しはやはら
ぎ琴浦をあつちへ渡せば百兩がもの慥に有
れ共かゝりやつながる娘の縁たゞやつたと
思ひ参拾兩で戻して駕代も存分先で取れい
と惡氣付くればこんな時よいねだり取サア
こいとさほひいさみの駕の者きた道へ又荷
ひ行く。サア約束の参拾兩受とる渡せのさ
いそくにイヤ其金爰にはござりませぬ宿へ
歸つて才貌と立たんとするを飛かゝりがん
づか掴んで引たをしエ、腹の立くくく
くく。むまゝと一ぱい。何の申左様
ではござりませぬ、内へ歸れば心當がま

あゝ愛を放してヤアどこへうぬが様
なまいすめはかふして腹おふかイヤかふ
してくれうかとねぢ廻し引廻し踏んだり蹴
つたりあげくには砂にすり付け石に打付け
引廻しく引廻されても手向ひのならむも
無念さ口惜きこたへかぬれば其つら付何じ
や肩ひぢはつて其眼付き何じやコリヤヤイ
男は親ア、慮外ながら親に向つて白眼けつ
ぶすぞよ無念なか口惜いかム、泣くか
かはいやなアさすりいちめてやるふこのせ
つせのはかくらへとにじり付られはきしみ
はぎり、すかしながめて、おのりや脇指さ
いてびこ付か面白いきられるどこへ後へ寄
りおると付廻して引とらへ。見ごと此赤い
はしでやつて見るかと持そへ引抜き、サア
是で切れくサアく切らぬかやい何のわ
たしがおまへを、イヤ切る氣で有らふ、く
く切られう切つて貰ふ一寸切つたら一尺
の竹鉾で挽返あサア切つて見よつて見よ
と指付け突付けもがき取らんくとしり合
ふ申思はず男が耳の根ずつかりヤレ人殺し
よ親殺しと呼ばはる聲に折よくも祇園はや
しのたいこね、九郎兵衛は殺す氣もないに

因果と男が大聲切つたく人と人寄せの聲を
留んと又さつぷり。あたりほとりを見廻し
てうる付中につかみ付横にはらへば又すつ
ぱり人はこぬかと氣もそざる松の内行く提
燈のあかりがいやきにどつさりの音ははや
しに紛れても紛れぬ命のおわり際うんと返
れば是非なくも取つておさへてとめの刃
ぐつとさしこむ其内に聞かかく聞へる御輿
の太鼓死骸を池へ投込々々血汐を流すはね
つるべくむ水則三途八難我身にかゝる罪と
がをあらひ落せどにぎり井の水より清き以
神樂ちやうきよふきの御輿の像は幸ひと紛
れ込通れ出たる千萬樂萬歲樂や極樂場命の
せとの札の辻八丁目へとぞ紛れ行く。

次 卅三間堂棟由來

平太郎住家の段

(床本) 平太郎住家の段

夢やむすぶらん妻は傍りを立退いて、輿を
覗いて立戻り、おづ／＼傍へ立寄つて、ゆ

り起せども夫は腰付の高肝。風が持てくる
斧の音、伎木とく／＼てう、く／＼と、木を
伐音やこたへけん。お柳は身内の苦しみを
じつとこらへて立寄れど、得も岩代の結び
松、我は柳の縁子が、顔を眺めつとつ置い
つ。

詞ヲ、それよ互に顔を合せては、身の上語る
も面はゆし、寝入給ふを幸ひに、今自らが
云ひ残す、必ず夢と思はずに、白地と聞い
てたべ。

詞ノウ我こそ誠は柳の精、雨露の恵に生育ち
かやうに夫婦と成る事も一方ならぬ因縁ぞ
や先の生にて誓ひたる、契りを結ばん其の
爲に、假に女の姿と變じ、柳が本に待受て
夫婦となりしも、五とせの、春や昔

の春の頃。

詞季仲が鷹狩に、鷹の足絡のかゝりし
時、數多の武士に切崩され、既に枯
なん此柳、其時に、お前が一矢の手
柄、鷹を助けて葉柳の、枝に障りも
あれく／＼、又もや愛にちりくる葉は、
我を迎ひに来るかと、思へばやる方詮方も
なくく見やる足元へ、ちりくる柳の葉隠

れや、亂るゝ心押しづめ。

詞
其時、情の恩、送る月日も重なりて、柳の花のコレ線丸、最早今年で五歳の春秋の重なれば、乳がなくなとも育つべし、成人の後々は、父の弓矢を請傳へ、潔い名を上てたもや、ヤ、母は今を限りにて、元の柳に返るぞや、必ず草木成佛と、同向を頼む夫よ子よ、離れがたなや悲しやと、いふ聲さへも忍び泣き、立つて見、居て見聲を上げて、わつと許りに泣き叫ぶ。音に目覺す平太郎、扱は夢とも現とも、聞しは誠で有けるか何連難面くやるべきぞと、抱き留むれば一間より、老母も俱に轉び出で。

詞
様子は聞いたこれお柳、嫁女なうと呼ぶ聲も、ちりくる柳の葉隠れに形はきへて失にけり。そこよ爰と母と子が、尋ねる音に線丸。

詞
かゝ様どこへいかしやつたかゝ様いなる、なうかゝ様と、父が後につけ廻り、尋ね迷ふ幼子を、見るに堪えかね、父親も。

詞
線が母やい、嫁女なうかゝ様と、聲をばかりに三人が尋ね廻れば遠にも引かるゝ心執着の、又も姿を現はす有様、ヤアかゝ様か

とかけ寄る幼子、夫も涙の聲を上げ。

詞
非常の草木と云ひながら、情有ればそこれ迄に、睦まじくも馴なじみ、一人の若を設けし身が、何連ふり捨て歸りしぞ、せめては母を見送る迄、俱に介抱してくれよと託ら歎けば漸々に、しほるゝ顔をふり上げて聞く安倍の童子が母上も、丁度我身と同じ事、一人の子を残し置き信田に歸りしとや。夫は野千の年経る身、我は元來草木の、歸る古栖の柳は今、伐崩されて枯柳、歸るといふは消ゆる身に、何連形を残すべき、哀れと思給はれよ。

詞
白河の法皇の御惱みしきり連、都の使來たりつゝ、我身を切捨て申す也、もはや朽ち木も時を得て、一字の棟と成る事も、一つは妙なる法の線、佛果に連し線あれば、情の恩を報ぜん爲、一つの簍を參らすると、平太郎が手に渡し。

詞
それこそは、白河の法皇の前出の御頭也、それを手柄に御身の上、再び出世をなし給へ、必ずゝ線が事、お頼み申し參らする詞
エ、エ、離れがたなや可愛やな。
合あれゝ風の音に連れ、柳の線を切拂ふ、

斧鉞がてうゝゝ、銜は爰に玉きはる

詞
時にそきたれいざさらば、さらばゝの聲の下、姿は見えず成にけり。わつと許りに三人は、暗より暗に迷ひつゝ、互に手に手を取りかはし、前後不覺に嘆きしが、涙ながらに平太郎我子を膝に抱き上げ。詞
なう母人、我よりは此若が愛着に引かれ、嗚や名残の惜からん、たとへ姿は見えず共、柳は妻が亡き佛、今一度此線に、見せし、我も見もしし、藏人とやらんにも對面せん、母人には此瀾、佛間へ直し下さるべし某は今直ぐに係を連れて柳の元へ、ヲ、夫れゝ一時も早う孫を連れてハ、ア、然らば直ぐさま線よ來いと、我子の手を引き二足三足、深山隠れの山寺の入相告ぐる鐘の音。

合
かぞへながらもそろゝと、さぐる足もと見付る母。
詞
これ平太郎、そなたは何とぞ仕やつたか。これはゝ様、とゝ様は目が見えぬいのウ。ヤアゝそりやマアいつから。ハイさればで御座ります、一月餘り、ふと鶏目が發りましたが、女房に言ひ含め、是迄はお隠し

申た。エ、聞えぬ平太郎、さういふ事なら
とくよりわしにも。ア、コレ、何にも此構
ひなさるゝな、したがおまへ様にも此坊め
も、今夜から嘸便りが。ヲイノ折も折とて
そなたの眼病、猶更わしも力がない。ア、
アレアレモアノ雪のふる事わいのマア火を
燈しませうと行燈の灯を提燈に、うつし持
つたる線丸、簀よ笠よと打着せて。

詞
そんならちよつと参つてさんじましよ。
オ、怪我せぬやうに、ソレ線よ。手を引け

よ。あいゝゝゝ。あいろは見えぬ鶴目の
父、杖と我子を力草、柳が本へとたどり行
く。母は佛間の看經に、鐘も幽に六字話、
風も身にしわ黄昏過、心を鬼の和田三郎、
晝の後の兼てより、夜は山賊の大膽不敵。
何でも掘出しゝためんと、大だら指足窺
がひ足、ぎしつく疊の物音に誰じや。

詞
イヤ大事な盗人じや、ヤアと恠り仕な
らも。

詞
イヤモウ折角這入らしやつても、見込のな
い此内、了簡して退んで下され。イヤコリ
ヤ婆、おれじや、晝來た者じやが見知らぬ
か。ムウナニ晝來たといやるからは、ヲ、

細主といふたはアリヤ嘘じや、山家のとろ
くに似合ぬ黄金十枚は、ハ、よい仕物、ま
だ臍くりが有るで有る、ありたけそこへさ
らへ出せ、コリヤ命は助けてやるわいやい
と鯉口ならしおどしける。

詞
エ、口惜い、夫と知つたら其時に、やみゝ
とはやるまい物、エ、平太郎は戻らぬかい
の、エ、やかましいわい、コリヤ、モウど
うですなをでは出しをるまい、搜してくれ
んとかけ行を、さうはさせぬと取付くを蹴

飛ばしゝ、のつかのか、納戸を引出す古
葛籠、あたふた開て手にあたる親子が着が
へに包んだ大小、鮫は鼠がまだ外に、御明
し上た釣なまへ、備へし襦袢を見て恠り、
どこやらぞ髪立退きしが、打點いてコリ

ヤ婆よ、葛籠に刀があるからは浪人に極ま
つたが又あの襦袢は何の爲じや、サアそれ
ぬかせ、ヲ、あれはの、息子が出世する大
事な物じや。ム、何じや出世するか、其出

世が猶耳寄じや、是や何者の襦袢じや、サ
アぬかせ、ぬかさぬかやい、ぬかさにや斯
うぢやと引抜くだんびら、目の先きへさし
付くれば。

詞
アいやゝゝとへずたゝに切られて
も、言はぬゝヤアしぶといおぼれめ、骨呂

をひしいて云はすると命もあら繩見付出し
がんぢがらみにぐるゝ巻、見上ぐる燈籠
の釣繩ほどき、結び付たる猿縛り。

詞
サアゝぬかせゝ、といふては引ばる釣
繩に、次第にしまる縛り繩、血筋赤らむ萬

紅葉、命の蔓ぞ危けれ。

詞
はゝゝ、はもがくはゝゝ、情の強い根性
から、痛い目を見をるわい、コリヤ下は滑

の溜り池氷の地獄じや、サアぬかせゝと
責ぜつてう。老母は苦しさ聲も出ず降りく

る雪に争ふ白髪、鯉にしたふ血の涙、見や
る向ふに提燈の、光りに恠りなむ三と、繩

を放せば眞さか様水の溜りへおちこちの、
むざん成ける次第也。遠の四郎も狼狽眼、

表へ迷入も一筋道、やり過ごして行かぬづ
と、庭の庭に身を忍ぶ。斯とくしらぬ平太

郎案内はいつも我門に、常燈明の光りさへ
提燈の灯に線丸。

詞
これとゝ様、佛様へとほした行燈が落ちて
有る。ヤアどれゝ、ホンニコリヤ落ちて有

る、不思議々々と門の口。

詞 母者人、申し、漸々今歸りました、母者人々々コレ、緑よ、母人は見えぬかれ、と、様、ば、様が池へはめて有るわいのヤブと驚き走り寄りさぐ々尋ねる手先へ障る繩を力に親と子が、漸々にかつき上げ。

詞 これ、申し母者人何者が此様に、ば、様なふ、と、といへど應へもあら悲しや、身體は氷と冷切つたり。こりや何とせう、どうせうと、かけ出してはかけ戻り、立たりゐたり氣は半亂。

詞 エ、目が明きたい開きたい。鴉目は何の因果ぞと、母に取付き身をもだへ、聲をばかりに嘆きしが。

詞 ハツアさうじや、水に溺れし身體には、藁を焚いて温むれば、再び息を返すと聞く、ヲ、それよそれよと父親が、指圖に簀をかき集め、蠟燭の灯を指寄せて、心を焦す煙さへ、親子が心通じけん、うごめく身體に猶も口寄せ。

詞 コレお心儘に、母人様々々と聲を限りに呼び生ける。漸々に目をひらき。
詞 ヲ、平太郎。孫もそこにか。ハイ、緑も

爰に居ります。お心が付きましたか、モ何奴が此所爲。ヲ、何者とは晝來たやつが扱は街で有つたるよな。シテ、どつちへうせました。ア、コレ、平太郎、母が横死は定まる業、随分身をば大切に、曾根の苗字を起しなば、之れに上越す悦びはない、随分親子長生して末の榮えを見せたまふ、それが冥途の土産ぞや、取分け不惑は孫の緑、今一度顔をを引きよせて、聲を限りのくどき言、可愛いや親には思はぬ別れ、辨へなき子心にも、さぞや便なう思ふで有ろ可愛い者やいぢらしや、又一つには嫁お柳かあい、夫子をふり捨て、歸る柳は切り崩され、魂宇宙をうろくと、獨に引から迷ふで有る、コレ、魂家の棟放れずば今一度姿をば見せてもと、くどき嘆けば平太郎、今日はいかなる悪旦那に別れ其上に天にも地にもたつた一人の母人が、非業の別れは何事と悔やみの涙はら、かゝる愛目を三熊野の、那智のお山の瀧津瀬も一度に落ちくる如くなり。老母は今ハの聲の下。

詞 ノウ、平太郎、緑が事を頼むぞやと、いふ

が親子の一世の別れ、はかなく息は絶えにけり。重なる思ひに親と子が前後ふかくに嘆きける。様子ををつくつと和田四郎、後に立てせゝら笑ひ。

詞 は、ムム、ばじめはくたばる、爺めは眼がつふれたな。さう云ふは晝うせた騙よな目。前母の仇敵覺悟ひろげといはせも立てず。コリヤやい、眼も見えぬ様を仕て、じたばたひるげば命がないぞよ、コリヤアノ、鯛鯛は出世の種とぬかすから、何者の鯛鯛じゃ有條にぬかせ、ぬかさにやうぬも小倅も今目前に芋刺じや。ヤぬかしたり、うぬらが手に合ふ某ならず、コリヤ、緑よ、刀を奥で取つてくる、此手をちやつと引いてくれ、ヤイ、其大小は引さらへ、爰におれが持つてゐる、これが欲しいか、ほしくばサアぬかせ、ぬかさど是じやとひらめく双先、目先は見えぬ眞の闇。恐い、と緑丸、逃行く首筋引つかみ。

詞 サア小びつ、ちよからさいなまか但しはぬかすか、サア、何と人質取つたる手詰と手詰。

詞 エ、此目が明てほしいなア南無權現様々々

々々、お柳やい。ヤアやかしいわい、いつその事にこの小倅、芋刺にしてくれんと段平逆手にとりなほせば、アレエ、く々と泣く聲に、今はたへ兼ね。

詞
ア、コレ申ます何を隠さふあの欄腰は、白河の法皇のと半分聞いて。

詞
ム、よし、つい一言ですむ事を、ソリヤ餓鬼めをこますと投やれば、親子が嬉しき緋り寄り、溜息ほつとつく空に。

合
鳥の羽音三聲、雲間をさして飛んで行く。其際に和田四郎、欄腰を小脇にかい込んで。

詞
白狀ひろいだ褒美、是をくらへと切り付ける。かい洗んで利腕しつかり。

詞
コリヤどうじや、いやぬは眼が見えるかよ。オ、アレ、蟻の這ふ迄見える不思議ヤア、くくく、そんなら生けては置かれぬと切込む刀引つたり、池の深みへ頭

詞
轉頭、尻引からげつゝ立ちたり。

詞
ヤア、と、様強ふ成つたのヲ、坊と、様はもう目が見えるぞよ、嬉しいかく、何より大事な此御頭と、しつかと渡す、後の方、這ひ上がつたる和田四郎腕をかためて

詞
切込む心得鐵にてしかと受留め。詞斯う目が明ば百人力、盗人ふぜいの已等に刀を當るは刃の穢れうぬに似合ふた鐵の刃先、老母が敵概念せいと、打つてかゝるを

詞
季仲の謀反に組し、軍用金を集めん爲、山賊夜盜は假の渡世、鹿島三郎義連なり、猥

めらが命の宿がへ、一々その首ならべんと廣言たらく、付入る早速こなたも弓矢は手練の若者、請けつ流しつ切結ぶ、鎧を削るふどきの空、みぞれ交りの雨の脚、踏すべ

詞
れば踏留まり、組んづ轉んづ。三重いどみける、平太郎は多年の誠、神や力を添ひぬらん。切伏せ、乗つかゝり、老母が敵うれしやと親子は身體踏付けく、

詞
嬉しき限りなかりける。折からさつと冷風の身にしみ、としみ渡り親子は顔をふり上ぐれば影か有らぬ縁が母。

詞
詞ノウ平太郎殿、御身多年の孝行と信心の功德に依り、月日の兩眼明かに、忽ち敵を討

たるも、大権現の神勅なり。肌を守りを見給へと、いふ聲ばかり聞ゆるにぞ、初めてはつと心付き誠にふしぎは兩眼、眼前敵を

討つたるも、偏に神の保護なるかと、懷中の守りより、牛王取出しよく見れば、數多の鳥の影もなく。扱こそ大權現の、不思議みせしめたまふかや、ハア、くく、有が

詞
たし、く、肝にめいずる折こそあれ、またも羽音は悦び鳥、飛連れ、目の邊、披き

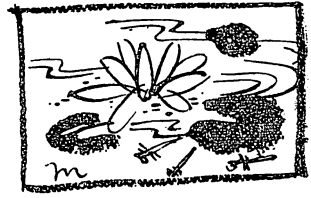
し紙は忽ちに、元の牛王と成にける。かゝる奇瑞を三熊野の、牛王の威徳木の世に、門戸に押しして盗人を、ふせぐ守り有がた

合
音頭和歌の浦には名所が御座る、一に權現二に玉津島………

詞
ホ、きこそ、某もさは存ずる所、左様ならば此柳、新宮の濱先迄、跡は海手を流さんと、錦の袋を手渡し。

詞
御頭を是に包まれて、跡より登りたまへかし、我は先立法皇へ此趣を奏聞せば、曾根の家を引起し、父の敵時澄、折をもつて

某が宜しう手引仕らん、いざ御用意と勸むれば、ハ、ア、忝なしと一禮のべ、縁諸共立かゝり木やり音頭は父が役、かざす扇もしほれ聲。



「合邦」の人々

森 ぼ の ほ

「合邦」に出て来る人達は、皆生々してゐます。本當に生々となく書けてゐると思ひます。合邦にしても、その女房にしても、お辻の玉手にしても、皆暖い血を持つた人達です。人間らしい人間です——本當に懐しい人達だと思ひます。

合邦——この年老いた修行者は、例の「汝元來枯木の如し」と謂ふやうな坊さんではありませぬ。彼は俗にゐて僧、僧にして俗——所謂「僧俗二諦の衣を着」てゐる、人間的な坊さん、坊主臭くない坊さんです。いはば浮世の風に角が脱れて、その頭と同じやうに、心もスツカリ丸くなつてしまつたのですね。彼は、彼自身物語つてゐるやうに、昔は歴々の武士でした。彼の父は「天下の政道を預り、武士の鑑といはれた」程の人物で、その親のお蔭で大名の數にも這入つたのですが、佞人ばらに讒言され、それが癢に障つて、浮世を見限つてしまつたので

す、下らない奴等と一緒に生きて行くのが莫迦々々しくなつたのです。そして、俳味のある洒落な生活を送ることになつたのです。

彼は大眾から遠ざからうとはしませんでした。彼の足は地上を離れようとはしませんでした。彼は大眾の爲に甘じて街上の説教者となりました。まるで放下僧などのやうに所謂「惡身の教化まで」演つて見せました。彼は阿彌陀や觀音を信仰せよと言はすに、閻魔を信心しろと説きました「奉加にたんと附く人は、少々悪い事をして、地獄へ落ちてゐあつちに近づき、そこらは譬の金次第」などと鉦を拍子に謡つたり、踊つたりしました。それは全く、「善惡邪正不二を」知らしめんが爲なのでした。衆生濟度の爲なのでした。そして彼自身「諷ふも舞ふも法の聲」と法悦に入つてゐるのです。

併し、皮肉な、底意地の悪い宿命は、彼をその解脱の心境に

いつまでも置かうとはしませんでした。驟然捨てた筈の刀を再び彼は取上げねばなりませんでした。脱ぎ捨てたと思つてゐた武士道の殻から未だ本當に解放されてゐないのに心付いた時この年老いた修行者は、どんなにか淺ましく、どんなにか恨めしく思つたこととせう。

「あつちから義理立て、助けておかつしやる程、生けて置いてはこつちも又義理が立たぬ」と憤り「現在の子を殺すも、浮世の義理とは云ひながら、これが坊主のあらう事か」と歎くのは、武士道に囚はれた彼の悲しい叫びです。

「茶漬でも手向けてやりや……幽霊もさぞ饑るかろ」と恩愛の一片を與へるのは、彼の魂のどん底から流露した貴い眞實の聲なのです。

武士道と、佛の教義と、世上の義理とに羽がい締めになれたこの哀れな老道心者——彼はやつぱり、閻魔様を祀るに相應しい人だつたのでした。

合邦の女房——お辻の母——彼女の切實な恩愛の前には、義理も、教義も、武士道もありません。母性愛唯一つで總てを抱擁しようとする處に、弱者の涙ぐましい眞剣さがあります。「幽霊はおるか狐狸の化けたのでも、今一度見た娘が顔」と云ひ、「夫婦になつて長の年月、たつた一度のわしが願」と云つてゐるのが、それであります。

お辻の玉手御前——世繼の繼子を擁護し、これを安全地帯に

置く方便として、計畫的な戀事を演じる中に、いつか機軸的な感念は薄められ、母と子との關係は忘れられて、知らぬ間に、或女性か或男性に憧れ、何物をも忘却してゐると同じ心境に入つて行つたのではないだらうか——さういふ見方も立てられる、否、さういふ合理的な見方の方が、彼女に對する同情を反つて深めるであります。

爛熟した年増女の戀——それが方便であらうが、計畫的であらうが、そのエロティック味さへ味へたら、それでこの作者は満足するに違ひありません。

「いかなる過去の因縁やら……寢た間も忘れず戀ひ焦れ、思ひ餘つて打付けに、云うても親子の道を立て、つれない返事堅い程、猶いやまさる戀の淵、いつそ沈まば何所までも……」——側目も振らぬ徹底的な、灼熱的な戀の吐息が感じられるではありませんか。

獨乙の戯曲には、母親と生みの子と破倫の戀に落る悲劇があるさうですが、「合邦」の作者も、本當はそれが書いてみたかつたのではないでせうか。若しさうであつたら、私達はその玉手に一肩懷しさを感じたでせう。そして一倍同情の涙を惜しまなかつたでせう。



福助と菊五郎のお辻

—再びお辻の舞臺姿を説く—

高 谷 伸

一〇〇パーセント・エロといふのは、女の素裸以上に出ないといふのなら、私は潔くエロを語ることを休める。唯物的なエロを流りつくした時、はじめて東洋の魅力が解されるであらう。歐米婦人の裸像を見飽きた目のみ歐陽多がく女の美しさを知るであらう。

白い素肌の露骨さが銀なら、赤い蹴出しの艶は金である。緋の長襦袢の誘惑が金なら、紫の頭巾の妖かしさは白金である。さうした意味で、玉手御前のいろいろ——お辻の妖艶——は東洋的ないろいろの極致である。

攝州合邦辻のおもしろさは、花道のお辻の姿に盡きるといつても過言ではない。それは、洗練された浮世繪の美しさである。これあるがために、私はこの一幕を好むものである。作者の精神はお辻の心をもつとも道義的なものとしてゐる。そのいろけは義理のためには手段を擇ばないもの、一つの道

程であるに過ぎない。だが、舞臺藝術としての美は、この道程の中にある。

筆者は嘗て道頓堀にお辻の舞臺姿を説いてから、一年餘を経たばかりである。にも拘らず、再び筆を執るのは、その後福助のお辻、文五郎のお辻を見直し、菊五郎のお辻を見たので、補筆したかつたばかりでなく、この狂言の面白さをもつと多くの人々に頌ちたいからである。こゝでは昭和四年三月中座所演の福助のお辻と、昭和五年五月東京劇場所演の菊五郎のお辻とを對照し、同時に昭和五年二月文樂座所演の人形を參照しつ、稿を進めることとする。以前の拙稿を併讀せられ、ば猶ほよろこばしい。

お辻の扮装は、福助は濃い紫の裾模様、黒頭巾、淡青が、つた織物の帯である。菊五郎は黒の着附の右袖をちぎつて頭にかけてゐる。従つて白地に赤い模様の袖が見えてゐる。人形では黒

地鍔柑子の裾模様、頭巾黒、白の扱帯が目立つ。筆者はかねての歌舞伎の理に落ちるのを避けよといふ論據から菊五郎には同意しかねる。といつて紫の衣裳も考へものである。黒地裾模様の紫、頭巾を適當だしたい。

幕あきは大阪は風音であけ、老婆が高燈籠に灯を入れる。これは、東京の太鼓をドンドコ入れ齋坊主などを出したのより情景をしつとりさせて優つてゐる。

「しん／＼たる夜の道、戀の道にはくらからねど」花道の出は、前にも説く繪の美しさである。聞く子や親は内と外のあたり、菊五郎は大體歌右衛門を踏襲してゐた。

母親が合邦を説伏せお辻を内へ入れると例のサワリになる。俊徳様の御事は寢た間も忘れず戀ひこがれ思ひあまつてうちつけに

こゝの所で福助は頭巾を口に啣へ兩手でかわる／＼しごくやうにし、菊五郎は頭巾にしてゐた袖を持つてうちつける。これは梅幸型である。人形では腰を浮かせてオコック形になる。この場合に頭巾をうちつける型は一番悪型である。なぜなれば、うちつけにの直接にといふ意味を誤解してゐるやうにとられ易いのみならず、充分發揮すべきいろけがこわされるからである。

お辻は俊徳丸と添はせてくれといふ、合邦は尼になれといふお辻は随分派手に身をもつてといふ、この間に親子の争ひがあ

る、菊五郎のお辻が「いやぢや／＼はい、いやでござんす」ときつぱり言ひ、右の袖をたゝんでトンと下に置き「ケンもほろ」の床で膝に手を置き下手むきにや、顔を上げてきまる駄々つ子らしさ、一旦入つた合邦が暖簾口から出て刀の柄に手をかけるのを妻が肘を抑へ、右手でお辻の手を引き入る時、お辻が立たずに引かれて行く形、こゝは無理な形だから身體の崩れ易い所をうまく形をつけてゐたのは菊五郎の腕である。福助は母と手を引きあふのは座つたまゝで、お辻が母の手を振り放して頭巾を攜んで外へ行かうと立つのをそのまゝ、後へ引き込むので形としてはやり易い道をとつてゐる。

あとは俊徳丸・浅香姫入平の三人の件で、入平が下手へ忍び、俊徳・浅香の残る所へお辻の二度目の出になる。

「ヤア、おなつかしや俊徳様心をつくした甲斐あつて御無事なお姿みたわいな」と、これから大いにエロ氣分を發揮する。浅香姫が支へるのを突き放し、跡を慕ふてかちはだしになる。人形では、このきまりが裏向きで、や、仰むきに顔の上に左袖をもつてきたよい形である。

「声の浦々浪速滴は、玉手御前俊徳丸の色模様で、上下の繪模様になるのが普通であるが、菊五郎のお辻はびつたり俊徳丸に寄り添ふて見せた。

それから鮑の貝を出し「いつか鮑の片思ひ……で貝に頼すりするしぐさなどあり、いよく積極的行動に出るために、玉手

はにつことうち笑ひと床に語らせる。「戀路の闇に迷ひしこの身、道も法も聞く耳もたぬ」とノリ地になり、俊徳丸の手を取らうとする、姫が支へる。入平が割つて入る。へ怒る目計は薄紅梅の見得になる。

こゝは福助は笄を口に啣へ、兩手をぶつちがへにして前へ出した見得だつた。菊五郎は入平を外へ追ひだし、戸をびつしやり締めて見得だから濫い。すぐかんざしを抜いて戸に栓をする段取りになる。

いよく嫉妬の亂行とくると、エロよりグロ氣分になり、人形だとかなりひどい御亂行である。

様子を聞いて合乳が出るのがへこらへかねて駈出る合邦、娘がたぶさ引摺みぐつと突込む水の切先、で福助は左肌をぬいて水淺黄の襦袢を見せた。これからあとはモドリである。つまりお辻が高安の二子の運命をわが身一つにひきうけたといふ本心をあかす所である。

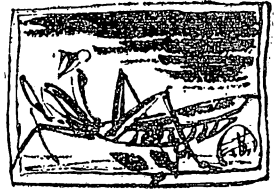
へ心ゆるめばかつくりとの幕切で、福助は花手桶に縋りこれが壊れる所で柄が入る。菊五郎のは庵内にありあふ黒の衣を着せかけさせる。白い着附に黒の衣を着ると、見た感じが日本離れして修道院行きである。人形では手負ひになつてからまだ、右に懷劍左に盃などを派手にやるので演どころは多いが南無阿彌陀佛で俊徳にすり寄つて見上げ見下ろす所に別趣の味が窺はれる。

あと、床の送り木魚入りの合方で幕になるといふのが普通である。

敵役に壺井平馬といふ役がある。原文でも家老に縛られて出るのがだが、この頃の人形では出ないことになつてゐるし、芝居では普通入平に斬られることになつてゐるが、昨年仁左衛門の合邦で千代之助が俊徳丸の時には、俊徳丸が平馬を蓮池の中へ斬込む、平馬はトンボをきつて落入るといふ珍型を見せた、これなどは蛇足を通り越して亂暴である。

人形では幕あきに、杖を突いた俊徳丸の出がある。ちよつと弱法師を思はせてよかつた。

最後にこの狂言の季節である。此頃では文樂座でも青々とした鍛盤や蓮を見せて、合邦の庵室、とても蚊帳なしには暮せさうにないやうな圖を見せるが、やはり二月頃といふ季節であらう。この作の母體とも見るべき謡曲の弱法師には、はつきり二月といふことを示し、梅花によつて風情まで添えられてゐる。勿論、弱法師が二月だから、合邦辻も二月だと速断するのではない。へしんぐたる夜の道といふ感じは、どう考へても夏ではないから、蓮の花に疑ひを持つまで、ある。蓮などは枯蓮でもなくともよい。いつもながら、いつそ雪道をとほく歸つてくるお辻の姿が見たいとさへ思ふ。雪の中に、くつきり黒い裾模様のお辻が立つてゐる。紫の頭巾に、ちらく雪が散りかゝる。それだけで立派な繪になつてゐるではないか。



謎帶一寸徳兵衛

京都南座八月上演狂言

太宰行道

序幕 石原通河岸の場

本舞臺一面淺黄幕——その前景にあつて、乞食二人と羽織袴大小の侍とが、何か打合せして居る。或る侍を迎撃して、その持てる一刀を奪はふとするものらしい。

淺黄幕を切つて落せば——

本舞臺一面の黒堀、その内に樹木茂り、上方邸堀、中央に橋を切出しにして見せ、凡ては石原の體。

乞食二人と羽織袴の侍とが、或る侍を中に斬り結んでゐる。既に仲間一人斬り倒され、箱提燈など取りちらしてある。
羽織袴の侍は、大島佐賀衛門、そして狙はれた侍は玉島兵太夫である。

乞食一人斬り倒され、兵太夫危き折、バタバタと登場して來た男

「大島殿か」

「圓七殿」

「ナニ、圓七とや」

弟子圓七來たと知つて兵太夫喜ぶ。
が、圓七の刃は閃いて兵太夫を斬り倒す。
佐賀衛門、喜んで兵太夫から白鞘の刀を取らうとする隙、そこを圓七、ドンと切下げる。名刀「千壽院」は圓七の手に渡る。

佐賀衛門は圓七の散々の罵聲を聞き乍ら、息絶える。佐賀衛門と乞食一人とを河に打込み、取つておいた佐賀衛門の片袖を兵太夫の手に握らせ（千壽院）を己れの鞘にさしかへた圓七。
——ゴーンと鐘の音。

向ふより琴浦、兵太夫の娘お梶、腰元お繼、若黨彌平、半助出て來る。
正面に來て、兵太夫の死骸を見出した一同、驚き悲しむ所に、東の揚幕に入りかけた圓七が引返して來る。

そして、兵太夫が据つてゐる片袖、割り纏の紋所から、仇敵は大島佐賀衛門と言ふことになる。亡妻の娘ある圓七とお梶とを夫婦にして、仇討たせ、名刀「千壽院」を奪ひ返さうとする琴浦の計らひが終つた所に、出て來る先刻の残りの乞食。圓七、これを斬り倒して「手向けの一大事」と言ふ。

幕

二幕目（一）下谷入谷の場

お梶は病氣で臥してゐて、繼娘のおいちが甲斐々々しく介抱してゐる。圓七は借金取の應對に忙がしい。蒲團の貸料を督促する權助が、醫者道庵の裁きて、晩方にと言ふことにして歸る。圓七、道庵が合ひ口を奪ひ、お梶にかけた蒲團を剝いて、不首尾から今は屋敷を追出されてゐる市助と五郎と共に外に出る。
それから暫し、合ひ口盗まれ、穿きものを圓七に穿き去られた怨みをブツ／＼言つて道庵が去つた後に——
前後して訪れて來たお繼に彌市「千壽院」の

こと、仇敵のこと、そして今の團七のことで、話がつく。どいづまり、團七とお梶等が名刀と仇敵捜しに旅に出る路金を、琴浦に仰ぐべく、彌市が使ひに行くために来る。

門口まで半助と五郎に送られて團七歸つて来ると幾干もなく、三河屋義平次が訪れて来る。團七は借つた五十兩のかたに、三河屋にお梶を渡さうとする。拒むお梶、強ひる團七、争ふ拍子に火のついた鐵弓で、お梶は顔に傷つけられる。

お梶出て来てお梶を介抱して暫らくして供迎への男と歸る。入り替り權助が来て、蒲團の代りに蚊帳を持つて歸る。勿論、蚊帳なくて苦しむであらうおいちのことを思つてお梶は言葉盡す。が團七には、おいちへの愛もないやうである。

と、義平次、奥より出て来て、お梶をつれて行かうとするが、お梶の顔の傷を見て嫌がり、その代りにおいちをつれ去る。「滅相な、私の代りに義理ある子とは、そりやなりませぬ——草葉の蔭の此子の母さんの、位牌の前に立ちませぬ」

斷腸の思ひのお梶の涙が、ことばが、團七のいまには通じよう筈もなかつた。お梶は義理の棚に喘ぎ乍ら、おいちを取り戻すため、髪は亂れ、よろぼひ乍ら花道へかゝる。

後を又、團七が——幕——

二幕目 (二) 淺草田圃の場

本舞臺、三間の間、うしろ打抜き田圃、上方に刎ね釣瓶の井戸、正面、草土手、腹に笹など茂り、舞臺前、流れ、水草、よき所稻むら——駕鼻二人、おいちをのせた駕を擔いて、掛け聲と共に出て来る。後から義平次。

暫らく、問答してゐるところに、お梶が廻りつく。情理を盡したお梶の言葉は義平次を煩さからせるばかりである。

花道から大小、尻からげ、破れ傘、團七、足早に出て来てこの中へ入る。

義平次等は去る、残つたお梶は狂言にする團七の切腹をとめようとして我が身を、その刀に刺される。死なうとする際に、お梶は團七の一切のこれまでの狂言ごとを知つた。名刀「千壽院」取りの張本人、そして父の仇敵、が、どうすることもできないお梶であつた。

無念の中に死んで行く。團七はお梶の死骸を井戸へ突こみ、刎ね釣瓶の紐を切る、石は井戸の中へパツタリ落ちる。向ふより、大和屋徳兵衛、一本差し、帷子の

形、羽織を抱へ挟み、三度笠を抱へ、裏附きをして、後へ挟み、尻からげの姿、手には王寺海老屋の貸ぶらをして灯して（このところ鮮かな二役振り）そしてお梶、帷子の形、跣足にて、裾からげ、裏附きを持ち、手拭かぶり、青天井の日傘の濡れたるを相合ひにきして出て来る。

本舞臺、團七との行き違ひ、世話だんまり徳兵衛の雪駄に手がよりぬき取る團七、お梶は戒名の附いたる片袖足に觸るゝまゝ拾ひとる。

幕

役割

娘 後に團七女房お梶	中村 福助
大和屋 徳兵衛	中村 扇雀
藝者 一才女房お辰	中村 政治郎
若黨 彌市	中村 新太郎
こし元 おつぎ	市川 蓮女
後に女房おつぎ	市川 鷹正
奥女中 琴浦	實川 吉三郎
大島 佐賀右衛門	淺尾 大吉
若黨 半助	實川 蓮若
後に石塔半助	
三河屋 義平次	
大島 團七	



夏の東京の劇界

菅 原 寛

殺人的不景氣！

いやな言葉だ、内務省の調べたところによると、筋肉労働者の失業者は現在三十五萬人とある。それにインテリを加へたら怖るべき数に上つてゐることだらう、濱口内閣が成立して間もなく、政府は——金解禁を斷行した。そして濱口さんは國民に向つてこう云つた。

——皆さん、もう少しの辛棒です、この不況も長いことは御座いません……………。

とラヂオで、全國津々浦々まで、ライオン吼えを張り上げてから約半歳以上をけみして來たのにもかゝらず、相も變らずユウーウツなる風が吹きまくつてゐる。減俸案に散々味噌をつてゐる内に、どうだ。

従つて、夏の東京の劇界を物語るに際しても、この根本的な財界不況のお影をこうむつて、あらゆる方面へ、ユウーウツを

與へて、暗雲低迷——と來てゐるのだ。

お役人の減俸に頭を悩まして、あうも、こうもと云つてゐる内に、大松竹は遂に減俸を斷行して、濱口さんに一泡吹かしたなどは、近頃少しく皮肉ではないか。つゞいて、出勤回数削減實行、床山直營、も一つづいて大道具直營、更に觀劇料金の引下げ——なんて思ひ切つたことをするか、少し政府はこれを參考に見直してもらひたい位だ。それもこれも不可抗力の不況から來たとは云へ。

さて、然らば芝居國の最もいやな、夏枯れ時の小屋の景氣は？どうであるか。東京は大阪のやうな工合にはゆかぬ。なんと云つて大阪には動かない金があると見へ、あまり芝居に對しての影響はないらしい。そこへゆくと、東京は空景氣のみで、底を割つて見ると、とかくウラナリである。

七月はお盆を控へての興行、八月の水枯れを控へて、更に更

に苦心を要する時だ。芝居道にはボーナスはないにつけても、一番力コプを入れざるを得ない月だ。かて、加へて、いやな不景氣と闘つて、どうでもフタを明けねばならぬ。

流石に東京松竹系の各劇場は全部總出の陣容、歌舞伎座は、羽左勘彌梅幸左團次の四巨頭をかりあつめて、久しぶりに左團次の「修禪寺物語」を出し、羽左と梅幸は「見初より源氏店まで」を呼びものに、一番目は「其時の赤穂城」をつけて、大いに大衆に向つて叫びかけてゐる。特等六圓は高くない。さて入りは？各自のひいき役者の出でゐるためまづどうやらソロバンがとれそうだ、たゞし中日前の形勢。

明治座は例の新派だ。石の上にも三年とやら、今日までよく漕ぎつけて来た、往年の新派華やかなりし頃を偲ぶによしがあゝる。こゝで一才と僕の云ひ分がある。新派更生の旗上を三年前の夏に本郷座で試みてから、とにもかくにもいゝ成績をつけて来た。一番乗るか外るかの時、僕は松竹の囑託として、新派のために苦心した一人だ。川村花菱君は「演劇研究」に新派今日の全盛について、いとも愉快なジマンバナシが出てゐるが、これも決して無理のない話だ。その生長を見とけて、自分は去つたものゝ、なんでも根氣よく長くやるに限る、大谷社長がそれもこれを適當と見て下さるからだ。幕内がワイ、騒いでもなんにもならぬ、母ばやりで「緑の母」を川村先生が書き下したが、少し食傷ものだが夏むきの怪談「小夜衣草紙」などよ

ろしい。河合と喜多村の兩優が抜けてゐるのが、いさゝか淋しい氣がする。然し水谷八重子といふ動かぬ觀客層を持つてゐるから、客足がつづて、まづメデタイである。

帝劇は？。七月はまづ第一等の成績だらう。猿之助、わが愛するエンノスケだ。「坊つちやん」がまた出て来た。見直しに持つて來いだ。夏の風物に小道具のコホロギか、バツタか、キリギリスか、とにかくエウモアがある芝居「坊つちやん」萬歳である。女優では房子延子薫の三人がつき合つてゐる。

新歌舞伎座は？若手壽美藏以下の新鋭で、「伊勢音頭」に「色彩間 荊豆」と「權三と助十」を出して、若手連の競演だけ、相當に入りがある様だ。

さて、こゝに最も注目すべき問題がある。それは東京劇場の「松竹大レヴュー」であるのだ。

レヴュー！ レヴュー！

全盛時代だ、この時この秋に際して、レヴューの本興行的な企て。フタを明けるまで、どんなに心配したか。たかの知れたレヴューだ、短期興行にとめておいた方が無難といふ説も、イヤ、一つ本興行的にやつて、成功したら芝居に「アッ吹かしてやらうと、インボウを企てた説も、さてフタをあけたら、どうだ、客は来るわく。

オウ、案ずるより生むがやすい。當つた。美事に成功した。

芝居の脅威だ。いや、そう有頂天になつては困る。芝居は芝居の客。レヴユウはレヴユウの客だ。何故に然らば客がこの松竹大レヴユウを見に来るか。

時代だ、流行の寵兒だ。

たゞしだ。いゝ氣になつて長くやるのは考へものだ。年に一回か二回かこうした、スケールの大きい企てはよしとするもの、のべつにやるものではないと思ふ。

七月の興行界に於いて第一等の成績を占めた、「松竹大レヴユウ」東西相呼んでの一大興行。鼻が高いわけだが。これに精進して一段と光あらしめたいものだ。

お家の御奉公とは云へ。レヴユウ團が輕卒に、芝居道の人々をけなす必要もなく、お身等は、お身等の天分と使命を果たせばいゝのだ。演劇報國の名の下に、産業合理化の下に、と申し上げて、勝つてカブトの緒をしめて下さい。

最後に淺草はどうだ。

七月お盆の月に、すみからすみまでの不入は情けない。たゞ映畫のみがソロバンがとれたと云ふ。淺草では芝居は見られなくなるのか？。

いやな八月が來た。

御難物語や、珍談、奇談も、わけて夏なればこそ、避暑をかねての地方巡業かどうなることか、この殺人的不況に――。

もう不景氣といふ言葉を使用しまい。モウ澤山だ。

暑中 御贈答中
化粧函調進

液体の力
活泉のバ

アサヒビール
ASAHI BEER

清涼飲料 日本麥酒株式會社

お岩を語る我童

扇港八月劇壇唯一の歌舞伎、神戸松竹劇場の納涼興行出演の片岡我童を初め嵐橘三郎、市川九團次、中村霞仙、片岡ひとしらの若手錚々連が全部初役だと云ふので劇通から異常な期待を以て迎へられてゐる大南北作の「東海道四ッ谷怪談」の稽古場を訪ふと、折からの酷暑と闘ひつゝ、熱心に稽古中の我童がその初役お岩に就いて語る。

「初役ではありませんし、此の狂言は私の家のものでは、文久元酉年五代目彦三郎のお岩で八代目（仁左衛門）が伊右衛門を、明治十七年五代目菊五郎のお岩で、先代我童（後に九代目仁左）が是亦伊右衛門を演つたのですが、何う云ふものか、必ず舞臺で釘を踏み抜くとか、道具が倒れるとか不慮の災難を惹起するのです、そんな譯で、叔父（仁左）も伊右衛門は演つたと思ひますが、お岩は誰も演つた事がありません。

私も伊右衛門なら誰方かのお岩で附合つて見度いと思つてましたが、まさかお岩をとほ考へても居ませんでした、ですからお岩の演出には逆も苦勞してゐます大體の型は五代目（菊五郎）の、それに梅幸さんから教はつたものに、私自身の考へを盛つて……、

栗島狭衣 考案脚色

探偵眼ばかりの男 怪奇眼

コーナンドイル 原作

都會の闇に跳躍する惡魔

1 千九百三十年六月二十五日

時刻は午後九時から十時までの間——大家から本所外出町に達す新開道路の交叉點に於けるゴー・ストツプを犯した一臺の自動車。それを交通巡査が呼び止めた。

——何故空車の癖に、あわてゝ反則な眞似をするんだ！

2 空車ですつてお客は二人乗つてますよ、こんな押問答の末、巡査と運轉手がその扉をあけて内部を見ると、美しきモダンガールが慘殺されてゐた！

管轄警察署へ運轉手を進行して取調べた結果、その運轉手は助手を持たないモローであつたが、素質上邪惡な點は認められず、馬鹿正直な

勿論あの芝居を大南北（四世）さんが書き卸された當時と只今では、時世も違ひますから、凄さも現代の見物に受ける様にアレンドするには脚本の矛盾した点もあります、それは幾分演出で加減して、出来得る限り寫實で現代の觀衆、若い人達に理解してもらへるお岩を演り度ひと思つてゐます。

牡丹燈籠の舞臺で、蚊帳の中に居ても近附いて来る亡霊の影を見た丈で、ゾツと悪寒を感じると云ふ程、人一倍神經質な私ですから、苦心も一入です、それから幽霊の演出に就いて先覺者（梅幸さん）もさう云つて居られました（が）に聞いたのですが、凄く見せるには、腕を張つてグツとお尻を後へ出し、軽い白眼で怨みの對手を見るのです、その場合對手をキツク睨むと反つて凄さが薄くなるなどの事です。演所は髪すき場ですが、一生懸命必ず好いお岩を演り終せ度ひと希つて居ます、役も多いので暑さが身に沁みます。（小佛小平、佐藤與茂七等七役早替り）

話が此處まで進んだ折、偶然電燈が消える

「怪談會のやうですね」

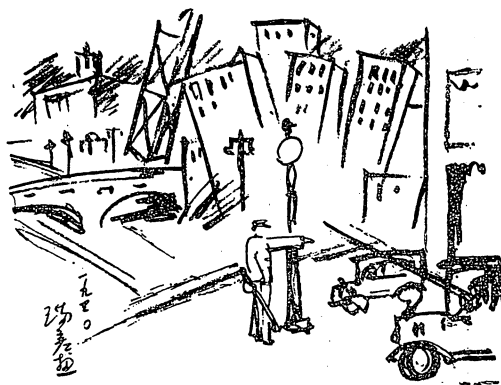
と、ひとし（お梅役）が云ふ、道頓堀の灯が空に映えて、夕立が近くを通るのか冷風が行きすぎる。

「皆初役と云ふので、書卸しの新作ものを受取つたやうに工夫に大童です」

卅疊敷の大座敷で、橘三郎（伊右衛門）九團次（宅悦）（直助権兵衛）霞仙（おそで）（秋山長兵衛）等皆熱心に下座につれて汗を流して居た。（七月廿八日）

男であつた。

——彼は死體運搬者でないこと、一回もストツプしたことがないと主張した。更に彼の陳述によればその前後の様子は斯うである。



3
……私がその男女二人連の客を拾つたのは、大家のガード下で、男は脊の高い黒い支那服、白いソフト、黒い大きな眼鏡をかけて居りましたから年齢は判り兼ねますが、年寄りではない

樂屋點心

初日の舞臺裏から

六 田 甲 二

◇裸の與右衛門◇

空合といひ、温度といひ、けふ——八月一日——ばかりは絶好の芝居日和。朝來の豪雨も午後は小止みになつて、こんな詠え向きなことはない。それに怪談ぞろひと白井社長の名策も人氣になつたか、道頓堀の各座（といつても中座は休んでゐるから、芝居は結局浪花座と角座、それに千日前の樂天地、四ツ橋の文樂座）は大入の盛況です。

そこで編輯部からその大入の舞臺裏を廻つて、夏の樂屋風景を書けとの命令「六田甲二」多分に鋭覺を持出して、さて浪花座へ廻る。

いつもなら初日は見物席の隅ツこで觀劇するのが、けふは満員の場内をちよいと横眼に「ナル程、よく來てゐるワイ」と思ひ入れ宜しくいつた形で、戸屋口から消える。

花道下を通つて、舞臺奈落に出た私は更にドロ繪の匂ひとホコリツぽい空氣が渦卷いてゐる舞臺の裏に出ました。

丁度田中總一郎君作「果物語」の序幕第一場の裏の道具立最中、平舞臺に家の内部が半分ばかり出來てゐます。電氣部の村田芳生クンや大道具の連中が火鉢に何やら仕掛けをしてゐる様子、よく見ると果がこの火鉢で灰神樂を浴びて火傷をする、そのネタを仕込んでゐる所でした。そこも素通り、ツキ當りのコンクリートの階段——こゝの幹部の樂屋は別館コンクリート建てになつてゐる——を上つて、一番西の隅にあるトヨタヤの部屋のれんを分ける。

と思ひます。それから女の方はあの通りのモダンガールでして……。私がどちらへと訊いた時、男は臆を突出して眞直ぐに行けと無言で命じました。それから二三分経つか經たない内に女の「呀っ——」といふ悲鳴が聞えたので、思はずハンドルを握つたまゝ振返つたのです——と私の見たものはガラリと光つた人間の眼——エ、全く。眼ばかりの男、だつたのです。

それから夢中で車を走らしたゝめ、あのゴーストツブのシガナルが目に入りませんでした。因に女は自動車の止められるホンの少し前に絞殺されたもので、シーートの端を苦しさの餘り掴んでゐた……。

こうした證言によつてこの殺人の加害者と認められる男は——その支那服を着た餘り年寄りでない男で、疾走中の圓タクから飛降りて逃れたものらしい。

被害者の所持品紙入が抜きとられてゐるが、他に携帯品を何一つ持つてゐないので手素りは全然得られなかつた

大部の夜の十字街に起つた怪奇な圓タク事件——眼ばかりの男——は新聞紙を販した。

名男衆の太閤さんと床山やその他の男が三人控え部屋に息を呑んでゐます。全く息を呑んでゐるといつた感じのする程おとなしく控えてゐました。

「お暑う——」

「暑、おまんな」

夏の樂屋、挨拶の第一聲。首から上はチャンと與右衛門が出来上つた壽三郎、フンドシ一つで鏡臺前にアグラを掻いてゐる。

「これから果ですか——」

「フン、さうだす……。場（見物席のこと）よう来てまつしやる、アメのツイタチやさかいなア」

「この果、福助さんがやつた「粧水」の書替えださうですね」

「いや、あれは相撲取やけど、これはやつぱり大南北の方に寄つてるやうだす、わての相手役をする浪花千榮子がすこしカタうてな……」

話しはナンセンスだ。それからのはだかの與右衛門が、太い脚を二本投げ出して、ぼたん刷毛でホタ／＼と太股から爪先へ叩き出す。

「親方、もう廻つてもよろしおますか——」

控え部屋で誰かが訊いてゐます。與右衛門が立上ると、待構へたやうに男衆が白麻の半じゆばんをのせる、水色ちりめんのキンかくしをさせる、そして白がすりの帷子を着せかけると、

「よッしや、廻つて……」

與右衛門が云ふと、バタ／＼と廊下を人が走る、やがてデ、デ——とベルが鳴る開幕のしらせです。

◇メロンの輪切◇

トコダヤの隣には萬年若衆高田瓦と山田隆也がゐます、ボンで通る瓦は前の「旅鴉」で役上り、湯上りに部屋着を引かけた所、山田隆也は「果」二幕目に上總屋熊吉といふ貸元で顔を出す、今、丁度そのセイタイの彩色最中、トノコと青墨で板に張つたセイタイの色を合せ、「隆彌の彌をどうして也にしたんですか」私の愚問。

光・音・酒・屑・脚・煙。

此處はモンタルデユ・カフェエ。一人の年若い大學生——黒い支那服、白い帽子、黒い眼鏡をかけた怪青年が、女給の梅子に莫大なチップを與へてゐる。

——もつと遊んでいらつしやい、大丈夫、貴方はいつても氣許りつかつてゐらつしやるわね

あら、ステーチで何か初まつたやうですわ……二人はホールの方へ去つて行く。その背後から見てゐた女給櫻子と月代は軽い嫉妬にとらはれながら睨やく。

——妙な人ぬえ

梅子さんも物好きねえ、曰く付の人だつたら大變よ、

例の物ね、ソラ女持のさ、どうしてあんな物を持つてゐるんでせう……

スツと其場に姿を見せた、探偵梶川は女給に話しかける。

——ア、君！君！

——アラ、吃驚してよ

梶川探偵は女給の紅唇から探索の絲を手繰り出さうとする。

6

舞臺では華やかなチャズダンス——脚！音！光！の闊舞である。
とテーブルの片隅から突然旋風の如く騒ぎが

「どうも彌の時代はよくなかつたから生れ變つたつもりで也にしました、だがチツとも變り榮えがしないて弱つてますよ」

部屋見舞の果實かごがある。山田はそこから大きいメロンを取上げて輪切りにする。

「耳さん、たべない？」、「いたゞきませう」「あなたも——」「ありがたう」

で、三人がそれを食べる。食べ乍ら話が続く——。

「山田さんの鬚物は珍らしいですね」

「え、こんな事やつた事がないので……今度は親分です、一場ツキりの役ですよ」

「さうですか——、高田さんはもうアガツたんですか」

「え、私はね、もうこれでラクをさせてもらつてゐるんです」

「そこで、こんなに早くアガツてこれからお出かけですか——例のユリ香さんに逢ひに……」

「元、元談ですよ、あんなこと日日の新谷さん書いて……メイヨキソンですね」

「でも、悪くはないでせう」

大阪日日の花柳記事が話題になる。丁度その時分にはメロンも皮と種子ばかりになりました

◇ 藤村・食事中 ◇

石河薫と香取幸枝がその東隣になつてゐるが、二人とも舞臺に出てゐるのか、留守。弟子もゐない。全くの留守、アキスゴヨウジン！

その次は階段降り口を隔てた東の隅に山口俊雄と藤村秀夫がゐます。山口は金五郎の役で今舞臺へ行つてゐる。藤村が來客の老紳士と饅どんぶりをバクついてゐる。

「よッ、これはくゝゐらつしやい、この間の踊りにチクバイへ行つたんですよ、あなたに耳打ちすりやよかつたと思つてね、どうもあの時は失禮しやした」

この間とは、七月二十九日第一劇場滿一年記念の小宴を北濱ナダマンで壽三郎以下幹部俳優らと共に張つた時の事、踊りに宗右衛門町あたりのお茶屋へ流れたらしい。

「バカに景氣がいゝんですね」

「そ、そりやアもう——」

起る。
ダンサーの狼狽——黒眼鏡の男の逃走——梶谷

川探偵の追跡！

7

その後——俄然それらしい手索りを得ることが出来たのは、各署の捜索願や保護願の中に、彼のエンタク事件に關係のある地點——

小石川區大塚中町三百六番地——

太宰俊藏が出してゐる一通が堀田探偵長の頭に響いたのである。その太宰は六十二歳の白髪交りの老人で温厚篤實そのものゝやうな男だつた。

彼は探偵長の取調に對して次の如く答へた。

——實は私金融業をやつて居るものでございます。處で去年國元で知り合ひになりました女が、東京へ出京して参りましたので、ハイ、それは松田浪子と申す女で、兼ねて捜索願を出しておきました者でございます。實はどうも年甲斐もない次第で……いやどうもその……

8

太宰の同棲者浪子はウルトラ、モダンガトルとして魅力百パーセントの女性であつた。言へば、この太宰と浪子の生活は不合理極まるものであるが、其處にはまた近代色を帯びたエロ氣分があつたのだ。

そらしたこの變態的な家庭生活への闯入者——

酔つた時の口調だ。藤村はよく虎になる。ドロ／＼になつて、首を振り乍ら景氣めかす格好が思ひやられる。

「現代怪談ツてものはどうだらう」

「女怪ですか、どうも近頃の見物は惚れたのハレたのや、心中ツてなものには馬鹿に同情がない様ですね、見て笑ふんですよ、心中や墮落は滑稽な喜劇に見えますかね」

鯉の匂ひを發散させながら眞面目に見物の關心を考へやうとする。

「笑ひますかね」

「エ笑ひますよ、女に對して愛してるとか惚れてるとか、情熱を吐露する場面になるとドツと来るんですよ、演出が悪いのでせうか」

「芝居にもよりますが、一體近頃の見物はそんな戀愛至上は喜びません、笑ふとしたら冷笑でせう、近頃の見物——社會人は生活的に何か深いものを要求します、それを兼ねた芝居なら笑ふことなく見てゐるでう」

トンダ演劇的インテリだ！

◇愛嬌、無愛嬌◇

藤村の部屋の前には、舞臺の上、即ち舊館樂屋の二階へ通ずる階段がある、それを上つて左に折れる、カドは元安豊と坂東豊之助、その二つ向ふに六條波子ののれんが掛つてゐる。

のれんを分けてのぞくと、二つの鏡臺の前に二人の女優が顔を直してゐる。二人ともチャンと衣裳を着終つた所である。鏡の中に、入口の私の姿を發見した左側に坐つた六條波子。

「おや、だれだと思つたら……あなたなの……ゐらつしやい、タマには來るものよ、あんまり長いこと顔を見ないと死んだんぢやないかと思ふわよ」

今日はまづ彼女に先手を打たれた形である。いつもながら、私の毒舌でうんといぢめつけてやる所、私の口がしまつてゐる間に、グワンと喰らわせたつもりだ——。

「君こそ、生きてたのかい」

遅い、いくら私がさう云つた所で、死んだんぢやアないかと思ふわよ——には負された

——それは金融の關係から懸念にしてゐた醫科大學生金村策三で、彼金村と浪子は趣味や何かの點で共鳴しちまつたのである。それは浪子の鬱積してゐた不満の爆發でもあつた——

9

無論、後悔したのは太宰であるが聞けば、金村は非常な色魔で、所謂金と色との二筋道で、巧に誘惑したに違ひない——それでもかくも出奔した浪子の搜索願を出したと言ふのだ。すべて話を靜かに聞いてゐた堀田探偵長は被害者、即ち圓タク内の死美人の寫眞を見せる。と、頓狂な聲をあげた太宰老人。

——たしかに——たしかに浪子に違ひありません……新聞紙上でこの事件は知つて居りましたが、不思議なことには、翌日の夕方（六月二十六日）横濱からの發信で浪子からの禮狀のハガキが参りましたので、こんな間違ひはないと思つて居りました。

10

そして浪子の筆跡とおぼしきハガキを見せつゝ、太宰老人は自分の愛してゐた女が殺されたのを知つて、復讐して貰ひたいといふ様な面持で、意外にもその犯罪の行はれた即ち六月二十五日の夜、金村と浪子の動靜を語りはじめた以下その物語りである。

で、中へのツソリと入る。今まで、黙つて鏡臺をにらんでゐた波子の隣の御婦人、百姓家の女中か何かに扮装した、ひどく汚れたのかスツと立上ると、私の顔をデロリと乙に澄ましてサツサと出て行く……。一體そんなに様式ばつた女優さんは誰だらうと、鏡臺上の張紙を見ると——西條静子。去年の夏、サル人が連れて来て第一劇場に世話してくれと引合はされた時、何分よろしく——と頭を下げた西條を私はおぼえてゐる。

あの時の西條と今日の西條と、大變な相違。萬更知らない仲でもないのに無愛嬌なこととおどろいてそこは早々と引上げる……。後で聞いたことだが近頃彼女は仲々大した勢ひさうだ。何が彼女をさうさせたか——それは知らぬが、女は愛嬌、自重をすゝめます。

◇ 千早のイツト ◇

だから、樂屋廻りなんて、愛嬌よく迎へてくれる愉快さばかりではない。無愛嬌のや、下眼に見たがる役者に掛かると、たまらない。と考へたらその並びの西の端、下加茂の千早晶子の樂屋へ入る。今は下加茂の女優監督をしてゐる元女優中川芳江が來てゐる。

「どうです芝居の初舞臺は……」

「え、どうですか、一生懸命にやつてゐますけれど……見て下さいまして？」

「明日見やうと思つてゐるんです」

「アラツ、今日見て下さればよかつたのに……今日は熱演しましたのよ」

荒い模様の浴衣を着て、鏡臺の前で湯上り顔をタオルでおさへてゐる。彼女、舞臺上の色氣が足りない！と此間からエロの研究中だとか。だが、女二十二、自然に備はるイツトはその浴衣着が描く曲線にあり……など、考へて此處を出る。そして舞臺裏に降りると、舞臺で豫て山口の金五郎と山田の上總屋熊吉、六條のお油の役が出を待つてゐるのに會ふ。

「金五郎判つただといふだけの役です」——山田がいふ。

「呑み込み久太みたいな親分ですな、その扮装は——」と私。

「そんな喜劇がありましたね」と山口、六條も横から「私のこんな役うつらないでせう」とトテモケンソン。斷髪と洋装ならダンゼン百パーセントの彼女、銀杏返しに襟付が何かのイキな如御役である。まあシツカリやつてもらひませうと元の奈落へ——

11

その夜太宰は應接室で帳簿を調べてゐた。時刻は八時過ぎ雇婆のお虎に案内され来たのは金村と浪子である。

彼等は過去の罪を詫び、改めてお願いがあると言つたのだ。

——フム、お願い！——

そこで金村がおどく／＼と唇を開いた——

——誠に此上の勝手ではございますが實はその……改めて浪子さんとの結婚をお認め下さらないでせうか……

太宰の永い沈黙。

堀田探偵長に述べる言葉は續く。

私はその二人を深くゆるしました、その結婚も認めましたが、さて、その結婚の相談に就いて浪子の居ることは氣まづかつたので、浪子を表の銀猫カフェーへ獨り待たせ懇談したのです。

この話は約四十分、私が金村を送り出したのは九時過ぎ、ですから恐らくすぐ金村は銀猫へ行つて、圓満に話がついた事を話し、喜ぶ浪子を圓タクに乗せて恐ろしい罪を犯したのではないでせうか……

太宰老人はさう物語つて深い溜息をついた。これに依つて被害者の身許も判明した、同時に「眼ばかりの男」即ち醫大生金村を捜索するこ

芝居に現はれたる忍術

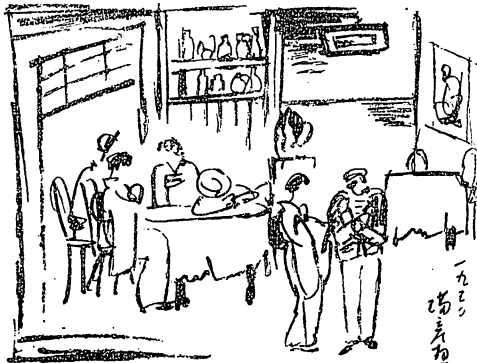
大澤 休 象

はしがき——人類が互に鬭争して、萬事武力を以て解決してゐた時代に非常な發達をした忍術は、社會的事情と、政治的關係から、其方法、トリック、道具等一切に疎蔑する。況んや他人が竊つと窺ひ知らうとするや、一寸でも訊きたいと思つてゐるなど覺つたなら、瞬く間に殺して仕舞ふ。慘忍といへば慘忍なる所業ではあるが、それほど絶對秘密を嚴守してゐたもので、且つ仲間同志堅く結束して殊更に奇怪な風説を流布して世を欺瞞むいてゐた。だから其真相が分らず、嚴正なる史家は自他をあやまる事を恐れて筆を染めなかつたのである。その代り、自由奔放何等の拘束をうけない小説家や戯曲家等は絶好の題材として旺んに空想を逞しくし、忍術を描くと必ず當る。之れ忍術といふものが正史の表面に現はれずして芝居や映畫にのみ幅を利かして來た所以である。しかし本當の事は誰れ一人として知らなかつた。博覽強記を以て古往今來唯一人者と自らもゆるし他も認めてゐた瀧澤馬琴すら彼れが一生一代の大著、南總里見八犬傳に、寂莫道人肩柳實は犬山道節忠興が圓塚山で火遁の術を使ふ條を、或は火定を示す所を描いて居るが、忍術の内容方法、ト

とに探偵局の方針は定まつた。

12

夜の銀座。
人・人・人。
この雑踏のペーパメントに影をおとす黒い支



那服の男。

それを追ふ太田原、梶川の兩探偵。

13

省線の改札口。
すつと問題の男が改札口を通る。

リック道具等に就ては一字半句もゆべてゐない。それは無理のないはなしで、彼れが八大傳を書いた文化天保時代に、忍術の祕傳書を閲やうと思つても出来ない事だし、強いて探らうとすれば直ぐ笠の臺が飛ぶ。其他の人も皆同じであつた。俾い私は明治に生れ昭和にかけて丁度十七年間、苦辛慘憺して蒐集した忍術祕傳書、原稿にして一萬枚以上もあり、道具等も手に入れ或は圖説に依つて、模型を作つたりしてゐるから其中で芝居と關係のある部分丈け抜いてお話ししたいと思ふ。

◇俳優は忍術の名人である

忍術修業の第一歩として、先づ三つの事を行ふ、第一は世上百般あらゆる職業のコツを知る。第二、あらゆる職業の符諜と、諸國の國訛りを眞似る。第三はいろいろの遊藝を稽古する。以上三つの事は、忍術者の變裝變相に一番必要で、之れが出来れば、ざつと忍術者たる資格が具はつた譯である。

忍術者は時と場合によつて何にでも化けねばならぬ。又聲色を使はねばならぬ。それから忍術には陽忍と陰忍とあつて、陽忍とは、變相即ち顔や髪の方を變へ、變裝即ち姿形を變し國訛りや符諜を眞似て正面から堂々と乗込む。陰忍とは人目にかゝらぬやう、そつと忍び込む。或は陽中陰術、陰中陽術と云つて、變相變裝をして正面から乗り込み、萬一忍術者であるといふ事が露見した場合に「とつさ」に姿を隠して遁走する。又陰忍の術で、こつそり忍び込んだ後、その時の都合で、急に姿を現はして敵と談笑せねばならぬ事もある。これが芳居の早替りであり。俳優はいふ迄もなく、後によつて何にでも扮裝し、いかなる階級の言葉でも使ふ。その上手下手に依つて或は默殺され、或は劇の神様と褒められる。忍術者と同じ事であるが只一つ異うところは忍術者は上手になればなるほど其名を人に知らしめない

問——太田原探偵があはたゞしく追つて行く。

14

浪花夜市である。

ミス・サカイズである。

省線を利用して逃れた怪しい男が四邊に注意しながら歩いてゐる。

追跡を續けてゐる太田原探偵の出現。

やがて二人の格闘——遂に太田原はその怪しい男を捕へた。

夜店の群集がわけもなく叫ぶ。

——そいつらばかいな！

——それ處か殺人犯ぢや

——エツ！

15

捕はれた醫科大學生らしい青年の携帶してゐたノートには催眠術に關することが記されローマ字でS、K、即ち金村策三と讀まれる字が書いてあつた。そうした東京へ護送される列車内で彼は絶えず

「遂々、やられた高飛びをしそなつた」と呟

くのであつた。

× × ×

東京探偵局の一室。

その犯人を心待にしてゐるのは堀田梶川の兩

探偵である。

夫れは餘り他人に知られると却つて仕事が出来なくなるからである。これに反し俳優は上手になればなるほど名聲を上げ最負が増へる。

それから、も一つ申して置きたいのは歴史や芝居に現はれてゐる人物又は事件、筋のうちで、普通の人が何とも思つてゐない事柄でも、私の目でみると忍術である場合が少くない。尤も夫れは私がいふので無くて、忍術者が、種々なる史實をみて、彼れと是れとは忍術の何々の術であるとか云つてゐる事で之れは伊賀甲賀流の忍術者の書いた古い記録に残つてゐる。例之、檜山騷動の相馬大作である。相馬大作が忍術者だと云つたら、誰れも本當にしないかも知れぬが、大作は正真正銘マイナシの忍術者だから致方が無い。いでその證據を御覽に入れやう。

◇檜山騷動、相馬大作

相馬大作の事は皆様御承知であらうが念の爲歌舞伎細見を引用して略筋を叙べる南部藩と津輕藩とは檜山のことから結ばれ解けぬ葛藤を生じ互に確執した。南部の忠臣下斗米秀之進は深く津輕藩主を恨み、相馬大作と變名して之を覗ひ射撃せんとして捕はれ刑せられたのは文政五年八月の事である。士氣頽廢した幕末に相馬大作の忠勇は忽ち評判になり諸書にその事跡が傳へられた。講釋に仕組まれたのは先づ二代目田邊南龍が手をつけ、後邑井貞吉に譲つて完成させた。講談がはじめて劇化されたのは明治十四年九月大阪角座の「講談檜山實記」勝彦造作、市川右團次(齋入)の相馬大作。右團次は翌十五年二月谷中(東京)に「相馬大作之碑」を建てた。

これを少し三代目河竹新七が改作して、明治十五年三月市村座上場の豫定で「檜山旅路聞書」を書いたが關係者から故障が起り官府から中止を命ぜられた。同時

——太宰が来て一眼見りやすぐわかる。

——勿論です、處で、太宰は此頃外出勝ちだもんですから、雇婆のお虎を連れて参りましたあの女でも同じことですかね。

然し彼等探偵が待ち侘びてゐる犯人は列車から逃走してしまつたのだ!

が、堀田探偵長は太宰の使用人お虎から意外なことを聴いて微笑した。

「……旦那は萬物師でサーカスの元締をしてゐます。たしか今は板橋で興行してゐるやうです云々」

16

その夜。
堀田探偵長がその曲藝團に赴いたことは勿論である。

曲藝團のステイヂ。

メスメリズムを應用する一奇術師の登場!

「呀ッ!あの眼だ!」

探偵長は叫んだ! 怪青年が夜の街を歩む。

列車から逃亡した怪青年が夜の街を歩む。

太田原、梶川探偵が捕縛した。

處がそれは意外にも癡狂院を脱出してゐた狂人であつた。

ナンセンス劇の一幕。

落膽する兩探偵

の仇讐たる津輕家を亡ぼさんと浪人して、相馬大作と名乗り、江戸に出て、平山行藏の門に入り日夜武藝に精魂を打ち込んだのである。ところで私の謂はんとする問題は其平山行藏で、彼れ名は潜、字は子龍、兵原練武堂、運籌真人、等と號し、父勝壽、祖父梅翁、共に劍道の達人であつたが殊に注意すべきは、その祖先、平山庄右衛門といふ人で、これが立派な伊賀流の忍術者であつた。

天正十年六月二日、徳川家康（其頃は松藏元康と云つてゐた）が河内の飯盛山の麓で晝飯を喫てゐたところへ京都西本願寺から茶屋四郎次郎といふ人が早馬で駆けつけて信長公が本能寺に於て光秀の爲に弑せられた事へ報らせて來たのである。飯盛山は桶公の古戦場であり、近くは大阪石山本願寺方と信長方と鎧を削つた處であるから元康は愉快な氣持で見物してゐたのだが此凶報に接して愕然として色を失つた光秀は織田方の客將たる元康を見つけた次第討ち取れといふので京都附近は元より街道筋には孌竟な武士を手配りして頑張つており、間道はと云へば山賊野伏の群が落人の路用太刀甲冑等を奪はんと鵜の目、鷹の目であるから追がの元康、後の徳川家康も進退これ谷まつて切腹しやうとした位であつた、その時に御供をしてゐた人といへば、武田勝頼の姉婿穴山梅雪、伊井萬千代、酒井忠次、本多忠勝、渡邊半藏、服部半藏、和田八郎定教等の小勢であつたが、幸ひ服部半藏は伊賀流の人であり、和田八郎は甲賀流の出身だつたから大和を突き、り、伊賀へ行かうとしたが果然途中で大勢の野武士に襲撃され穴山梅雪は殺され他の人々は生命から一馳せ抜けて、甲賀の多羅尾次郎の家へ立寄り、そこで伊賀、甲賀の忍術者三百人を呼び集め何れも變装して神君を警固し鹿伏兎山を越へて伊勢の白子まで送つて行つた。其時の伊賀者二百人の中に、平山行藏の祖先、平山庄右衛門が居つたのである。平山行藏は、眞貫流の刀法、大島流の槍術、關口流の拳法、長沼の兵法から弓砲の技

太宰はベンキの臭氣が深ふ應接間でサーカスの女桂子と話してゐる。

——旦那の持つてらつしやる祕密の扉をあけて思ふ存分に愛して下さい。

桂子。

——ハイ。

——殺されてもか。

——エ。

太宰はそこで無氣味な笑ひを洩らしつゝ恐るべき六月二十五日の夜の祕密を桂子に語るのだつた。すべてを識つた堀田探偵は躍りかゝつて犯人太宰を捕縛した——。

太宰が如何なる方法で浪子を殺したか。

彼は浪子を銀猫カフェエにやつた後、女を奪はれた憤懣から金村をメモリズム應用で殺害し、屍體は床下に隠した（それでベンキを應接間に塗つてゐたのだ）そして金村の洋服を奪つて變相し、家を出る時には、雇女のお虎にわざと姿を見せ、言葉かけた。

それから金村の假面をかぶつた太宰は銀猫カフェエで待ち侘びてゐる女を連れ出し、折柄通り合せたモロウ圓タクを拾つたのである。

初め太宰は女を殺す氣ではなかつた。

に至るまで悉く其蘊奥を極め和漢の兵書および城壘、戰地圖、器械の諸圖等多く
 中島座の「南部樹楠木山語」と同一事件を脚色したのも中止を命ぜられた。
 渾身の義憤、津輕の城崎越中守はその居城造營の爲めに南部の織岡領の檜山に斧
 を入れたので兩家の間に葛藤が起つた。織岡家の義士、尾崎秀之助、後に浪人して
 相馬大作は主家の屈辱を雪がん事を心に誓ひ、江戸に出て非人下總の留と身をやつ
 す。恰も越中守が遠乗の歸りがけを三圍の土手に要して美事に之を刺した。大作の
 義憤はまだ止まぬ。嗣子城崎左近將監が始めてお國人の機をうかび大作は三峰山
 上に大砲を仕掛けて一發放つたが、それは替玉で將監は神通川を渡ると聞いて直ち
 に駆けつけてその首級をあけた。大作は遂に城崎方に捕はれて江戸へ護送の途中、
 旗本飯田市十郎の助力で脱走し、顔に痣をつけて下部に身を窺して匿まはれる。將
 監の跡を襲いだのは城崎右京之助である。お家度々の凶變に警固は嚴重を極めたが
 登城の途中江戸御本丸近くで、又々大作の爲めに鐵砲で射貫かれた。大作の腦裡に
 は報讐の他何物もなかつた。やがて兩家の和睦が成つて檜山は再び織岡領に返つた
 時、大作は義士の鑑として格別に切腹を賜はつた。以下略
 芝居として近いところでは澤田正二郎君矢立峠の相馬大作、彼の精力に充ちた顔
 と體軀で、花道の引き込みが彷彿としていまだ目に残つてゐる。

◇騒動の原因

芝居でも講談でも檜山が原因に成つてゐるが夫れは全く根も葉も無い架作で、實
 は豊臣氏が東伐の時、南部の家老石井右京が藩主を欺いて津輕を割き奪つたので、
 藩主は夫れを苦にして恨み死をした。其後津輕家が繁昌して南部家を凌轢して一方
 に雄視するのを慘慥して起つたのが南部の藩士、總兵衛の倅、下戸米秀之進、主家

が、浪子、その態度に氣づき——「呸」と
 聲をあげた瞬間、太宰の惡魔の如き手が渡女の
 首にする／＼と捫みついた。
 その女の悲鳴に振返つたのが前記の圓タク運
 轉手だつたのである——。

大野醫學博士
 乳兒に一番良
 パーモール
 松竹石炭



蒐集或は作成、蓄藏してゐた。又講學の傍ら著はす所の書籍、兵原文稿二十六卷、唐宋瞭斷九卷、孫子折衷十三卷、海防問答五卷、彼れは我邦に於て武藝十八般を定めた程の傑物で殊に、忍術は父祖傳來であつたが深く秘して、嘆氣にも顯はさなかつたが、相馬大作の義憤に感じて竊かに授けたものである。

さればこそ、大作は證議嚴しい裡に巧みに變相變裝して大事を執行し得たので殊に、大筒鐵砲から地雷火まで、みな伊賀流の火術をやつたのみならず、神通川では水遁の術を使つてゐる。そのほか大作の忍術を書けば随分面白いのだがこれ位にとどめ次は九月號だから、鬼一法眼三略卷「菊畑」とくの一の術。

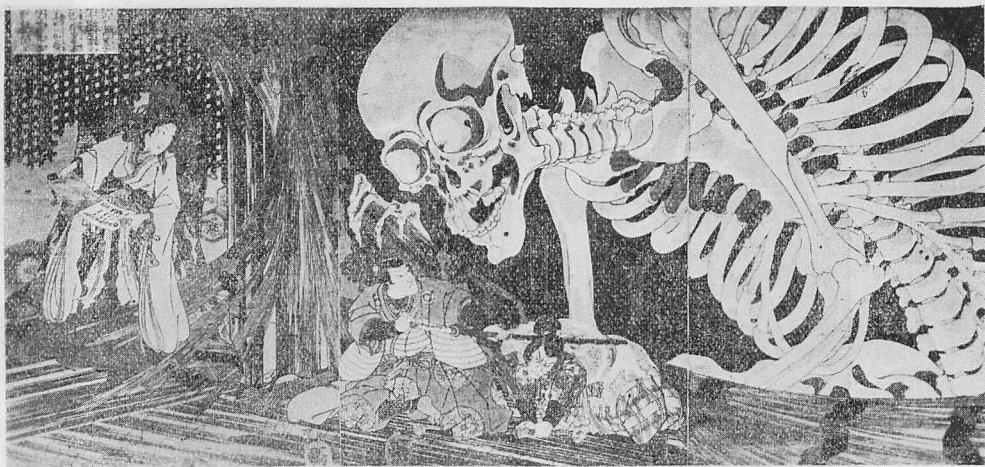
暑中御見舞申上候

神戸・松竹劇場演出

嵐	市	淺	片	片	尾	嵐	片	實	片	嵐	片	片	片	實	片	中	片
	川	尾	岡	岡	上		岡	川	岡		岡	岡	岡	川	岡	村	岡
橘	九		我	梅	橘	我	延	一	若	我	松	我	八	ひ		霞	我
三	團	奥	松	運	十	三	太	兵		一		之	百	と			童
郎	次	山	壽	童	郎	郎	郎	衛	橋	郎	正	助	藏	し	仙		



怪談 版畫誌上展



『世善知鳥』

相馬舊殿

平将門敗亡の後その長子良門は将門山に立籠つて復讐戦を企てる源頼信の命をうけて大宅太郎光國はこの古御所に忍び入る将門の娘瀧夜叉姫は、傾城如月と姿をやつして色仕掛で光國を味方に引き入れやうとしたが、現れたので妖術を以つて光國を悩ましたが、光國は奮闘よろしく妖怪を亡ぼすグロの代表的古錦繪。

怪談劇の權威

鶴屋南北作るところの

『彩入御伽草』

小幡小平次の怪談

旅役者の小幡小平次は大のお人よし、女房のおかつは小平次に助けられた恩ある亭主だが、持つて生れた淫奔女で、亭主の目をかすめて、仇し男をこしらへ謀し合はして綾瀬沼で恩ある亭主を殺してしまふ、如何にお人よしの小平次も、これでは浮ばれない。
書卸し當時その恐ろしさに男ですら顔をそむけたといふ。



『殿舊馬相鳥知善世』

と鳥てし化魄魂し殺自てめ諫を門良が方安鳥知善
。彩異一の中靈幽。るめ諫を逆反の君ほな。りな



『東海道四谷怪談』 怪談劇の随一

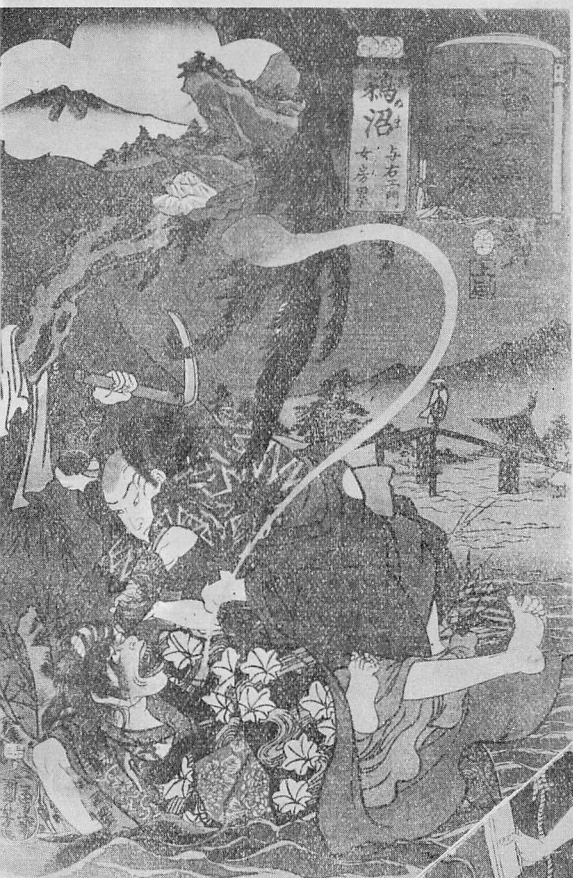
陰惨な氣がひし／＼と迫る隠亡堀に太公望と洒落た伊右衛門の目の前に、お岩と小平とを戸板両面に縛りつけた所謂戸板返へし、お岩の手は動く……その後の伊右衛門にはお岩の怨霊がついて歩く。

墓場の白張りから下りて来たお岩、抱えたのは伊右衛門には我子であるが、受取つたのは石地藏、重い筈である…。



『薰樹累物語』

今日歌舞伎で多く上場される累の藝題であります。
累は夫の忠義を助けやうとしたのに、園生の前に宿つたのは夫與右衛門の胤と奸臣の手先に袂きつけられて絹川堤で園生の前を鎌で殺す、與右衛門は之を見て涙を吞んでお主の爲めに累を殺害したのであります。
物凄い累の形相、柳の枝と人魂の交錯など、怪異でなくてなんでせう……………。



『佐倉義民傳』

あまりにも知れ渡つた狂言でくだしく申上げるまでもありません。領主堀田上野之介は惨忍な刑を宗吾一家の者に與えたのでその怨靈は夜毎／＼現はれて上野之介を悩ましたのである。

磔臺を背負つた宗吾の凄愴な姿、狂死した光然の異形。禊の薄と共に夏なほ寒き思ひぞする。

『隅田川 續 倂』

(おなじみの法界坊です)

法界坊は松若丸をはる／＼と尋ねて吾妻へ来た野分姫を口説いたが聞き入れられず、とう／＼殺してしまつたのであります。松若丸は名も要助と改めて永樂屋の手代となつて鯉魚の一軸詮義に浮見をやつしてゐる内に、永樂屋の娘おくみと戀仲になつて、はては惣賣に身をやつし道行の段取りとなります。戀に破れた野分姫と、慾と色とに見放された法界坊とが惣賣りの妾となつて松若丸とおくみの道行を擁して二人をなやますのであるエロの幽霊水中から出るなんてところ涼味百パーセント。

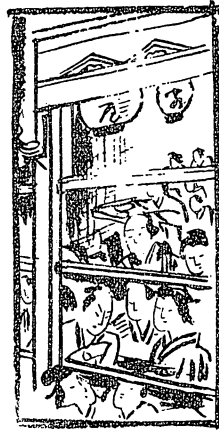


『花野嵯峨猫魔稿』

鍋島家に古く傳はる座頭を壁に塗り込んだといふ怪談と猫又の怪異を仕組んだもので書卸し當時、鍋島家からの抗議で御法度になつたなど曰く附きのもの。

鍋島の當主と別腹の若殿との間に家督争ひが起り當主と高山檢校との團圓の勝負で之を定める事になつたが、短氣な殿は勝負が叶はないので、檢校を切り殺し死骸を土藏の壁に塗り込む、高山檢校何條そのまゝ土の臭をかいであられやう、夜な／＼壁を脱けて鍋島家の人々を悩し、檢校の飼猫は主人の怨みを後室嵯峨の方に化けて様々な仇をする。

八月の劇場



劇壇往來

第一劇場公演
滿一周年記念公演

浪花座

八月一日初日
毎夕五時半開幕

【狂言】門脇陽一郎作並に演出「女怪」二幕五場住吉重装置・並木五瓶作「伊達模樣戀染分」一場・神田榮一作「旅鴉」三幕大塚克三装置・田中總一郎「累物語」三幕六場森寛次郎装置村田芳生照明・演出田中總一郎

【配役】重ノ井新左衛門、三樹屋瀧十郎、與右衛門(壽三郎)瀧十郎女房おまき、太平次女房お辨(三好)女給一枝、娘おきみ、久助の女房(西條)おうみ(浪花)お瀧(六條)女

給よし子、娘お品(香取)北村桂子、藤兵衛女房おちか、累、若い女(石河)山六郎、上總屋熊吉(山田)女馬士おさん、伴三太郎(政雀)井長閑一、嵐辰十郎、金五郎(山口)小山祐吉、本田彌三左衛門、名主助作、毒蟲の八藏(進藤)藤波、寺男作兵衛(豊之助)樂屋番留五郎、久助(元安)金子晋也、浪花屋藤兵衛、渡守り太平次(藤村)井長文代、樂屋番の娘お吉(千早)

角座八月興行

一日 初日
十二時半、六時二回開演

【狂言】第一、コナン、ドイル原作、栗島狹衣考案脚色「眼ばかりの男」全三十二景はなしのしる。第二中井泰孝作「幽燈夜話」三幕六場

【配役】櫻中軒桃水(都築)梶川探偵(原田)事務員金太、寄席の主人(新田)探偵局の小使、長藏の次男次郎(武澤)太田原探偵(山本)探偵長堀田秀雄、家主關長藏(藤本)疑問の怪青年、長藏の長男精(小波)大宰俊藏、お豊の弟男作(芝田)櫻中軒燕藏(小織)甚之助の妻お豊(木下)お豊の娘菊江(井上)松田

浪子、女中おみね(登喜岡)長藏の妻廣子(中村)女優桂子(山口)女給梅子(富士川)女給櫻子(富士岡)隣家の娘お咲(小松)女義太夫小ふじ(金剛)大宰家雇女お虎(澤井)話術者(栗島狹衣)

笑ひの家
田宮貞樂一座

樂天地

七月三十一日初日
十二時、五時半二回開演

【狂言】第一、文藝部撰「中元御祝儀」三場第二、平井鶴次郎作、秋宵夜話「かむろの仇討」三場、第三、喜樂人作「その瞬間」三場、第四、佐藤幸雄作「意見の借財」二場
【配役】料理人豊吉、兄清吉、家持持赤木(貞樂)工場長樹本、おでん屋平造(九貞樂)商人幸右衛門、金物屋山本(香樂)紳士原田、偵造の悴偵一(春彦)貧しき職工北村、豊吉の父梅造、郷土根來角太夫(喜鶴)職工長松原、女將おふく、高利貸鬼塚(樂笑)雄造の息子章(喜貞樂)會社員宮田、山本の悴忠廣(美貞彌)藝妓力彌後ニ妻貞代、遊女小東太夫、偵造の妻しげ(喜千哉)原田の妻しづ、遣手おたつ、忠作の妻てる(喜貞也)事務員五十嵐、目明し仙太、桂家豐丸(喜久三)

〔壇 劇 の 月 八〕

文樂座・年中行事
夏の興行

八月一日初日
毎夕五時半開幕

【狂言役劇】前夏祭浪花鑑、(三婦内の段)釣舟の三婦(和泉太夫)團七九郎兵衛(長尾太夫)一寸徳兵衛(富太夫)おたつ(つばめ太夫)女房お次(源路太夫)磯之亟(さの太夫)琴酒(長子太夫)義平次(千駒太夫)こつばの權(陸路太夫)なまこの八(龜久太夫)糸(團六)長町浦のどん(團七九郎兵衛)つばめ太夫(義平次(鏡太夫)糸(勝市)

中菅原傳授手習鑑(松王首實檢の段)中(和泉太夫)糸(廣太郎、綱右衛門)切(大隅太夫)糸(道八)次、卅三間堂棟由來、(平太郎住家のどん(前(南部太夫)糸(吉彌)後(島太夫)糸(芳之助、友造)切伊達娘戀緋鹿子(八百屋お七火見櫓の段(町太夫、駒尾太夫、榮太夫)糸(歌助、友平)

【人形役劇】(三婦内の段)釣舟の三婦(政龜)團七九郎兵衛(榮三)一寸徳兵衛(門造)女房お辰(紋十郎)女房お次(小兵吉、玉島磯之亟(文作)女郎琴浦、光之助、舅義平次(玉松)こつばの權(玉市)なまこの八(市松)(長町浦のどん)團七九郎兵衛(榮三)舅義平次(玉松)節子(大ぜい)(松王首實檢の段)女房

戸浪(扇太郎)女房千代(文五郎)悴小太郎(紋司)菅秀才(文二郎)下男三助(文之助)武部源藏(玉次郎)舍人松王丸(榮三)春藏玄蕃(玉松)御臺所(玉七)よだれくり(玉徳)手習子(大ぜい)百姓(大ぜい)(平太郎住家のどん)お柳(紋十郎)みどり丸(榮三郎)平太郎母小兵吉)横曾根平太郎(政龜)進藤藏人(玉七)和田四郎(玉幸)人足(大ぜい)お七半鐘のどん)娘お七(文五郎)武兵衛(門造)下女お杉(紋太郎)下稚彌作(市松)

關西大歌舞伎

八月興行

南座
一日初日
毎夕五時半開幕

【狂言】壹番目鶴屋南北原作食満南北脚色「謎帯一寸徳兵衛」三幕六場、中幕「攝州合邦辻」壹幕、大喜利食満南北新作栞茂都陸平振付「川上地蔵」常磐津連中

【配役】娘お梶后に團七女房お梶、大和屋徳兵衛、奥方玉手御前(福助)藝者お辰后に一寸女房お辰、高安俊徳丸、或る男(扇雀)息女淺香姫、そのかくし妻(成太郎)若黨彌市、盆踊りの政吉(政治郎)こし元お繼后に女房おつぎ(福太郎)女中お仲(延寶改め芦鷹)乞食の又(美鷹)盆踊りの娘(政雀)奥女

片岡我童奮闘劇

神戸
湊川松竹劇場

八月一日初日
毎夕六時半開幕

【狂言】通し狂言四世鶴屋南北作「東海道四谷怪談」

【役劇】女房お岩、小佛小平、佐藤與茂七、お岩の亡靈、小平の亡靈、娘お岩實はお岩の亡靈(我童)娘おそで、秋山長兵衛(霞仙)伊藤娘お梅(ひとし)關口官藏(八百藏)娘おまつ(我久之助)母お弓(松正)侍女翠野(我一郎)召使お静(若橋)女中お玉(一兵衛)小沙田又之丞(延太郎)僧常念(我久三郎)伊藤喜兵衛、母お熊(橋十郎)醫者尾扇(梅太郎)四ッ谷左門、佛孫兵衛(我運童)藥賣藤八、利倉屋茂平(松壽)乳母おまき(奥山)按摩宅悦、直助權兵衛(九間次)民谷伊右衛門(橋三郎)

中琴浦、合邦女房お徳、蓮女(娘お市(小鷹)木片の權助、坪井平馬(延郎)玉島兵太夫、醫者道庵(右田三郎)大島佐賀右衛門、磯がまの五郎(鷹藏改め鷹正)若黨半助、後に石塔半助、奴入平、その妻(吉三郎)三河屋義平次(大吉)大鳴團七、修行者合邦(延若)

芝 居 二

七月六日 教育會主催の文樂マチネーは第一回を六月廿九日に開演して樟蔭其他の女性を感激せしめたるが、七月六日はその第二回を開催、神子田、金蘭會、此花、御津、神戸幼稚園など約五百の女性に都下教育家操觚界界の士三百五十餘氏を招待して「加賀見山」のお初の烈女振りを見せた。

陸相の文樂見物 阿部新陸相が江の子島の工業獎勵館の視察を終へ六日三時五十分林師團長、參謀長、徳永高級副官等を隨へ文樂座入りをした。

新國劇の當説ひ 八月の角座に出演して素晴らしい人氣を博した新國劇は、十四日午後七時より當り祝ひの船遊びを舉行——。銀絲の柳に蛙の行燈で飾つた船と、刀や薙刀の行燈で劍劇を象徴した二艘の舟に一行は揃ひの浴衣で乗込み、男優は新國劇行進曲を合唱し、女優は繪日傘をかざして行進曲の新振附をおどつて道頓堀を出發し市内各川筋を通りすがり新國劇ファンを熱狂させた。

日本代表の娘さん國際人形博へ 来る九月白耳リエージ市に開催されるコングレインタナシヨナル、デ、マリオネット（國際人形大博覽會）には世界中の人の人形が顔を揃えるが、日本を代表しては文樂人形が出品される事となり、七月十七日神戸出帆の白山丸で送られた。

五郎劇の懇親會 去廿四日夜、中座打出し後會我廻家五郎劇一座は、堂島の五郎邸に於て懇親會

を催した。

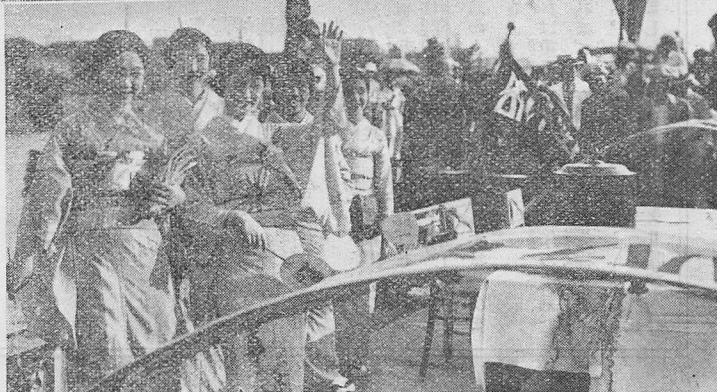
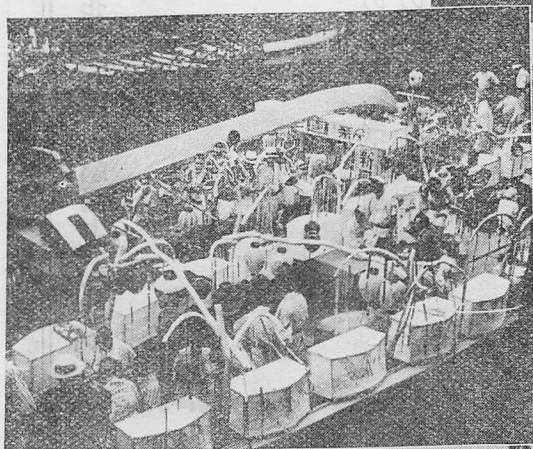
第一劇場一週年記念——壽三郎を盟主とする第一劇場も生れて滿一年本月浪花座にて記念興行をやつてゐるが、その記念會を廿九

日午後五時から北濱灘萬食堂で開いた、壽三郎を始め山田隆也、山口俊夫、藤村秀夫、元安豊、高田亘、石河薫、三好榮子、千早晶子などの俳優連に作者の田中總一郎、門脇陽一



郎がこの一週年記念、五週年記念、十週年記念、否百週年記念も出し得る程續かせたい……と、田中氏も立つて健闘一年の思ひ出なり今後のレバトリに就て語る所があつた。

蒲田花形船乗込み 八月



一日より松竹座に出演、大隅俊雄作、「センチメンタルウィフ」三景を上場中の栗島すみ子、高松榮子、谷崎龍子及び渡邊篤、河村黎吉、日守新一、石山龍嗣等は初日に先だち三十日午後五時半より、花々しく船乗込みを舉行、全大阪のファンを熱狂せしめた。



◇浪花座八月第一劇場上演臺本◇

旅

鴉

神田 榮 一

その一 劇中劇

その二 樂屋

その三 樂屋口

主なる人物

一、三桝屋瀧十郎(壽三郎)

一、その妻おまき(三好)

一、その子三太郎(政雀)

一、弟子源太(高田)

一、樂屋番留爺(元安)

一、その娘お吉(千早)

一、浪花屋藤兵衛(藤村)

一、その妻お近(石河)

その他俳優大ぜい、床山、表方等

その一 劇中劇

「伊達模倣戀染分」由留木家屋敷の場。

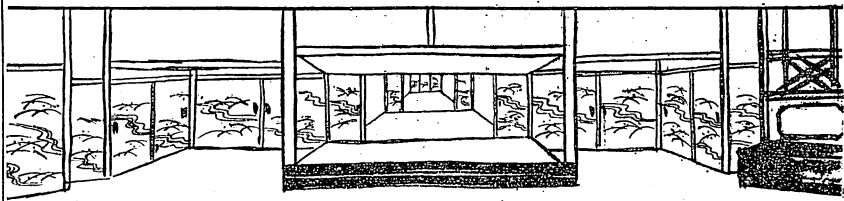
琴唄にて幕あく。

藤浪と腰元四人、婚禮の調度品を並べてゐる。本田彌左衛門が出て来る。

本田 これ、腰元衆、姫君様お腰入の御調度萬端、手落あつては相成らぬぞ。

藤浪 本田様にはお役目御苦勞に存じまする豫て用意のこれなる品々、残らずお運びましてござりまする。

本田 それは重疊、お立の時刻は午の上刻。先づそれまでは一安堵。思へば先程まではあの様に、東へ下るはいやちや〜と御意遊ばしました姫君が、御門前より呼び入れ



し、同じ年格構の女馬士奴が道中双六を御覽に入れし處。思ひの外なる御意に叶ひ、その様に面白い東へなら早ふ行くと仰せられた故、またもや御意のかはらぬ中と、このあはたゞしい旅立ちや。

藤浪 すれやあの女馬士の道中双六が。

腰元一 姫君様の御意に叶ひ。

腰元二 東下りの旅立ちを。

腰元三 御納得遊ばしましたか。

本田 これで、こ

の彌三左衛門もお迎ひに参つた首尾は上々こんな芽出たことはない。したが、氣にかゝるは姫君のお守役重の井新左衛門殿の様子。姫君今度の御腰入を、お勧めするでなく、とゞめるでなく、はていぶかしき事ぢやなあ。——これはとんだ獨苦勞。腰元衆の耳に入れるでなかつた。皆の衆手落がなれば奥へおぢやれ。

藤浪 はあ、畏まりました。本田様には先づ皆々 入らせられます。

本田、先に立つて、腰元をつれて入る。

上るりへ正面の襖おしあけしづくと、姫の守役重の井新左衛門。並べし調度の数々は、重き心の苦勞の種うちみやりつゝ、どつかと坐し。

新左衛門 誠に御幼少の姫君とは言ひ乍ら、兼て關東へ下ることはいやと申される様、あれまでに、おしえ申上げおきしに、道中双六の面白さについて心をひかれたまい、御下向御承引あそばすとは、はて情なき子供心ぢやなあ。姫君今度の御縁組は、御當家武門の一徹、のつびきならぬ御承引なれど

下向遊ばず姫君の行末かけての御不憫故、子供のおやくと申延ばし、無事を計らん存念も今となつては水の泡、今、御出立のこの期に及び、如何なる手段が浮ばうぞ、殿が御愛着の絆を思へば、虎穴に入る姫君をこのまゝにてはお送り出来ず、さりとしてお送り申さずば、武門の一徹意地が立たず、思へば心は千々に碎かれ。

身を切る思ひに腕こまねき切羽詰まりし思案投首。でるためいきもかすかなり。

御前の首尾もあてやかに、下り來りし女馬士、ついにみぬ廣き御殿の珍らしさ、疊もすべる備後表。

女馬士おさん、きよろ／＼でて來り、能き所にてすべり。

おさん え、此内はいかうすべつてあるかね。お大名の内よりもこちらの内が結構でござる。

へ結構でござると獨り言。

新左衛門 (びつくりして)、え、何をいたすぞ、今大切の思案最中、大切な腰を折つたわへ。

「思はずおさんの顔を見て、うむ、（合方になり）、斯く下賤には生立てども、いやしからざる人相骨格。是がいはいゆる泥中の蓮、砂中の黄金ならん。はてそちはよいきりようぢやなあ。

「折もこそれ次の間より、あまたの菓子を高つきに、馬士にとらす御褒美は、甘ひ女中と知られけり。

藤浪（出て来て）これ／＼おさんとやら、姫君さまへ道中双六お目にかけた其御褒美、このお菓子下さるゝ、有難う頂戴しや。

「云ひすてゝ姫の御前へ立つて行く。

新左衛門 おさんに向ひ。

新左衛門 おゝ、それはよいことをしやつた。そちや幸せ者ぢやなア。

おさん あい。まだその上に、お姫様は、このわしを、東の旅へおつれ下さるといはしやつた。

新左衛門 それは冥加もないことぢや、姫君様のお話相手、そゝうあつては相成らぬぞ道中すがら何かの用事、役人どもがとり上げずば奥家老重の井新左衛門と逢はうと申せ。あゝ、いかなる者の子かしらねども、

この様な小娘に馬士させる親の身はよく／＼のことであらうな。

「いと念頃のお詞に、おさんは前へにじりより。

おさん 由留木の奥家老重の井新左衛門さまとはおまへかへ。

新左衛門 いかにも身共が重の井新左衛門ぢや。

おさん えつ、そんなら、わしがとゝさんぢや。

「我れを忘れて小雀の、とび立つ思ひ、しがみつく、こなたはこれに打ちおどろき。

新左衛門 これや／＼、癪とぼけでもいたしたか。いかにがんぜがなければとて、そちや何を申すぞ、新左衛門そちがやうな子は持たぬ。これや、何か、今詞やさしう言ふたに依つて、それで身共を、む、はてさて子供といふものは。——新左衛門覚えはないわい。

「つき放せばむしやぶりつき、ひきのくればすがりつき。おさん 何のないこと申しませう。私が、か

ゝ様是由留木様のお腰元。重の井さまとわけがあつて長のお暇、わしや杏搦の乳母が所で、大きうなり、そのうちきけばかゝさんは、癪の病で死なさんす、その時貰ふたこのかたみ。

「とりだす服紗に身の上を、包むにあまる記念の印籠。

此印籠を證據にして、重の井新左衛門さまと言ふて尋ねよと、乳母がこれをくれました。もしお前の子に違ひない。どうぞとゝさまぢやと言ふて下さりませ。もしとゝさん、とゝさまいのう。

「呼ぶ、その聲も涙なり。始終をきいて新左衛門、扱ては違はぬ我娘、紀念の品にも覚えあり。いつそ我子となのろうか。あ、いや／＼、今日につどまるお家の大事、此身成行覺悟の手前、なまじに今名のりなば、恩愛に心亂れて未練も出よう、不便ながらもつれなくつきのけ。

新左衛門 やあ、慮外な奴め。重の井新左衛門は武士ぢやぞよ。その様な賤しいなりでとゝさんとは何のこと、馬士は子には持た

ぬわい。

おさん えつ、

新左衛門 その以前一人の子をもふけたとやらは聞き及びしが、じたいその女からして不所存もの、とても産む程なら、なぜ尋常に侍の娘らしい子は産みみせず、手足は山のこけ猿同然、形りも見ぐるしい木綿布子の馬士風情、娘といふては武士がする親でない、子でないぞ。

「いふにわつと泣き出し、是まで漸う尋ねたに、血をわけた子と唯一言、仰しやつて下さるで、去りとはむごい」とさまと、前後も忘れ泣き叫ぶ。

おさん とゝさん、それはどうよくちや。馬方はしてゐても、わしやとゝさんの子ぢや

新左衛門 とゝさんの子ぢや馬士の子は持たぬ、紀念とやらのその品を、きり／＼持つて歸りおらう。

おさん あれ、(倒れる)

新左衛門 (扶け寄らうとして)、慮外者奴が。〽不憫やおさんは泣く／＼に、沓みまつめて腰につけ、みすばらしげに後かげ見返り見返り行く姿、一足づゝに愛着

の、思ひはひとと親と子の、胸にせまつて立止まる。

新左衛門 これ、早ふ下らぬか。

おさん あい。

〽答へる聲もいぢらしく、行かんとすれば新左衛門、胸にぎつくりおゝそれよ

新左衛門 これや待て。——おさん待て——娘待て。

おさん えつ。

新左衛門 親子の名のりしてとらせる。近う参れ。

おさん あい。

〽走り寄る、身の廻しさに心も聲も暗れ渡る。

おさん

新左衛門 これや娘。

おさん とゝさま。

新左衛門 よう息災で成人したなあ。

〽親子手に手とり交し、一度に降らす涙雨、落ちて流れて池の面、澤邊の水やまさるらん。

これやおさん、今から身が娘となればその様な形では居られぬ——うむ、幸ひの此奥服、(調度の中から白のかけをとり)、さあ

是をきて仕はすぞ。

おさん そんなら是をきて下さるのかへ。

贈しい。

新左衛門 贈しいか。

おさん あい。

新左衛門 どれ、着せてつかはそう。

〽後先みや新左衛門、身形も軽い女馬士、重き二人と形り振も、木綿布子に引かえて、着せる錦は姫君の、身代りに立てる親心。娘は親が心づくしを白小袖、やがて冥途の暗着ぞと、涙は雨に振袖も、まだ結びぬ稚兒櫻、蕾ながらもしとやかにさすがは武士の娘とて姿も伊達にみえにけり。

丁度よい、丁度よい。ほんに、これが馬士にも衣裳ぢや。ハハ……どれ、次手に髪も直してとらそう。

おさん あい、／＼。

新左衛門 勿體ないが姫君の御鏡臺、これへ

おさん あい、(鏡臺を運ぶ)

新左衛門 どりや、とりあげてつかはそう。

(獨吟)

〽枝振り直せばやがて姫桃の、色香うれしき鐵棒。都の花の傍に、寫せはうつる浮世川、末を思へば杭瀬川、姿ばかりは玉椿。曇ればうきをます鏡。

新左衛門 母が此世にあるならば、この成人を何と見る、生れ落つからみづ知らず、親は錦に身をかざり、子は馬士させてせしらぬ顔。思へば無情な親心と、今の今まで怨んで居つらう。始めて名のる今日の日に、とりわけ櫛の齒もつらき、心と知らでいそくと、喜ぶものを情もなう、直に手にか

け。

おさん えつ。

新左衛門 はて、災も九年ぢやなあ。

〽八千代は花の名のみにて、無理な嵐に散る椿、よその哀れを誘ふ山嵐。

新左衛門 (髪結終えて)、お、これでよし、これでよし。これでこそ身が娘。然し重の井新左衛門と言ふ侍の娘に、自然生のおさんと言ふ名もいかぢや。侍相應調の姫と名をかへてつかはさう。おさん そのなら、と、さん、その様な立派

な名前まで。

新左衛門 む、姫ぢや、姫ぢや。今からしては調の姫。

おさん お、嬢し。

〽今死ぬる、身と露知らず喜ぶ顔を見るにつけ、さすがに猛き武士も、物の哀れを新左衛門、胸に焼鐵さる心地、可哀いや母には死に別れ、思ひ思ふて折角に、たづね来りてめぐり合ひ、名のらぬ親はそちが百倍。

新左衛門 今手にかける心のくるしさ。

〽それもお主の御爲と、今日につまる一大事。

新左衛門 (刀を抜く)

おさん あれ。

新左衛門 驕ぐな娘。見苦しいぞ。重の井新左衛門が娘の命、姫君様のお身代りに立てねばならぬ今日の一條。始めて逢ふた父が子に、可愛い命をくれといふ。この鐵石の心の忠節。そちが冥途へはなむぢや。おさん いやぢや、いやぢや。わしや殺されるのはいやぢやと、さん、どうぞ勘忍して下さりませ。折角逢ふたと、さんの、お手

にかゝつて死ぬ程なら、わしや今日の日まで尋ね捜しはいたさせぬ。

新左衛門 人の子ならばいざ知らず、我子ならりやこそ殺しもする、この新左衛門が胸の中は、八大地獄の責めに泣く。——え、い、賤しうは言つても、侍の子ぢや、覺悟いたせ。

おさん あれ。

新左衛門 これや。——今此處で邪見の双情は結局思ひの種。

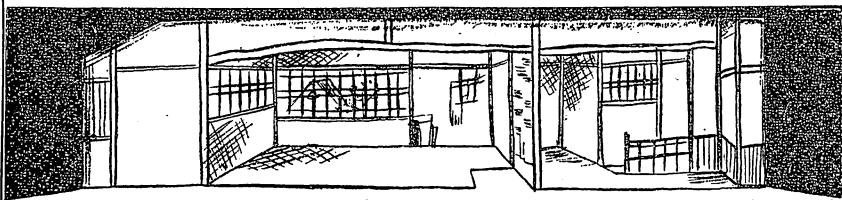
〽心の中の苦しさつらさ、まぎらす比良の朝間山、胸の煙と立のぼる。

つけ廻しになつて、首討たんとする時。

客席からお近が駆け上つておさんの身体を抱きすくめる。

演技は中断される。おさんに扮してゐる三太郎は、びつくりしてお近の手をぬけようとする。

新左衛門に扮してゐる三樹屋彌十郎は思はず、近よつて見て、びつくりする。裏方が大ぜい、舞臺へとび出して



とり静めやうとする時。
『幕だ、幕だ、幕を引け！』と聲がして、混乱中に、

その二 樂屋

三木屋瀧十郎の部屋。階段の降り口に、大ぜいの役者達が、群がって、下をのぞいてゐる。皆がや／＼言つてゐる。
やがて、人々は路をあける。瀧十郎が、非常に昂奮して上つて来る、弟子の源太がついてくる。

瀧十郎（部屋へ入つて）畜生、馬鹿にしてやがる、何て眞似をしやがるんだ。
源太 親方。

瀧十郎 うるせい。おいら、役者になつて二十年、舞臺の上でこんな赤つ耻をかゝされたのは、今日が初めてだ。
源太 親方。

瀧十郎 おいら、舞臺の藝を、命よりも大切に考へてゐるんだ。その舞臺で、その舞臺で、おいら、あんな目にあつたんだ。——えゝつ、早くとかねえか。

源太（おず／＼しながら帯を解く）——。

瀧十郎 早く部屋着を出さねえか。

源太 へえ（おろ／＼してゐる）

おまき が三太郎をつれて急いでくる。

おまき お前さん、大へんでしたね。

瀧十郎 おまき、おいら、くやしいんだぜ。

おまき えゝ、お前さんの氣性としては、それや尤もです。でも、そんないら／＼しなくつても。

瀧十郎 おいら、死ぬより耻かしい思ひをしたんだ。

おまき それやね。——考へてみれや、無法な人もあつたものです。三ちゃん、お前びつくりしたらう。

三太郎 うん、おいら、どうしやうかと思つた。

おまき 下らない人騒がせをする人だね。

瀧十郎 役者の舞臺を何と思つてやがるんだ。おい、源太、茶でも入れる、何をまど／＼してやがるんだ。

源太 へえ。

おまき お前さん、そんなに源太に當らなくつても——

瀧十郎 だまつてる、おいらの心持は、まだ納まらねえや。

野崎村の久作に扮した嵐辰十郎がはつて来る。

辰十郎 瀧さん、騒ぎだつたな。

瀧十郎 馬鹿な話よ。

辰十郎 おまきさん、お前、その女つてのをみなすつたのか。

おまき いゝえ。妾が降りて行くと、もう皆よつて表の方へつれて行つてしまつた處だつたのでみずじまひでした。

辰十郎 みねえでよかつた。みれや、やきもちの一つも言つてみたくなるだらうからな

瀧十郎 葉村屋、元談口はよしてくれ。

辰十郎 は、おこるな。おこるな、子別れがきいたんだらう。よくある奴さ、今日は、またひどくできがよかつたぢやないか。三ちゃん、お前も今日はすばらしくたぜ。

おまき 三ちゃん、親方にお禮を言ひよ、ほめて下さつたよ。

三太郎 おぢさん、有難う。

辰十郎 いゝ子だな、おまきさん、お前さんは、實に感心な人だな、瀧さんには親切だし、その三ちゃんの面倒はよくみてやるしいゝ世話女房だ。外のみる目も羨ましいや

おまき 親方、くすぐつたいぢやありませんか。

辰十郎 仲々できねえことだよ。年がら年中旅鴉で、心の中はざら／＼に荒切つてゐる

おまき 親方、よして下さい（眼で瀧十郎の機嫌を案じてゐる。）

辰十郎 は、女房のことを貧めてるんだ怒りやしないよ、は、は、は……

床山 親方、こちらだつたんですか。

辰十郎 すまねえ、一寸、油をうつてゐた。

床山 へえ、（頭をかける）

辰十郎 躡ぎは納まつたらしいかい。

床山 さあ、何しろ、えらいこつてしたね。女奴まだ表で瀧十郎さんに逢はしてくれ、逢はしてくれと大わらわにわめいてますぜ

——（口をおさえて、瀧十郎とおまきの顔をみて）御免（でて行く）

おまき（笑つて）逃なかつてもいゝのに。

辰十郎 は、二丁がきこえてくる）あ

二丁だ（出て行く）

おまき お前さん、少しは心が納まりましたか。

瀧十郎（むつかしい顔をしてゐる）——

おまき（茶を入れて）それやねえ、折角のお芝居をめちゃ／＼にされたんだものね。えでも、もういゝぢやありませんか、出来てしまつたことですもの。それよりか、三ち

やんに、何か御褒美をやつて下さいね。今日は、いつもよりはずつといゝ出来てしたからね。今も葉村屋の親方がほめて下さつたぢやありませんか。

瀧十郎 うむ、そうだ。もう下らねえことあ考へまい、三太、ほんとに今日は、よくできたぞ。何を褒美にやるかな、そうだ、今日歸りがけに、お前が先だつて中からほしがつてゐた、蟲籠を買つてやらう。

三太郎 ほんとにかい、ちゃん。

瀧十郎 うむ、買つてやるとも、一番大きな籠へ、蟲をどつさり入れて買つてやるぜ。

おまき 三ちゃん、いゝね、嬉しいだらう。

三太郎 うむ、うむ。

瀧十郎 お前、とちりやしねえか。

おまき あ、そらだ、ぢや、一寸行つて來ます。

三太郎 おいらも一緒に行くんだ。

おまき さ、おいて（源太に）お前さん、親方

源太 へえ。

おまき 三太郎の手をひいて出て行く。



源太 親方、御飯

源十郎 いらねえ

源太 へえ。

源十郎 後にする

——頭がいてえ

暫らく寝るから

枕を出してくれ

源太（へえ枕をだす）

源十郎（ごろりと寝る）

源太 ねえ、親方

源十郎 何だ。

源太 一寸お願

たいことがある

んですが。

源十郎 うるせえ

後にしろ。

源太 へえ。

舞臺では、

野崎村があ

いたらしい

樂屋番の娘

お吉がそつと出て来る。

お吉（あたりをうかがつて）源さん、源さん

源太（うなづいて部屋を出る）——

お吉 源さん、どうしに下へ来てくれないの

源太 うむ、それがね、今の騒ぎで、親方の

氣嫌が悪いものだから。

お吉 親方のことなんだろうだつていゝぢや

ないの。今日はねたら、もう明日は、皆ど

つかへ行つてしまつて逢へなくなるぢやな

いの。

源太 うむ。

お吉 ねえ、源さん、姜、このまゝ別れ

になつてしまふのは、どうしてもいや。

源太 それや、おいらだつて、このまゝ別れ

たくはねえや。だが、だが、困つたな。

お吉 どうして困るの。

源太 實はね、今日にでも親方に一應話をし

て、暇を貰つてこの土地に居残るつもりで

ゐたのだが、今まで、それを言ひだす折が

なかつたのだよ。

お吉 うそだ、うそだ、お前はそんないゝ加

減なことを言つて、もうこのまゝ、姜のこ

とは忘れてしまふ心算なんだ。

源太 そいつあひどいや。お吉つあん、おい

ら、これでも眞剣に、お前のことあ思つて

ゐるんだぜ、お前の爲なら、好きな舞臺も

すてゝしまつたつていゝと思つてゐるんだ

源十郎 ——源太、源太。

源太（びつくりして）へえ。——いけなえ、

親方が呼んでら。後で、後で、きつと都合

をつけるから、それまで待つてゝおくれよ

お吉 だましちやいやだよ。

源十郎 源太（むつくり起きる）

源太（へえ——ちやいゝね（お吉はしほくと去る）

源十郎 一寸、表まで行つて、先刻の騒ぎを

起した人はどうしたかみて來い。

源太（へえ（出て行かうとする）

表方の男が急いでくる。

表方 親方は。

源太 居ますよ。

表方 御免——あ、親方、先刻はどうも、と

んだことで。

源十郎 おいら、むかついてるんだ。

表方（へゝゝゝ、然し、あれも、親方の藝の

力ですぜ。へゝゝゝ

瀧十郎 お世辭はよしねえ。

表方 へえ、所がね、親方、どうも困りましたんで。

瀧十郎 ……………

表方 どうでも、瀧十郎さんに逢はしてくれと言つてきかねえんで、へえ、皆、手をやいて居りやすが。

瀧十郎 おれに逢ひてえ——それぢや、やつぱり畜生へえ。

表方 それがね、言つてみれば、まるで氣狂なうで、でね、親方、誠に恐れ入りますが、如何でせう、一寸だけでも逢つてやつて頂きてえんで。なあに、一寸そのお逢ひなすつてやりあ。先方の心は濟むつて譯なんで、へえ。

瀧十郎 ——いやだ。

表方 へえ。

瀧十郎 逢はねえよ。

表方 へえ、ですがそこん所をどうか。

瀧十郎 (ごろりと横になる)

表方 親方——親方(返事がないので仕方なしに降りやうとする)

お近が人々のとめるのをふりきつてとびこんで来る。

お近 瀧さん。

瀧十郎 やつぱりお前か。畜生。

お近 すみませんでした。

瀧十郎 謝つてすむと思つてやがるのか、お近、手前はおいに耻をかゝしに來やがつんだな。

お近 いゝえ、違ひます、そんなこと——瀧十郎 何がそんなことだ。おいに舞臺の上は、命よりも貴いんだ。手前おれの藝にくもけちをつけに來やがつたな。

お近 いゝえ、そうぢやない。そうぢやないその腹立なら、どんなにでも謝ります。

瀧十郎 これが謝つてすむことか、旅廻りしてゐても、足の裏にや檜の香りのしみこんでゐる江戸役者だ、なんて、なんて目に遣はしやがるんだ。

お近 すみません。すみません。思はず知らずとびだしたのです。

瀧十郎 そつちはそれですむだらうが、こつちは大切な藝をふみにじられ、おら、くやしがつて、くやしがつて。

お近 瀧さん(側へ行く)

瀧十郎 畜生(つきとばし)畜生。手前は何

度おれの面にどろをぬれや氣がすむんだ。

(蹴る)

お近 あれ。

瀧十郎 部屋(部屋)の入口を人々がのぞく。用は何だ、今更、おいに、何の用があつて逢ひに來た。

お近 來る昔のことのお詫やら——瀧十郎 昔の詫——何を言やがる。おいにとお前は、十年前に赤の他人だ今になつて何の詫だ。

お近 そう言はれても仕方のない妾ですけれど、やつぱり謝らないではゐられないのです。勘忍して下さい。あの時はどうして

もあゝしくなくては仕様がなかつたのです。家ぢやおとつあんが大病で、その日、幕しにさへ困つてゐる上に、頼みに思ふお前さんは、旅でとやしてゐていつ歸つて

くるか判らないし、たとへその歸りを待つたとて、その頃のお前さんの力では、どうして貰へる宛もないことは知れきつてゐました。妾や思ひあまつてゐる處へ、ひよつくり現はれたのが、あの人だつたのです。

以前、兩國の水茶屋にてゐた時分、いく

らかの身の上話をしてゐたので、大層親切に話をしてくれ、妾やあれ程苦勞を仕合つたお前さんに濟まないとと思ひ乍らも、とう／＼今の人の世話になつてしまつたのでした。

瀧十郎 おいら、信州の旅から歸つてくると家の中はがらあきだ。どうしたんだらうと思つてゐると、差配の處の婆あさんがまだ乳のみ兒の三太郎を抱いて來て、これ／＼でございますときかされた時、おいらの心はどうだつたと思ふ。おいら、三太郎を抱きとつて、聲をあげて泣いたんだぜ。おいらをすてゝ他の男に走るのには構はねえ。だが、然し、まだ一人歩きもできねえ三太郎をすてゝ行くとは、何て女だ。おいら、その時、お前の様な女は人間ぢやねえ。畜生だと思つたんだ。いや、その時ばかりぢやねえ、十年たつた今だつて、おいらは、お前をまともな人間たあ思つちやあねえ。

お近 これも、それも仕様がなかつたんです。いかに妾が圖々しくても、お前さんとの仲に子供まであるとは言へなかつたのです。あの子を差配のお婆さんに預けて出て行く

時の妾の心持は、身を斬られるよりつらうござんした。その辛き苦しさは、十年の間妾の心の中にこびりついて、どうしても忘れることが出来ませんでした——それや、あれからこつち、お金の力でおとつゝあんな大病も治すことができ、何不自由のない暮しはできましたが、三太郎のことを思ふと、妾の心は、いつでも、暗くなるのです。妾は自分一人で苦しんでゐる苦しさに耐えかねて、二三年前に、うちの人に、すつかりうら明した。うちの人は、妾の心持が判つてくれたとみえて、そう云ふことなら、何とかして、その子をこつちへ貰ふやうにしよう、うちでは跡取がないのだから、その子に跡をとらせてもいいとまで言つてくれました。その深切な心をきいて妾の心は急に明るくなりました。どうにかして、もう一度お前さんに逢ひ、事を分けて話をしたいと、それからこつちお前さんの行衛を捜しましたが、ずつと、旅から旅を廻つてゐるらしいとばかりで、かいくれ捜す宛もなくなつたのです。それが今度、お伊勢様から上方見物の旅に出て、こゝまで來ると

計らず、この小屋の前で、お前さんの帳をみたんです。三樹瀧十郎、その名前の帳をみた時、妾は何だか嬉しい様な、また怖い様な氣がしました。そして、とう／＼、一人でこつそりみに來たのでした——お願ひですどうぞ、三太郎に逢はして下さい。そして、そして、あの子を妾の子供にして下さい。

瀧十郎 お近、そいつあ、あんまり勝手すぎる言ひ分だぜ、お前に逃られた後のおれがどうして、あの子を育てゝ來たと思ふ。それや、おいらは、お前に逃られる様なしがねエ下廻りだつた。腕もねえ、名もねえ、金もねえやくざな男でも、そうなつてみれば、意地がでらあ。よし、どんな苦勞をしてもこの子は立派に育てあげ、逃たお前をみかへしてやると、おいら、ぐつと心を定めたんだ。それからこつちは芝居の行きかへりは勿論のこと、片時だつて、あの子を手離したこたあねえんだ。忘れもしねえやひどい粉雪の降る日だつた、役が上つた、歸る途中で、抱いてゐる三太郎が、急に火のついた様に泣きだすぢやねえか、いくら

あやしても泣きやまねんだ、それも道理よ、幕方から何もたべさせてなかつたんでひもじかつたのよ。おいらあやしながら謝つた。赦してくれ、三太。お前にひもじい思ひをさせるのはこのおれが悪かつた、だがな、三太、ちゃんもまだ晩飯はくつちやぬえんだぜ、食ひたくても食ふ錢がねえんだ。赦してくれ、赦してくれ——おいら、泣く様にしてそう言つた、だが、三つ四つの子供にどうしてそれが聞き分けられよういつまでたつても泣きやまねんだ。しまひにや泣く聲さへもかれてくるぢやねえか。おいら、たまらなかつた。おいらも一諸に、泣いたつけ。それから先は、乳貰ひよ、乳をのませて貰つて外へ出ると外はやつぱり粉な雪よ。三太を、懷へぐつと抱きしめて、頭で襟を押えてゐると、首筋へ雪がふきこんで、おいらの身體は氷の様にひえるんだ。寒かつた。苦しかつた。つそ、三太と二人で死んでしまひてえと、幾度思つたことか判りやしねえ、雪の日はかりぢやなかつた。雨の日も風の日も、その苦しみは同じだつた。然し、おいらは、

一生懸命だつた。齒をくひしばつて我慢した。その辛抱が通じたか、三太郎は、どうやら成人した。そして、このおれも旅芝居ながら、書出し處の役者になれたんだ。舞臺で耻をかゝられた今日の怨みはさらりと水に流してやる代り、お前と逢ふのも今かぎり、勿論三太にやお袋と呼ばせることならねえんだ。

お近 生れ落つから見づ知らず親は錦に身をかざり、子に馬士させてそしらぬ顔——今の重の井新左衛門の臺詞が妾の胸にはこたへました。どの様な、どの様なつぐなひでもします故、どうか、あの子を、三太郎を

瀧十郎 その泣き言はもう遅い。十年この方手鹽にかけた、たつた一人の子寶を、お前の様な無慈悲な親に渡してやる氣は、更々ない、その話ならもうするな。もう歸つて貰はうぜ。

お近 瀧さん、それぢやあんまりです。昔のこととはこの様に詫びてゐるのに、赦してはくれないのですね、長い間の苦しみを、今お前さんの前にぶちまけて、赦して貰ひた

いばつかり、耻をしのんで來ましたのに。

瀧十郎 そつちの苦しきよりはおれの身だ、おれにとつちやお前と言ふ人間は、あの時以來敵なんだ、もういゝから歸つてくれ。

お近 瀧さん(泣く)

瀧十郎 えゝい、泣くねえ、泣くねえ、今更そんな涙が何になるんだ。

表方 表方に案内されて、浪花屋藤兵衛がくる。

表方 旦那、こちらでございます、へえ、どうもむさくるしい處でございまして。

藤兵衛 御苦勞、御苦勞。

表方 それぢや、一寸、私から、お神さんへお傳へいたしませう。

藤兵衛 うむ、そうしてくれ。

表方(入つて) もし、お神さん。

お近 はい。

表方 あの、旦那がおみえでございます。

お近 あ、お前さん。

藤兵衛 お近、捜し物がみつかつたそうだな(表方に金をやり)お禮だ。

表方 へえ、これは大きに有難うございます(去る)

藤兵衛 御免よ（入る）

瀧十郎（むつとしてゐる）——

藤兵衛 瀧十郎さんと言ふのはお前さんか。

だしぬけに驚かすが、私は藏前の浪花屋藤兵衛だ、野暮な昔話はよしにして、どうだね、瀧さん、お近の子供をこつちへ渡しちやくれめえか。

瀧十郎 お近の子供、へえ、そんな子供があまりしたかね。

藤兵衛 それ、それが野暮と言ふものだ。うちや跡取がなくて弱つてゐる矢先、お近に一位一什をきいたので早速、引取つてやりてえ氣になつたのよ。子供の幸せにもなることだ悪い様にはしやしねえよ。

瀧十郎 お言葉でござんすか、そいつあ御免戴ります。いくらしがねえ旅役者風情でも、倅は、幸せに暮して居りやすから、御安心なすつておくんない。

藤兵衛 瀧さん、こいつあおれが悪のかつた氣を悪くしておくんなさるな、頭ごなしに言つた様で言つたこつちか耻しいや。そんなつもりぢやねえんだ。男と違つて女つて

奴は、どうしても生んだ子供に未練があると言ふものだ。お近が可哀想だから、お近にやつて欲しいのだ。

瀧十郎 お斷り申します。

藤兵衛 そう一徹に言ふものぢやねえ。私は宿で一一杯やつてゐると、お近からの迎ひの使だ。それでかうしてやつて來て、浪花屋藤兵衛が、頼むんだ、うんと言つて貰ひてえな。

瀧十郎 お前様方は、何不自由のないお金持こちとら風情とは、住んでゐる世界が違ひます、そのお話はおよしなすつておくんない。

源太が出來て來て様子をうかがつてゐる——やがて、顔色をかへて降りて行く。

藤兵衛 それぢや何かい、お前さんは、十年前のことを根に持つて、そんな頑くたことを言ふのかい。子供は母親につくものと、昔から相場はきまつてゐるぢやないか。

瀧十郎 女親にやつて居ります。この一座で、下座の三味線をひいてゐるあつしの今の女房が、立派な母親になつてゐるまじさ。

藤兵衛 それやそうでもあらうが、そこはどうかうしても生みの母を育ての母、どんなに可愛がつた處で血のつながりはねえ譯だから

瀧十郎 旦那、あんまりなことをおつしやるものでござんすね。あつしの女房はあつしの女房、おせつかい口のきゝ方は、御身分がらぢやござんすまい。

源太とおまきと三太郎がくる。

三太郎は構はず部屋へ入る。

三太郎 三太、こゝへ來ちやいけねえ、下へ行つて、源太、源太。

三太郎 ちゃん、おつかあが心配してゐるよ

瀧十郎 心配することはねえ。そうだ、構はねえから、こゝへ呼びな。

三太郎 うん、おつかあ、ちゃんが呼んでら

おまき（おどくして入る）——

瀧十郎 おまき、何を遠慮してゐるんだな、もつとこつちへ入りな。

お近 瀧さん、この三太郎を。子供は正直だ、御覽なせえ、お前さん方の側へは行かうとしねえや。

お近 三太郎、こつちへおいで、おつかさんに一寸抱かれておくれ。

三太郎（おまきにしがみつく）——

お近 瀧さん、どうか、どうかお願ひだからその子に、妾をおつかさんと呼ばせて下さい、どんな、どんなつぐなひでもしますから。

瀧十郎 子供にきいてみるがいゝのさ。三太郎前のおばさんをおつかさんと呼んでみな。

三太 いやだい、ちやんの舞臺の邪魔をする様な人、誰がおつかあなんと言ふものか。

藤兵衛 瀧さん、かうなれば、私ものりかつた丹だ、どれ程でもお金を出しますからどうか、その子をゆずつておくんない。

瀧十郎 何、金を出す。

藤兵衛 旅の途中の事故、今手許には、三百兩位しか持合はさねえが、急飛脚を差したてゝ、すぐに、江戸から取り寄せてもいゝ望み通り差上げるから、それで承知をしておくんない。

瀧十郎（心中憤りを耐へてゐる）——
藤兵衛 今持合せのこの金は、この場で手渡

ししようから、どうかこれで納まつておくんない。

瀧十郎 ——もし、浪花屋の旦那、あんまりな真似をしておくんないな、みすほらしい旅鴉でも瀧十郎は、人間だ、金で人情を賣りやしねエ、えゝつ、けがらはしいやいこんなものに眼のくれる男とみそこなふない。（金を叩きつけて、くるりと鏡臺に向ふ）

おまき お前さん。

瀧十郎 とちるといけねエ、三太の顔をしてやりな——源太、衣裳を出さねエか（目もくれずに、鞘當の山三の顔にかゝる）

お近は泣き伏す。
藤兵衛は、阿然としてゐる。

源太は、自分の鏡臺に坐つて、お

三太は、自分の鏡臺に坐つて、おまきに顔をこしらへて貰つてゐる野崎の淨瑠璃が聞へてゐる——

その三 樂屋口

陽はもう落ちてゐる。
役者や裏方が歸つて行く。
次の旅にでる衣裳行李や小道具が

運び出されてゐる。
お吉が一人、柳の木の下で、しょんぼりとしてゐる。

お君とお品が、風呂の歸りに通りかゝる。

お君 あら、お吉つあんぢやないの、どうしたのさ。

お品 大そう洗んでおいでだね。

お君 あ、そうだ。今日はお芝居が千秋樂なので、それで、洗んでゐるんだね。お吉つあん、それで、あの人は、どうおしだえ。

お品 あら、泣いてゐるの。

お吉（顔をかくして）——

お君 あの人は、やつぱり旅へ立つちまふのお吉——えゝ。

お君 薄情な男だね。あんなに嫁しがらせを言つてゐたのにね。やつぱり役者は薄情なかね。それで、どうしたのあの人は、もう行つてしまつたの。

お吉 いゝえ、まだゐるの。——でも、でも妾——

お君 いゝわ、そんなことなら、妾が、源さんにかけ合つてあげやうか。

お品 あら、そんなこと。

お君 それだから、あんたはいけないのさ、もつと押し強く當らなくちや大概の男つてものは、逃るものさ。ねえ、お前さん。

お品 まあ、大そうな見幕なこと、お君さんは、その手でいつもいゝことをおしだねえお君 妾や内氣だから、自分のことなら愧かしくて言へないが、人のことなら、どんなおせつかいでもできる性分さ。

留爺 樂屋番の留爺が出て来る、

留爺 お前だな、こちらの大事なお吉につまらねえ、入れ智恵をする奴は。歸れ、歸れこんな處にまごゝしてゐやがると、たゞはおかねえぞ。

お品 お君さん歸りませうよ、歸りませうよお君 だつて、妾や、お吉つあんの今の話を留爺 こら、まだ行かえてか。

留爺 二人、聲を上げて逃去る。

お吉 お吉あんな奴等の眞似はするてねえぞ

留爺 何だよ。

お吉 妾——

留爺 またあの源太のことか。いけねえ、いけねえ。おらおら、かうして、長年、芝居

で働いちやゐるが、役者は大嫌ひだ。あんな生白の小僧ツ子と乳くり合ひやがると承知しねえぞ。——いゝか。

留爺 そんな處でぐずぐずしてねえで、申へ入つて、ちつとあ手傳へ、今夜の中に部屋掃除をしてしまふんだから（申へ入る）

お吉（まだしよんぼりとしてゐる）

源太（そつと出て来る）——お吉つあん。

お吉 あ、源さん。

源太 困つたね。

お吉 きいてゐたの。

源太 うん。

お吉 どうしませう。

源太 どうしやうな。

お吉 親方には話したの。

源太 まだなんだ、今日はあのどきき騒ぎで駄目だつた。

お吉 それぢや、このまゝ別れるの。

お吉 源さん。（泣く）——

源太 ——よし、思ひきつて、これから親方に暇を貰はう。

お吉 えつ、本統。

源太 この土地に残つてゐさへすれや、いつかはきつと、お父つゝあんの心を和らげる事も出来る言ふものだ。

お吉 嬉しい、きつとだね。源さん。

源太 誰がうそを言ふものか。——ちつとの間待つてゝおくれ。（行かうとする）

藤兵衛とお近がくる。

お近 あ、もし。

源太（ふり返つて）へえ。

お近 親方は、もうお歸りなさいましたか。

源太 いゝ、いゝえ。

お近 お前さん、まだ歸りませんとさ。あゝ間に合つてよかつた。

藤兵衛 そいつはいゝ都合だつた。先刻の詫びやらお願ひやら、もし、お前さん、一寸親方に取次でおくいなさん。

源太 へえ、（行かうとする）

源太 源十郎とおまきと三太郎が出て来る。留爺が送つてくる。

留十郎 とつとあんな、また當分のお別れだ

今度逢ふまで達者でくらしなよ。

留爺 有り難う存じます、親方もどうぞ、お

大切に。

瀧十郎 有難うよ。

おまき 留さん、色々お世話になりましたね

留爺 おかみさんもお達者で。

源太 親方。

瀧十郎 源太、何をしてゐるんだ出かけるぜ

源太 親方。(お近達の方を指さす)

瀧十郎 (ちろりとみて、構はず) お、お吉坊

また淋しくなるな。

三太郎 姉ちゃん、左様なら。

瀧十郎 —— 源太、今日はおいら、氣嫌が悪

くてすまなかつたな。それでも、お前がお

いらに話してえ心の中は、ちゃんと知つて

ゐるんだぜ。どうだ、當分、この土地に残

つてゐねえか。

源太 えつ (思はずお吉と顔を見合せる)

瀧十郎 とつゝあん、こいつあ、おいらの子

飼の弟子だが、お前ん所で、暫らく預つち

やくれまいか。

留爺 え、何ですつて。

瀧十郎 若い者の心をふみにじつてやりたく

ねえんだ、三樹瀧十郎が改めて、とつゝあ

んに頼まあ。なあ、こいつあ旅役者渡世は

してゐるが、心は清く育つてゐる。目をか

けてやつて貰ひてえんだ。

留爺 親方、判じましたぜ。親方のお聲が、

りなら、何の案じることゝねえからな。

瀧十郎 そう貰かつてくても困るが、お

いら、若い時分に咲いた花を、無惨に散ら

せたくはねえだ。あ、おまき。

おまき 本統にね。

瀧十郎 源太、後で、一度宿まで来てくれ何

なら、二人で一緒に來ねえな。ねえ、とつ

ゝあん、お吉坊を一寸借りるぜ。

留爺 よるしふござりますとも。

お吉 親方、御恩にきます有難うござります

瀧十郎 禮を言ふにや當らねえ。なにあに、人

間、若い中が花だよ。それちやとつゝあん

留爺 御機嫌よう。

おまき 左様なら。

三人行かうとする。

藤兵衛とお近が進みよる。

藤兵衛 もし、瀧十郎さん、先刻のお詫に参

りました。もう一度話を聞ておくんない

お近 どう思つてもあきらめきれないこのつ

らさを、もう一度だけ、きいては下さいま

せんか。

瀧十郎 浪花屋の旦那、話は先刻うちきりま

した。これ以上のお話は無駄でございます

それに、あつし達は、明日は早立これから

宿へ歸つて親子三人水入らずで、飯を食ふ

處ですから、これで御免を蒙ります。

藤兵衛 先程の失禮は、重々お詫致します、

このまゝお別れしてはあんまり本意ない私

達二人。

瀧十郎 浮草の様なこちとらだが、芝居をす

まして歸る時の心持は、人様には判らねえ

樂みがございます。あなた方はあなたの方

住んでる世界違ふんてさ。折角の楽しい夢

を破つておくんなさるな。どれ、おまき、

出かけようぜ。三太、今日は、おつかあに

おぶつて貰ふ番だつたな。

三太 うん。歸り途で蟲籠を買つておくれよ

瀧十郎 よし、よし。買つてやるともさ、お

まき、おぶつてやりな。

おまき はい。(おぶる)

瀧十郎 源太、お吉坊、待つてゐるぜ。――

三太 ちゃん、いつもの唄を歌つておくれよ

瀧十郎 うむ―― (唄ふ) 坂はてるゝ鈴鹿

は曇る。相の土山涙雨。

唄ひながら、三人仲睦ましく入る

編輯後記

松本君が、先月の半すぎに、突然京都勤務になつたために、本號から僕が編輯を引き受ける事になつた。

各座の陣容が決定したのも例月よりは少し遅かったが、俄かに、編輯事務やら其の他を引きついで、大まごつきにまごついたが、何うやう、編輯後記を書く所まで漕ぎつけた。

諸先生の御惠稿に接し乍ら、一夜漬式の編輯に終つた事を幾重にもお詫びいたします。

九月(盆替り)となれば愈々下半期に於ける劇界の緊張期に入るのだ、僕等は茲に、九月號の奮闘を、讀者諸君に約して擲筆します。(壽美多郎)

暑 中 御 伺

松 竹 宣 傳 部

松	村	西	田	塚	大	成	福	住	田	鳥
本	上	田	中	本	橋	山	井	田	中	江
泰		宏	滿	寬	照	桂	賢	冬	牛	鎮
三	勝	彦	郎	夫	三	郎	一	郎	也	

昭和五年八月一日發行
月刊『道頓堀』第四十七輯

- ◆ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。
- ◆ 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
- ◆ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市中區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢(郵銀五厘)

昭和五年七月二十日印刷
昭和五年八月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹土地建物興業株式會社

編輯者 鳥江鎮也
發行者 松本米藏

大阪市東區船場南之町一丁目
印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹土地建物興業株式會社
發行所 道頓堀編輯部

電話(一三四〇番)
六六六五番

八月一日發行・第五號出づ

新興演劇

歐・華劇作壇の大家の作品を讀め

——定價金參拾五錢——

——口繪——

三國のフレイザ夫人

——戲曲——

潘金蓮(五幕)

歐陽子倩
胡兒譯

前のフレイザ夫人(三幕)

セン・ジョン・アー・ギン
山田松太郎譯

林檎(ラヂオ・プレー)

豐岡佐一郎

水茶屋の女(四場)

山上貞一

——隨筆・小論文——

『前のフレイザ夫人』に就て

山田松太郎

道頓堀散歩

附銀座の噂

豊岡佐一郎
鳥江貞一
山田上義
森井駿二

表紙繪・カット

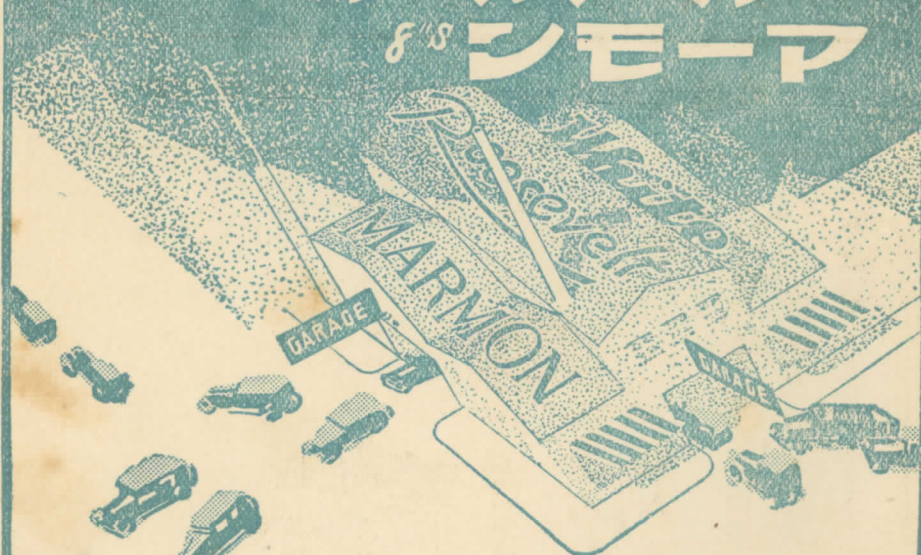
森直次郎

新興演劇社

大阪市東區
船越二丁目

發行所

トイワホ トルベズール ンモーマ



ノ式新最共車兩ハ トルベズール・ンモーマ
 世ハ格價ガスデ車動自ノ比無牢堅テシニ美優デ車箱汽八
 スデ車イ安ノー界
 牢堅スマリア種二ノ箱氣六及箱氣四ハ 車トイワホ
 アモ車ルア、ツリ走ヲ哩萬余十七今只デ一界世ハ事ルナ
 スマリ

店理代總西關 ンモーマ
トイウホ
スターモ國帝

日丁五町修達區東京市板大
 番八八九一局本話電
場エスビーサ
 日丁五町元岡市岡港市板大
 番〇七三二西話電

昭和五年七月三十日 印刷
昭和五年八月一日 發行
昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可

いよ番一に止ケヤ日

ムーリク美ブラク

産國良優



は粧化薄な品上

ソビブラク

第五年八月號

一部金參拾錢